

不本意ながら女装して
ダンジョン配信をして
たら、女勇者が厄介ガ
チ恋勢になっていた

こがれ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法少女スキルによって、美少女に変身してダンジョン配信を行っている小峰詩音。詩音は貧乏大学生活から抜け出すために配信活動をやってきたが、いまいち伸び悩んでいた。そこに超人気配信者の勇者が現れるが、彼女は詩音の厄介ガチ恋勢だった。

ハルジオンちゃんのファンアート頂きました！

<https://twitter.com/kogare771/status/1631579416395681792?ss=20>

読んでくださってありがとうございます。

こちらは書けたものから順次投稿しています。

なので、感想やここすきなどを頂けると、今後の参考にできるため嬉しいです。

すみません。

カクヨムに投稿してるの明記してませんでした。

<https://kakuyomu.jp/works/168173306528>

24197572

目次

魔法少女(♂)とガチ恋勇者とクソトラップ
プダンジョン

第1話	1
第2話	7
第3話	13
第4話	24
第5話	28
第6話	35
第7話	45
第8話	52
第9話	60
第10話	68

第1話	74
第2話	84
第3話	93
第4話	107
第5話	117
第6話	126
閑話 とある兄の妄想	137
第7話	144
第8話	151
第9話	159
第10話	167
第11話	174
第12話	185

3話	296
2話	287
1話	276
未定	
263	
キャラクターオーディション2	
キャラクターオーディション	253
トlf	242
おまけ：強制ラブコメトラップ別ル	
第26話	231
第25話	219
第24話	208
第23話	197

第8話	329
バカップル	
第7話	323
月の石	
第6話	316
地産地消NTR	
5話	310
4話	304

魔法少女（♂）とガチ恋勇者とクソトラップダンジョン 第1話

まずは聞いてほしい。

弱冠20歳の大学生。小峰詩音こみねしおんは女装が好きなわけでも、女体化願望があるわけでもない。

これには深海のごとき深い理由があり、仕方がないことなのだ。

「……いや、ボクは誰に言い訳してるんだ」

おそらくは自分自身にだろう。

詩音は視線を上げる。

レンズのついた丸い球体が浮かんでいる。

その上には半透明の画面が投影されていた。

「今日も、この時が来てしまった」

詩音は遠い目をしながら、その画面を見つめる。

そこには配信待機画面。500人ほどの視聴者が雑談をしている。

視聴者が待っている。始める準備をしなければならない。

仕方がない。

詩音は小さくため息をついた。

「やるか」

そう呟くと同時に、詩音の体が輝きだす。

すぐに変化は起こった。

背は少し小さく、体は全体的に丸みを帯びていく。黒い髪は桜色に染め上がり、長く伸びていく。

そして花でも開くように、服がひらひらの物に置き換わっていき、長い髪はツインテールに結ばれる。

光が収まると、そこには詩音の面影おもかげが残りつつも、同一人物とは思えない少女が立っていた。

少女となった詩音は、画面に手を伸ばし、配信を開始する。

「おはるじおーん。魔法少女系探索者のハルジオンです。今日も、のんびりダンジョン探索をやっついていこうと思います」

『おはるじおーん』『おはるじおーん』『おはるじ』

と、いくつものコメントが流れていく。

もはやお決まりのあいさつだ。視聴者も当たり前のように返してくれる。

魔法少女系探索者ハルジオン。

何言ってるんだこいつ。

詩音自身もそう思うが、それが詩音のもう一つの顔だ。

もう一度、言わせてほしい。

好きでやってるんじゃない。仕方がないんだ。

一か月ほど前まで、詩音は普通のダンジョン配信者だった。

元の男の姿で、ダンジョンに潜り、モンスターを倒す。

それはとても普通で、だからこそ伸びなかった。

それはもう、まったく視聴者がつかなかった。

視聴者数は常にゼロ。

たまに数字が増えたかと思ったら、すぐに減る。

そんな配信を半年ほど続けて、心が折れた。

そして、つい魔が差した。

詩音に発現していた謎スキル。『魔法少女』

そのスキルを使うと少女の姿に変わることも、変身すれば魔法の威力が向上することも分かっていった。

これを使えば、他の配信者と差別化できるかもしれない。

ためしに一回だけ。

新しいアカウントを作って、配信をしてみるだけ。

たった一回だけ。

だがそれは麻薬だった。

数字が増えた。視聴者が増えた。

それは詩音の脳に喜びを流し込んだ。

そうなったら、もう男の姿で配信なんてやってられない。

どんどん増えていく視聴者に喜んだ。

今では収益化も目前だ。

金が欲しい。

働きたくない。

もう食べられる雑草で飢えをしのぐのは嫌だ。

(そのためなら、魔法少女になってもいいさ！)

決意を固めながら、ハルジオンはコメント欄に目を向ける。

『おはるじおーん。今日もハルちゃんの顔が見れて嬉しい。最近、ちよつと疲れ気味だったけど、ハルちゃんのおかげで毎日楽しく生きていられるよ。ありがとう。愛してる。誰よりも愛してるよ。本当だよ。だからハルちゃんからも愛してるって言ってるよ。』

しいな。なんて、ハルちゃんを困らせるようなこと言っちゃだめだね。今日も私とハルちゃんにとつて楽しい一日になることを願ってるよ』

少しくじけそうになった。

(ま、まあ、こういう熱意ある人が長く応援してくれるんだらうな)

ハルジオンはコメント欄から目をそらし、あたりを見回す。

そこは広い平原。少し遠くにオークが居るのが見える。

「さっそく一休居たので、いつも通り吹き飛ばしましょう」

ハルジオンはマジカルなステッキを構える。

撃つのは爆発魔法。

なぜかこれを使うとコメントが盛り上がる。みんな爆発が好きなのだろう。

杖の先端から赤い光線がほとぼしる。

それはオークの近くに着弾すると、爆音とともに爆発を巻き起こす。

爆風によって服がはたためく。

もはやオークは消し飛び、そこには小さなクレーターができていた。

『キターー!!』『いい つ も の』『ありがたやー』『今日も素晴らしいね。ハルちゃんの

純真さが表現されてる』

やはり、なぜかコメントが盛り上がっている。

この魔法の何が良いのか。いまいち詩音には分からなかった。

(まあ、喜んでるならいいか)

そう思い、コメント欄から目を離そうとした時だった。

目についてしまった。

『今日のパンツは白なんですね』

バツと、ハルジオンはスカートを見る。

それは店員に勧められるままに買った短いスカート。

少しなびいただけで、中が見えそうになる。

『あ』『まずい』『バカヤロー』『せっかくハルちゃんのパンツ拝める瞬間を、なに余計

なこと言って邪魔してるんですか』

爆風、短いスカート、なぜか盛り上がるコメント。

「二度とこんな魔法使うか!!」

やっぱり、魔法少女なんて辞めたい。そう思うハルジオンだった。

第2話

そもそも、詩音に魔法少女スキルが発現したのは一年ほど前だった。

「なんだ、このスキル？」

スマホのステータス管理アプリには、『火魔法』『水魔法』『魔力』『魔力制御』と言った、見慣れたスキルが表示されている。

しかし、その一番下には『魔法少女』という見覚えのないスキル。

そもそも、こんなスキルが存在すると聞いたこともない。

『魔法少女 スキル』などとネットで検索しても、出てくるのはゲームの攻略サイトくらいだ。

ネットで調べれば大体わかる。

それが染みついた世代である詩音としては、検索しても出てこないことに驚いた。人生のコンパスを失った気分だ。

そもそも、このスキルは大丈夫なのだろうか。

体に害があったりしないのか。

発現したスキルが体に悪いと言うのは聞いたことがないが……絶対はない。

どうしたものかと迷った末に、詩音は覚悟を決めた。
スキルを発動させてみる。

使ってみれば分かるはずだ。

詩音は洗面台の前に立つ。

ガラスには詩音が写っている。

少し長めの黒い髪、猫のようにシユつとした顔は中性的だ。たまに女性に間違えられることを、本人は気にしている。

体におかしな変化が起こったら、すぐに止める。

スキルの発動のさせ方は、なぜか感覚的にわかる。

詩音は身構えながら、スキルを発動させた。

変化なんて生易しいものじゃなかった。

突然、体中が輝きだす。

それこそ魔法少女物の変身シーンのように。

「あ、あれ、止まらない!?!」

焦ってスキルを止めようとしたが、そもそも止め方がわからない。

止められるなら感覚的に理解できるはずなので、無理なだろう。

あつという間に、体のあちこちが変化を起こす。

そして光が収まると、そこには一人の少女が立っていた。

ただし、服や髪留めまで生成してくれるわけじゃない。

つまり、長い髪をたらしした裸の少女が立っていた。

「い、いめんなさい！」

詩音はとっさに目をそらすが、鏡の中の少女も同じ動きをする。

自分が発した声も、いつもより高い。

「あ、これボクだった」

鏡に視線を戻す。

自分の体を見ているだけだが、気恥ずかしく局部を隠してしまう。

「と、とりあえず服を着よう」

この後に分かったことだが、服は変身後に着ていたものが、変身するたびに出たり消えたりするらしい。

○

詩音は魔法少女スキルを試すために、近場のダンジョンに入った。

薄暗い洞窟のダンジョンだ。岩壁に生えたキノコが光って、あたりを照らしている。

現在は男の姿。

詩音は一般的に、『魔法使い』と呼ばれるタイプのスキル構成をしている。

しかも、全属性持ち。

これはとても珍しく、日本中探しても数人しかいない。

スキルと言うのは努力によって発現できることもあるが、基本的には才能だ。

そんな中で全属性持ちの魔法使いと言うのは、とても恵まれた才能……のはずだった。

詩音は使い慣れた金属製の杖を構える。

遠くにいるゴブリンに向かって魔法を放つ。

小さな火の玉がヒョロヒョロと飛んでいくと、ゴブリンに当たって小さな爆発を起す。

しかし絶命するまでは至らず、やけどに苦しんだゴブリンは怒って詩音に向かって走り出す。

それに向かって、風の刃を放つ。次に岩の弾丸。雷撃。水、氷、……

倒した時には、ゴブリンには切り傷や打痕だこんが体中にできていた。

「やっと倒せた……」

全属性という恵まれたスキル。

だが、致命的に威力が足りなかった。

通常であれば、魔法系のスキルが発現した者には、魔法の威力を上げるスキルが発現

する。

しかし、詩音には出なかった。

そんなわけで、ついたあだ名は『持ち腐れ』。

こんな役立たずはこのパーティーにも入れてもらえない。

日々、ゴブリンやスライムなどの弱いモンスターを狩り続ける生活が続いていた。しかし。

詩音は魔法少女スキルを使って変身する。

今度は服を着ている。ぶかぶかのパーカーだが。

変身すると感じる。

魔法の威力が上がっている

さっそく魔法を試してみようと、ワクワクしながら杖を構えた時だった。

「キヤーー!!」

近くで悲鳴が聞こえた。

なにごとかと驚きながらも、詩音は声のしたほうに走り出す。

そこには腰が抜けた少女と、それを襲おうとしているオーク。

詩音たちが居るのはダンジョンの浅いところだ。普段であればオークなんか出てこない。

オークはゴブリンに比べればずっと強く、詩音もまともに戦ったことはない。普段なら逃げ出していたかもしれない。

だが、変身している今なら倒せる気がする。

詩音はゴブリンに使ったのと同じ、小さな火の玉を出す魔法を放った。杖から放たれたのは、巨大な炎球。近くにいただけで肌がひりつく。

それは勢いよくオークに飛び掛かると、一瞬のうちに消し炭に変えた。後に残ったのは、マグマのように赤く輝く床だけ。

(ま、魔法少女ってスゲー——!!)

この時はまだ、詩音は魔法少女スキルを純粹に喜べた。

第3話

無事に配信が終わったあと、ハルジオンは草原を歩きながらスマホを眺めていた。

「いまいち伸びなくなってきたな」

見ているのは配信用のチャンネル情報。

ハルジオンとしての配信活動を始めたのは一ヶ月ほど前から。

そこから順調に視聴者は増えていき、収益化も目前となった。

しかし、ここでチャンネルの成長率が鈍化してきた。

「やっぱり単調なのが悪いのかな」

ハルジオンの配信内容はダンジョンに入って、モンスターを倒すこと。

ジャンルとしては雑談系に類するが、ハルジオンは会話が得意な方ではない。

結果として、ただ淡々とモンスターを倒すような絵面が続いていた。

唯一の強みは、魔法少女状態での可愛さだ。

ハルジオンはスカートがめくられて、盛り上がっていたコメント欄を思い出す。

そこに深淵の邪神がささやいてきた。

肌の露出を増やせば、もっと伸びるのでは？

「いやいや、駄目だ！ 良くない。なんか良くないよ！」

ブンブンと頭を振って考えを振り払う。

伸びたツインテールが、わさわさと震えた。

だが、他に解決策も浮かばない。

どうしたものかと悩んでいるうちに、ダンジョンの出口についた。

地中から伸びた、半透明な木の根っこ。

それが輪っかを作り、その中にぐるぐると青い渦巻きができている。

ハルジオンはそこに入っていく。

出た場所は先程までの広い草原と違って、コンクリート製の大きな部屋だ。

部屋の角には監視カメラが見える

ダンジョンの入り口から、モンスターが外に出ないように警備されている。

出口には大きな鉄扉があるが、現在は開放されている。

その手前には駅の改札口のようなものがある。

ハルジオンはそこにカードをかざしながら、外に出る。

外は普通のビル街。

スーツ姿の人々が行き交っているが、特にハルジオンを気にした様子もない。

さて、さっさと帰ろうか。とハルジオンが歩き出そうとしたときだった。

「あなた、ハルジオンちゃんだよね!？」

ハルジオンは配信者としての名前を呼ばれて、びくりと体を震わせた。出待ちと言う文化がある。

配信者が収録しているダンジョンを特定して、その入り口で配信者が出てくるのを待つ行為だ。

一般的にはマナー違反とされているが、絶対に禁止されているほどではない。受け入れている配信者も居る。

だが、ハルジオンは自分が出待ちされる立場になるなんて考えていなかった。どうしたら良いのか分からない。

少なくとも、下手に接触するべきじゃないだろう。

正体が男だとバレたら拡散されるかもしれない。リスクは負うべきではない。

そう考えたハルジオンは、

「あ、なんで逃げるの!？」

とりあえず走り出した。

幸いなことに、魔法少女スキルは身体能力も上げてくれる。

「ちよつと、話を聞いてよー！」

相手が追いかけてくる。

仕方がない。

ハルジオンは風魔法も駆使しながら跳びあがる。

着地点はビルの屋上。

そこからビル伝いに逃げればいい。

そう思っていたのだが、

「ハルちゃん、こんなところに勝手に入ったらダメだよ。怒られちゃうよ?」

「え!?!」

相手も跳びあがりビルの屋上に上がってきた。

しかもハルジオンのような魔法の支援は無しで。

こんなことができるのは、相当な実力を持った探索者。おそらくは前衛系。

なぜそんな人が出待ちをしていたのか。

ハルジオンは追手の顔を確認すると、見覚えがあった。

亜麻色の髪のショートボブ。少しだけ幼さの残る顔つき。にこにこ甘いお菓子でも眺めるような顔つきで、詩音を見ている。

人気配信者カレン。

『勇者』と言う、特殊なスキルを発現させた彼女は、デビューからわずか半年でトップ配信者の仲間入りを果たした。

その可憐な容姿、勇者スキルによる圧倒的な強さ、そして何よりも本人の明るい性格が人を惹きつけるのだろう。

自分とは格の違う有名配信者を前に、ハルジオンは何を言ったらいいのかも分からず、ただカレンを見つめていた。

どうして、自分なんかに会いに来たのだろうか。

するといつた何を思ったのか、カレンの顔が赤くなっていき、はあはあと吐息を漏らし、ブツブツとあやしく呟き始めた。

「ハルちゃんが私を見てる。見つめてる。これってもう愛してるって意味だよ。私たち相思相愛ってことだよ」

なに言ってるんだコイツ。

カレンは身をよじらせながらブツブツと呟いている。

その異常な姿に、会って早速だがハルジオンはドン引きだ。

「あ、あの、何か用があつて来てくれたんじゃないんですか……う？」

これ以上、カレンが妄想の世界にトリップする前に、ハルジオンは声をかけた。するとカレンはハツとしたように顔を上げる。

「そうだった。まずは、お礼を言いに来たんだ」

「お礼？」

「一年くらい前に、オークに襲われたところを助けてくれたでしょ？」

ハルジオンが初めて魔法少女スキルを使ったとき、一人の少女を助けていた。

魔法少女の姿で人と関わるのを避けたかったため、助けた後はすぐに別れた。

だが確かに、あの時の少女はカレンだった。

ハルジオンはそのことを分かっていたが、カレンが覚えているとは思っていないかった。
た。

「覚えてたんですね」

「あたりまえだよ！ あの時、ハルちゃんに助けてもらえなかったら、私は死んでたかもしれないんだから」

彼女はスマホを取り出すと、操作を始める。

「ずっとハルちゃんにお礼を言いたかったんだけど、なかなか見つからなくて。だけどハルちゃんが配信を始めてからはすぐに見つけられたよ。探偵ってすごいんだね。二回目の配信でハルちゃんのこと見つけてくれたもん」

た、探偵？

そんな所に依頼を出していたのか。とハルジオンが驚く。

すると、カレンはスマホの画面を見せてきた。

「ほら、チャンネル登録もしてるし、いつもコメントしてるよ」

そう言って、カレンが見せつけてきたアカウント情報は、

(いっつもクソ長文ながちようぶんコメントしてくる人じゃん!?)

配信を始めるとすぐにやってきて、愛してる、好きだよ、とかを含めて長いコメントをしてくる人だ。

時間がないときでもコメントだけは残しに来るらしく、『忙しくて一緒に居れなくてごめんね。アーカイブは絶対に見るからね』などと言っていた。

ちよつと痛い中学生くらいの子がコメントしてくれているのかな。

なんて思っていたが、まさかその正体がカレンだったとは。

ヤバい人じゃん。ハルジオンは無意識にカレンから距離をとる。

「そう、なんですね。ありがとうございます」

「それでね、ハルちゃんにお礼したいなって思っつて、マネージャーさんに相談したんだ」

カレンは事務所に所属する配信者のため、マネージャーと言うものが存在する。

「そのマネージャーさんから、ハルちゃんのチャンネルの成長率が鈍化してるから、それを助けてあげればいいんじゃないかって言われたんだ」

その言葉にハルジオンの意識が向く。

何らかの解決策があるならば、ぜひ教えて欲しい。

……ところでカレンは自分がしたコメントもマネージャーに見せたのだろうか。

だとしたら、今後の人間関係が心配になる。

そして、カレンが出してきた解決策はとてもシンプルなものだった。

「ハルちゃん、私とコラボしない？」

コラボ。他の配信者と一緒に配信することは、新規の視聴者を開拓するのに、とても有効で簡単な手だ。

ぼっちのハルジオンには決して簡単ではないのだが。

カレンは登録者100万人を超える大手配信者。

その人とコラボすれば一気に知名度が上がるだろう。

しかも、ハルジオンが脱ぐよりは健全だし安全。のはずだが、

「コラボしたらハルちゃんに何をしてもらおうかな。そうだ、服だけを溶かすスライムっていないのかな。いやでも、配信上にハルちゃんの肌をさらすのは許せないし」

ぶつぶつと言っているカレンを見ると、本当に安全かは分からない。

止めておいたほうが良いのでは？

そもそもカレンさん、私欲のためにコラボ提案してませんか？

迷うハルジオン。

だが、どこかで大きな冒険をしなければ成果は得られないだろう。

ハルジオンは覚悟を決めた。

「分かりました。ボクとコラボしてください」

「やったー！　ありがとうハルちゃん。今後も末永くよろしくね！」

末永くかどうかは、カレンの自制心しだいだろう。

「それじゃあ、今後の連絡はメールですね。チャンネルに載ってるアカウントあてで良いんだよね？」

「あ、はい。大丈夫です」

そもそも、このやり取りもメールですれば良かったのでは？

ハルジオンはその言葉を飲み込む。

「……ところで、一つだけ大事な確認があるんだけど」

空気が変わった気がした。

空気が張り詰める。びりびりと肌にしびれが走り始めた。

カレンの琥珀色の目が、どろりと、はちみつのように甘く、粘着質な質感を帯びた気がした。

「ハルちゃんって、付き合ってる人とか、居ないし、居たこともないよね？」

間違えたら殺される。

そう確信するほどの殺気がカレンからあふれていた。

詩音は緊張で乾いたのどを必死に震わせる。

「いや、彼氏は居たことないですよ」

その言葉をカレンが聞くと、一気に空気がゆるんだ。

「そうだよね。ハルちゃんも清い女の子だもん。そんな相手いないよね」

先ほどまでの危ない雰囲気は消え去り、カレンはにこにここと笑顔を浮かべる。

その姿はただの明るい女の子だ。

もしも、『居たことがある』と答えたらどうなっていたのか。

そもそも、

(中身が男だとバレたら……)

コラボを承諾したのは失敗だったかもしれない。

ハルジオンは命の危機に体を震わせた。

○

カレンと別れた後、詩音は変身を解き帰路についた。

詩音に住んでいるのは薄汚れた古いアパートだ。だが最近改装をしたため、部屋は意外と綺麗になっている。

アパートの前には、物理的にも家賃的にも高いマンションが建っている。

詩音がアパートの敷地に入ろうとすると、マンションから一人の女性が出てきた。「あ、詩音先輩！」

詩音はそちらに目を向ける。

亜麻色のショートボブ、まだ幼さの残る顔つき、琥珀色の瞳。

つい、先ほどまで聞いていた声。

彼女の名前は『一角華恋』。

詩音の大学の後輩であり、超人氣配信者のカレンだ。

第4話

「詩音先輩、お疲れ様です」

そう言つて、華恋はにこりと笑つた。

少し前までは純粹に可愛い後輩としてみていた。

しかし、そのヤバさを知つてしまった今、詩音はその笑顔が恐ろしく感じた。

「ダンジョン帰りですか？」

「う、うん、ちよつとだけ行つてきたんだ」

「へー、どこに行つてたんですか？」

どう答えるべきか、詩音は悩む。

本当に行つていた場所を教えたら、詩音とハルジオンが同一人物だと推測するための

ヒントを与えてしまうかもしれない。

だが、嘘を言つて通じるかどうか。

華恋の琥珀色の瞳が、ジツと詩音を見つめている。

まるで心の中を見通そうとしているようだ。

以前に華恋自身から聞いた話だが、勇者スキルは直観が鋭くなるらしい。

なんとなく危険な場所や、相手が嘘を言っているか分かるとか。嘘を言って、バレた時のほうが怪しくなる。

ここは本当のことを言ったほうが良いだろうと、詩音は素直に行っていたダンジョンを教えた。

「偶然ですね。私もさつきまで、その近くに居たんですよ」

「そうなんだ。もしかしたら、すれ違ってたかもね」

詩音の答えに華恋がにこりと笑った。

何を考えているのかは分からない。

だが、特に何かを疑われている感じはしない。

「ところで、最近ぜんぜんクランの集会に顔を出さないって、みんな心配してましたよ？」

華恋は子供に注意するように言った。

クランは探索者が所属する集団だ。情報を交換したりパーティーを募集するとき役に立つ。

詩音と華恋は学生たちが作ったクランに所属している。

クランでは1週間に一回ほど集会を行っている。

だが詩音は最近、配信が忙しくて顔を出せていない。

「次は私が引きずっていきますからね」

「ごめんね、ちゃんと出るようにするよ」

「もう、絶対ですよ？」

華恋はすねたように言った。

そして、何かに気づいたようだ。

「そういえば、詩音先輩って、ごはんこれからですよね？」

「そうだけど……」

「ちよつと待つててくださいい！」

華恋はマンシヨンの中に入る。少しして大きめのタツパーを持って出てきた。

「はい、今日は肉じゃがですよ」

「本当に、いつもありがとう。華恋ちゃんがいなかったら、ボクは飢え死にしていたと思
う」

「いいんですよ。これくらいなら、いつでもあげますから」

受け取ったタツパーはまだ温かい。作り立てなのだろう。

「だからその辺に生えてる草とか食べちゃダメですよ？」

華恋と初めて会ったとき、詩音は草を採っていた。

『草むしりですか？』と聞かれたので、『食べられる草を採ってるんだよ』と言ったら、

とても驚かれた。

それ以降、華恋はたまに食べ物恵んでくれていた。

そう考えると、詩音は華恋に命を救われている。

もうすでに、オークを助けた時の借りなど返されているはずだ。

これに加えてコラボをしてもらうのは、貰いすぎなんじゃないだろうか。

詩音が申し訳なく思っていると、それが顔に出ているのだろうか。

「詩音先輩、困ったことがあつたら言ってくださいね。なんでもしますから」

そう言って、華恋はにこにここと笑う。

聖女だ。詩音は心の中で華恋を拝む。ヤバイやつだとか思つてすいませんでしたと

懺悔する。

華恋が笑う直前。その瞳に一瞬だけ、ほの暗い何かがかすめた気がするが、気のせい

だろう。

第5話

数日後。ハルジオンはとある一軒家の前に居た。

長い髪はほどこいてキャスケットを被り、ダンジョンの外をスカートで歩き回るのは恥ずかしかったので、短いズボンを履いている。

「ここ、で良いんだよね？」

そこはカレンから教えられた撮影スタジオのはずだ。

だが、『ここは撮影スタジオですよ！』と看板があるわけでもない。

しかし、家の前には大型のトラックが止まっている。家庭で使うものではないだろう。

おそらくは機材などを運ぶための物。場所は会っているはずだ。

ハルジオンは怒られないだろうかと、びくびくしながらその家に近づいた。

「ハルジオンさんですか？」

「びえ!？」

突然声をかけられて、ハルジオンは声を上げる。

後ろを振り向く。そこにはコンビニの袋をヒジに下げたスーツ姿の女性。

キリッとした目をした、メガネの女性だ。なんとなく仕事ができそうな雰囲気を感じる。

あと少し怖い。失敗したらガッツリ怒られそうな感じ。

「は、はい。そうです」

「初めまして、私はカレンのマネージャーをしている『水島』です」

水島は慣れた手つきで名刺を取り出すと、名刺入れに乗せて両手で差し出した。

詩音は慌てて、同じような格好で名刺を受け取る。

名刺には『ラプリス・プロダクション』と書かれていた。

『ラプリス・プロダクション』通称で『ラプリス』は、大手のダンジョン配信者事務所だ。

ダンジョン配信が流行り始めたところからの古参の事務所で、特に男性からの人気が高い。

「あ、ありがとうございます。あと、すいません。ボクは名刺とか持つてなくて……」

「気になさらないでください。会ってすぐに名刺を渡すのは、私たちの職業病みたいなものですから」

水島はいたずらっぽく笑った。

意外と優しい人なのかもしれない。

ハルジオンは少し安心する。

「配信者さんの仕事は配信をすること。名刺交換や、細々とした雑事はマネージャーの仕事ですから」

水島はコンビ二袋を上げた。

あれもカレンのために買ってきたものなのだろう。

マネージャーか、居てくれたら助かるんだろうな。などとハルジオンが考えていると。

「ところで、ハルジオンさんは事務所に所属するつもりはありませんか？」

「え？」

「面倒事は全部任せて配信だけをしていたいと思いませんか？ ラブリスはいつでも受け入れる準備ができていますよ」

あれ、勧誘されている？

ようやくハルジオンの認識が追いついてきた。

しかし、本気か社交辞令か。だが水島は無責任な社交辞令を言うタイプにも見ええない。

いや、そもそも『ラブリス』は女性配信者のみが所属する事務所だ。

中身は男のハルジオンが入るのは、問題になるだろうと気づく。

「あ、いえ、すいません。今は自由にやりたいかなー、なんて思ってた」

「そうですか……気が変わったら、いつでも連絡してくださいね」

水島は残念そうに眼を伏せたが、すぐに優しく微笑んだ。

「それでは、こちらにどうぞ」

水島に導かれて家に入っていく。

構造は普通の一軒家ようだ。短い廊下を抜けて行く。

奥に向かうと、そこは絵に描いたような女の子の部屋だった。

パステル調で、ふわふわ、ふりふりしたものを集めた感じ。

しかし部屋の隅のほうには、撮影用の機材や配線がごちゃごちゃと配置されている。

そして、その周りを数人のスタッフが忙しそうに動いていた。

「あ、ハルちゃん！ いらっしやい！」

部屋の中央。ももことしたソファーにカレンが座っていた。

彼女は勢いよく立ち上がると、詩音に抱き着いてくる。

「はあはあ、ハルちゃんいい匂いしてるね。シャンプーに使うの？ 飲むから教

えて？」

え、シャンプー飲むの？

そういう冗談なのだろうか。詩音は困惑する。

「ちよつと、体壊したら大変なんだから止めてくださいね？」

水島が注意する。

少なくとも、水島は本気で飲むと考えているようだ。

「はあ、本当にカレンさんは、ハルジオンさんのことになるかと厄介オタクみたいになるんですから」

「厄介オタクと一緒にしないでよ。両思いだよ。私たちは運命の糸で結ばれてるの」

それ、本当に糸ですか？

重苦しい鎖とかじゃないですか？

ハルジオンはカレンが怖くなるが、振りほどけない。

普段のメシの恩義おんぎがある。順調に餌付けおんぎされていた。

「ダンジョンの探索中に助けてもらったんでしたか？」

「そうだよ。私が怪物に襲われているところに、さつそうと現れて消し炭にしてくれたの。運命の王子様みたいでしょ？」

「まあ、分からなくはないですけど」

消し炭にしたのが物騒ぶつそうだが。たしかにラブロマンスの導入みたいではある。

水島は少し納得したようだ。

やれやれと言った様子で、口を開く。

「しかし、ハルジオンさんが女の子で良かったです」

水島のその言葉に、抱き着いていたカレンがピクリと反応した。

「どういふことだろうか？」

ハルジオンは水島の顔を見る。

「ラブリスは恋愛禁止ですから。女の子同士ならファンも受け入れてくれるんですけど、男性相手は致命的ですね」

「だから、と水島は続ける。

「もしも男性相手に今みたいな行動をして、なおかつファンにバレるようなことがあったら。本人は間違いないく引退。事務所全体のイメージも、大きく悪化するでしょうね」
なるほど。

「すいません！ 中身は男なんです！」

詩音は全力で謝罪する。後悔の念ねんがあふれあがる。

「万が一、男だとバレたら会社規模で迷惑をかけてしまう。」

やはり、コラボを受けるべきじゃなかった。もっと、ちゃんと考えていれば気づけたかもしれないのに。

ハルジオンが心の中で土下座をしていると、カレンがギョツと抱きしめてきた。

そして、ふてくされた子供のように言った。

「でも、ハルちゃんは女の子だから、大丈夫だよ」
カレンのその言葉は、なぜか耳に響いた。

第6話

「それでは、今回撮影する動画の概要を確認しますね」

水島がメガネを直しながら言うと、カレンが拗すねたようにふくれた。

「むー。なんで動画なの？ 配信でいいじゃん」

「カレンさんがハルジオンさんに対して、配信に乗せられないようなことをしたときに、カットするためですよ」

そもそも、配信に乗せられないようなことをさせないで欲しい。

ハルジオンはそう思うが、話が先に進んでいく。

「それに今回は企画的に配信には向いていませんからね」

「たしか、防具のレビュー動画で良かったですよね？」

ダンジョン配信者だからと言って、全員が常にモンスターを倒してダンジョンを探索しているわけではない。

探索者向けの武器、防具、アイテムなどを紹介するレビュー系。

『スライムに洗剤をかけてみたら驚きの結果に!』みたいな検証系。

ひたすらモンスターやダンジョンごとの特徴を説明する解説系。

など、さまざまなダンジョン関連の動画が生まれている

そして今回行うのはレビュー系。

探索者が着る防具の紹介だ。

探索者が着ている防具は見た目こそ普通の服と変わらないものも多いが、性能は全く異なっている。

ダンジョンのモンスターを倒すと落ちる魔石。

この魔石を利用した技術である、魔工学によって作られている。

服の繊維には細かく砕いた魔石が混ぜ込まれている。この魔石が特殊な魔石に反応して、強度を上げたり、温度調節機能が働いたり、様々な機能を発揮する。

「あまり防具については詳しくないですけど、今日のために勉強してきたので大丈夫です」

昔は、防具は機能重視で見た目はあまり気にされていなかったらしい。

しかし近年では、ダンジョンで配信などの撮影を行う人が増えたため、見た目も重要視されるようになった。

と、ハルジオンは昨日の夜、ネット百科事典で見た。

「ごめんねハルちゃん。そういう名目の、ただのコスプレ動画なんだ」

「えー……」

そんなわけで、ただのコスプレ動画の撮影が始まった。

○

これは投稿された動画と、公開直後のリアルタイムチャットの様子である。

パステル色が目立つ部屋。その真ん中に設置されたもこもことした白いソファーにカレンが座っている。

「やつほー。勇者系探索者のカレンだよー」

『キターー！』『舞ってた』『今日も楽しみです！』

「今回は防具レビュー！ と言う名のコスプレ動画だよ。ただし、一人でやってもつまらないので、今回はお友達を呼んでみたよ」

『友達？』『ラブリスのだれかか？』

画面の端から緊張した様子で、一人の少女が入ってくる。

ハルジオンだ。

『誰？』『知らない人だ……』『あ、見たことあるかも』

「ほら、ハルちゃん。いつもの挨拶やって」

「お、おはるじおーん。魔法少女系探索者のハルジオンです」

「ハルちゃん是一年くらい前に、私を助けてくれた人なんだよ」

『あー、いつも言ってるやつか』『実在したのか……』『何の話?』

『カレンがデビュー前に、モンスターに襲われて死にかけてたところを助けてもらった。その相手がハルジオンさんらしい』

『助けた人ですよってなりすましメッセ送ったら速攻でブロックされたわ』

「ずーっと探してたんだけど、なんと一か月くらい前からハルちゃんが配信を始めてくれて見つけれられたんだ。それで我慢できなくて、今回は呼んじやった」

「よ、呼ばれちゃいました」

ハルジオンの緊張した様子を見て、カレンは突然抱き着く。

「もー、ハルちゃん。緊張しすぎだよ?」

そう言つて、カレンはハルジオンの服の中に手を突っ込む。

そしてわさわさと、撫でまわし始めた。

「え、ちよつと、そんなとこ触ろうとしないで!」

「じゃあ、とりあえず敬語を使わないように気を付けてみようか」

「分かった、分かったから止めて!」

『あら〜』『てえてえ?』

そう叫ぶハルジオンだが、カレンは止まらない。

むしろ暴走していく。

「ふふふ、慌てるハルちゃんも可愛いね。もっと可愛いところ見せてくれないかな」
そう言つて、わさわさと動く手が胸元へと伸びたところで——カット編集です。

少々お待ちください。

『あれ、編集ミスつてますよ?』『運営、無能』『完全版はいつ出ますか?』『ラブリスのファン辞めます』『低評価不可避』

画面が切り替わると、二人はおとなしくソファアに座っていた。

ハルジオンは赤くなつて縮こまるように、カレンはにこにこしている。心なしか肌
にツヤがある。

『ガチっぽい雰囲気で草』『マジで未カット版出してくれ』

「さて、話は戻つて今回の企画は防具レビュー。ただし、普通に紹介してもつまらないので、今回は一人三着防具を選んで、お互いに着てもらいます」

『お互いの防具を選ぶわけか』『めっちゃきわどいの選んで欲しい』『ハルちゃんは普通に可愛いを選びそう』『カレンは何選ぶか分からんな』『カレンが選んだ、変なのをハルちゃんを着るのか……』『これ、ハルちゃん被害者なのでは?』

「ハルちゃん、分かった?」

「あ、うん。ボクは防具を三着選べば良いんだよね?」

『ボクっ娘?』『ボクっ娘は良いぞ』『素でボクっ娘って言うてそう。推せる……ッ!』
「それじゃあ、防具選びに行ってみよう!」

カッツ編集が入る。

画面には誰もいない。

「それじゃあ、まずは私のほうから出るよ!」

画面にカレンが入ってくる。

ミニの浴衣姿だ。

長い袖をふりふりと揺らしながら、はしゃいでいる。

「じゃーん! なかなか似合ってるんじゃない?」

『かわいい!』『いつもと違う感じでイイね!』

「ハルちゃん、浴衣好きなの?」

「あ、うん。母がいつも着物を着てる人だったから。なんとなく安心感があつて」

『いつも着物?』『もしかして、ハルちゃんって良いところのお嬢さんなのでは?』『そう考
えると姿勢とかもピシッとしてるような』

「けっこう動きやすいし、性能も良いみたいだから。次の探索で着てみようかな」

カッツ編集。

「それじゃあ、次はボクが出るね」

ハルジオンが出てくる。その恰好はスカートの丈が短めのシスター服だ。

『よかった、普通だ』『さすがに恩人に変な服は着せないか』

「かわいいー!! シスターさん、ちよつと懺悔室に行こうか。私のイケない懺悔を――」

カット編集です。

『草』『なにを着てもらっても暴走するのでは?』『カレンちゃんマジで飛ばしてるなww』『まあ、ずつと言つてた恩人に会えたからな』

二人は何事もなかったように向かい合っている。

ハルジオンが口を開いた。

「これ、回復魔法を高める魔石が多くついてるんだね。回復に専念するときには着てもいいかな」

すると、カレンが自慢するように言う。

「ふふん、ハルちゃんは回復魔法だけじゃなくて、全属性の魔法が使えるんだよね?」

「うん? そうだよ。全属性使える」

『全属性?!』『全属性使いとか数えるほどしかないはずだぞ?!』『マジでどこに隠れてたんだ?!』

そして防具紹介は続いていく。

二着目はカレンが正統派な女騎士風の服。ハルジオンが少しきわどい暗殺者風の服を着た。

そして三着目は一人ずつ着ることになったのだが……

「ちよつと、ハルちゃんどういうこと!?!」

画面内に残されたハルジオンがびくりと震える。

『なんだ?』『え、ハルちゃんがやらかすの?』

画面外からゴスン、ゴスンと重い何か落ちる音が聞こえる。

「なんでこんな防具選んだの!?!」

出てきたのは鉄の塊。

甲冑風のワードスーツに身を包んだカレンだった。

『えー……?』『路線変わりすぎだろwww』『あれ、これお互いに着て欲しい可愛い服を選ぶ企画じゃなかった?』『いや、三つ防具を選んで、お互いに着るとしか言っただけだはは』

「うわー! かっこいい!」

ハルジオンはカレンに近寄ると、ワードスーツの表面をなでた。

体中に走る青白い線が最高にかっこいい。

「前からこのタイプの防具が気になってたんだよね! でも高いから見に行くだけでも

緊張しちゃって。こんな近くで見れて嬉しいよ！」

『分かる』『かつこいいよね』『マジでビルが買えるレベルの値段だから』『スタッフ、良くこんなの準備できたな』『でも女の子に着せるものではないだろwww』

「ぐうう、喜んでくれてるのは嬉しいけど、今日一番の喜びがこれなのはスゴイ複雑……！」

そして最後。ハルジオンが着替える番になったのだが……

「いや、カレンちゃんこそ、なんてもの選んだの!？」

「あー！ ハルちゃん着替えてないじゃん！ズルいよー！」

「こんなの着れるわけないだろ!？」

そう言ってハルジオンは手を出す。

その手にはひもが握られていた。正確に言うと、ごく小さい面積の水着。

『それ防具じゃないだろwww』『えっちな漫画でしか見たことないようなもので草』『これ、マジで防具なの?』『防具の定義は素材に魔石が含まれてるかどうか。だから防具と定義できなくもない』

「確かに、動画でハルちゃんの肌を晒すべきじゃないね」

「そうだよ！ だからこれは無し」

「後で、二人っきりの時に着てくれればいいから」

「……………え？」

『え？』『えー……………？』『俺にも見せて』

エンディングの音楽が流れ始める。

「というわけで、今回はこの辺で！ また次回も見てくださいね！」

「ちよつと、着ないからね!? あ、ちよつと引つ張らないで、どこに連れてこうとしている!?」

カレンがハルジオンの手を引いて、画面から出て行った。

『面白かった！』『さて、ハルちゃんへの配信アーカイブ見てみるか』『ハルちゃんもラブリス入らんのかな』『これは期待の新人だった』

「最後まで見てくれてありがとう！ 高評価、チャンネル登録、コメントなどよろしくね
！」

第7話

鳴御市。

東北地方の南部に位置するこの街は、『ダンジョン都市』の異名を持っている。

日本最大のダンジョン密集地帯であり、当然ながら探索者向けの施設や企業も多い。探索者を育成する探索者大学もひしめいており、その中の一つが詩音の通う学校だ。

「スキルとは、魔工学の研究途中に生まれたこのウィルスのようなものによって発生している。これを人体に注入することで、適合した場合にのみスキルが発生する。これは母体の中で胎児に感染することが解っており、君たちのほとんども——」

講義なんて聞いてる場合じゃない。

詩音の視線は、机の下のスマホに落とされていた。

そこにはハルジオンのチャンネル画面。

とてつもないほど、チャンネル登録者数が増えていた。

それは望んでいたチャンネルの成長。

とても喜ばしいことのはず、なのだが。

(や、やばい。変な汗出てきた)

小心者の詩音にとって、とてつもないプレッシャーになっていた。

○

お昼。

詩音は大学の食堂に足を向けていた。

その進行上の廊下に一組の男女が見える。

一人は真面目そうだが、オシヤレな好青年。

もう一人は、少し派手な金髪の女性。

「えー、流石ですね。また今度、一緒に一緒にしたいです！」

「今度と言わずに、今でもいいけど？」

「えー、本当ですかー？」

どうやら男が女を誘っているようだが……

チラリと、女性の方が周りを見た。

彼女は詩音を見つけると、ニコリと笑った。

「ごめんなさい！ この後、友達とお昼の約束してるので！」

「そっか、じゃあまた今度にしようか」

彼女は詩音に駆け寄ると、ささやいた。

「助かったわ。顔が良いから話聞いてみたんだけど、なかなか離してくれなくて」

「いや、別に助けるつもりで通ったわけじゃないけど」

彼女は『飯野^{いいのゆうか}友歌』。

詩音の同級生で、数少ない友達だ。

二人は食堂へと歩き出す。

「はあ、私って男運ないのかな。大学入ってからろくな男に会わないし、何だったら最初に声掛けちゃったのが、こんな奴だったしなー」

飯野は詩音を見て、ため息をつく。

入学当初。話しかけてきたのは飯野からだった。

顔が良いから、という理由で詩音に近づいたが、中身の残念さを知って幻滅。

しかし飯野自身の、懐に入れた人間を見捨てられない性格によってズルズルと友人関係が続けている。

「そういえば、あなた配信やってないでしょ」

飯野は詩音の配信アカウントを知っている。

ハルジオンではない方だ。

そもそも、詩音に配信活動を勧めたのが飯野だ。

「もしかして私があげた機材、売ったんじゃないでしょうね？」

現在もハルジオンとして使わせて頂いています。詩音は心のなかで感謝する。

詩音が配信用に使っている機材は、安いものでも30万近くするものだ。

当然ながら詩音にそんなものを買える金はない。

『上手く行けば、少しは生活費の足しになるかもよ?』

そう言つて機材を与えて、配信をするように勧めたのが飯野だった。

「いや、最近はちよつと忙しくて」

「ふーん。まあ、最初は視聴者つかなくて、やる気そがれるのは分かるけど」

飯野自身も配信をしている。

カレンのような超人気配信者、という訳では無い。

そこそこ人気の中堅配信者だ。

それでも、使い古した機材を詩音に与えられる程度には稼いでいるが。

「でも、できる限り続けたほうが良いと思うわよ。今どき、どこで伸びるか分かんないん

だし」

飯野は顔をそらして、少し気まずそうに口を開いた。

「ま、まあ? あなたがどうしても配信を続けたくないって言うなら、機材の使い方も覚

えたらうし、私のスタッフとして雇つても——」

バツ！ と飯野は後ろを振り向いた。

「ん？ どうしたんだ？」

「いや、なんか最近、嫌な感じ？ 殺気？ みたいなものを感じるよな。こ
う、肌を火であぶられるみたいな」

そう言つて、飯野は不安そうにあたりを見回した。

特に人の気配はないが。

「それ、飯野にヤバいファンが付いてるんじゃないか？ ストーカーみたいな」

「……否定できないわね。気をつけよう」

ふと、詩音はカレンのことを思い出した。

一瞬、自分もつけられているのではないかと不安になったのだ。

しかし、なんだかんだ言つてもカレンは良い子だ。ストーキングなんてしないだろ
う。

そもそも詩音とハルジオンは姿が違うのだ。なにも問題ない。

そう結論を出した。

「でも殺気なら、あなたのせいかもしれないじゃない」

「え？ なんのことだ？」

「だって——」

その時だった。体が凍てつくような威圧感を廊下の先から感じる。

現れたのは、腰まで髪を伸ばした銀髪の女性だ。

彼女は『元居紗耶』。

大学では華恋に並ぶ有名人で、『魔王』スキルの発現者。

普段は眠たげで、涼しい目をしてる彼女。

しかし現在は、凍りついた氷柱のように鋭く目を尖らせて、詩音を睨みつけている。

そしてカツカツと、『お前に興味なんてない』と言うように、詩音たちの隣を通り過ぎて行った。

そのプレッシャーが遠ざかると、飯野は息を吐いた。

「ほら、あの殺気というか、威圧感！ あの人が原因の可能性もあるでしょ！」

確かに、紗耶は詩音と会ったたびに周囲にプレッシャーをばらまく。

その恨みのようなものが、飛び火したのではないかと飯野は言いたいのだろう。

「そもそも、あなた何したらあんなに怒らせられるわけ？」

「……分からない」

「本当に分からないわけ？　じゃあ、なんか接点とかないの？」

「高校が同じだった」

「他には？　それが理由なわけ無いでしょ」

しかし、詩音は口をつぐむ。

明らかに、何かを隠していることがひと目でわかる。

「ほら、早く言いなさいよ！ これ以上、私の中の、あなたの評価が下がることはないから！」

飯野にせつつかれて、詩音はしぶしぶと言った様子で口を開いた。

「付き合ってたんだ」

第8話

高校の卒業式の日。

詩音は学校の屋上で人を待っていた。

ガチャリと、重い扉が開く。

そこから出てきたのは紗耶だった。

心なしか、そわそわとしている。

「……こ、こんなところに呼び出して、何の用かしら？」

詩音と紗耶は付き合っている。

と言つても、本当の恋人ではない。

偽物だ。

「たしか、私がキミに声をかけたのも、この場所だったわね」

始まりは一年生のころ。

人間関係が固まり始める6月のある日、詩音は紗耶に呼び出された。

そこで提案されたのが偽物の恋人関係。

それは双方にとってメリットのある関係だった。

「あなたのおかげで、この三年間は変な男が寄ってこなくて済んだわ」

紗耶にとっては男除け。

中学時代に面倒な色恋関係に巻き込まれた紗耶は、高校ではなんとか回避しようと決めていた。

そこで目を付けたのが詩音だった。

そして、詩音にとつてのメリットは、

「ボクも、紗耶のおかげでいじめられずに済んだよ」

詩音は高校に入学して間もないころ、いじめを受けていた。

理由は、詩音の兄にある。

詩音の家、小峰家は古くからの武士の家系だ。

そして詩音の祖父は武神と呼ばれたほどの実力者。

ダンジョンが発見されて間もないころ。スキルなんてものが開発されていなかった時代に、刀を振るって怪物どもをなぎ倒していた。

そして、その子供や孫も同じような探索者としての才能を求められた。

幼いころから刀を握り。辛い鍛錬に耐える。実力が足りなければ追い出され、二度と家の敷居はまたげない。

そんな家で詩音は、神童と呼ばれた。

武神と呼ばれた祖父から天才と評された。

祖父の意見は絶対だ。

家の中では何をすることも詩音が優先されていた。

それが、兄は気に入らなかつたのだろう。

だが詩音には手が出せない。詩音は祖父の庇護ひご下にある。

下手なことをすれば追い出されるのは兄自身だ。

しかし、それは詩音が中学生のころに変わった。

小峰家の人間には、必ずと言っていいほど『刀』スキルが発現する。

それは遺伝的なものなのかもしれないし、幼いころからの鍛錬によるものなのかもしれない。

理由はともあれ、ほぼ確実なものだ。

父、叔父、叔母、いとこ、そして兄。皆に現れたそのスキル。

しかし、詩音にそのスキルが発現する兆きざししはなかつた。

代わりに現れたのは魔法系のスキル。しかも、そのスキルだつてまともに扱えたものではなかつた。

詩音はすぐに見限られた。

祖父による守護は終わった。

だから、詩音の兄はその嫉妬をなぐさめ、嗜虐心しぎやくしんを満たすことにした。しかし家の中でやっては問題になるかもしれない。

だから、学校と言う閉鎖空間を利用することにした。詩音の同級生を操って、詩音をいじめさせる。

だが、そんな状況はすぐに終わった。

「本当に紗耶のおかげだ、ありがとう」

紗耶と付き合い始めたからだ。

魔王スキル。

現在までに見つかっているスキルの中では、『最強』と称される。

過去に発現しているのは数人だけ。

その全員が一流の探索者として成功している。

さらには、探索者としての枠組みを超えて、経営者や政治家として活躍している者も居る。

次期総理に最も近いとされている男も、魔王スキルの所持者だ。

はたして、それが魔王スキルの効果によるものなのか。

あるいはそう言った、カリスマ性を持つ人間に発現しやすいのか。

それは分かっているが、少なくとも学生が魔王スキルの所持者に噛みつこうとは思

わない。

もちろん、その彼氏にも。

「そ、それで？ なぜこんなところに呼び出したの？」

紗耶は少し上ずった声で言った。

高校卒業がうれしかったのだろうか。なんとなく、にやつきそうになっている。

詩音は本当に紗耶に世話になった。

三年ものあいだ。

だから、

「今までありがとう。ボクは……もう大丈夫だから」

「……………え？」

何を言っているのか分からない。

そう言った顔で、紗耶は詩音を見る。

「ボクは家を出ることにしたんだ。ボクが家を出れば、兄さんも気が済むはずだ。もう嫌がらせを受けることもない」

小峰家に詩音の居場所はなかった。もはや空気のようなものだ。

現在は兄が次期当主として扱われている。すでに詩音は眼中にない。

まれに、嫌な虫が出たように見られるだけだ。

詩音が家を出て行ったあと、そこまで嫌がらせを続けるような執念は残っていないだろう。

「だから、もうボクを気にしなくていいよ」

「気にしなくていいって……なに？」

紗耶はうつむいている。その表情は分からない。

だが、しぼり出した声からは、困惑と不安が感じ取れる。

「ボクは三年間も紗耶を縛り付けてしまった。一度きりの、高校の青春時代を。もうこれ以上、紗耶に迷惑はかけたくないんだ。だから、」

詩音は、少し苦しそうに、しかしできる限り感情を出さないように言った。

「別れよう」

パシン！

乾いた音が、屋上に響いた。

紗耶が詩音の頬ほおをはたいた。

「確かに、最初は打算ださんてき的な理由で近づいた。詩音に興味なんてなかった。面倒な人間関係を避けられて、目の前で起こってる気分の悪いいじめも潰せる。それだけだった」

その声は、冷え切った氷のように冷たかった。

しかし、少しずつ熱を帯びていく。内側で燃える激情があふれるように。

「そうね三年間よ。三年も一緒に居たのよ？ 毎日会って、くだらない会話をして、一緒に出掛けて、くだらない恋愛映画を見てドキドキして！ ダンジョンを探索してお互いを助け会った！ ずっと一緒に居たのに！！ キミには——」

紗耶の瞳から、涙がこぼれた。

紗耶は、詩音に背を向けて歩き出す。

「……なにも伝わってなかった」

○

「いや、あなたが悪いじゃん!!」

学食に飯野の声が響いた。

少し時間がズレたせいか、人はまばらだ。

「そうかな？」

「え、本当に何が悪いかわかってないの!! あなたサイコパスなんじゃないの!!」

飯野は恐ろしいものを見るような眼を詩音に向ける。

本気でおびえているようだ。

「え、怖い怖い。これ以上は下がらないと思ってたけど、あなたの株は急降下してるわ

「よ」

「飯野は何が悪かったか分かるのか？」

詩音が聞くと、飯野は興奮して叫びだす。

「いや分かるわい!! 百人に聞いたら百人が分かるわよ!? 分からないのはあなたみたいな、サイコパス陰キャ貧乏顔だけ草食い野郎のみよ!」

「じゃあ何が悪かったか教えてくれないか？」

「嫌よ! 私には馬に蹴られて死にたくないの! こちとら、ただの回復職よ! あんな魔王様には勝てないの! 二度と私には関わらないで!」

そう言つて、飯野はトレイを持って離れた席に移動した。

ちなみにこの後、詩音は飯野にアイスをおごつてもらつた。

いわく、『頭冷やして、もう一回よく考えてみなさい』とのことだった。

第9話

飯野と話した後、ハルジオンはダンジョンに来ていた。

火山のダンジョンだ。

まわりを見ると黒い岩肌を真つ赤な溶岩が流れている。

防具の温度調整機能が効いているが、それでも薄つすらと暑さを感じる。

詩音の額を汗が流れるが、それは暑さのせいではない。

「うぐう、緊張する」

その姿はハルジオン。

これから配信を始めるつもりなのだが。

『まだー?』『あれ、予定時間過ぎてる?』『トラブルか?』

待機画面では、多くの視聴者が配信の始まりを待っている。

ちなみにカレンの長文コメントはない。

彼女は現在配信中だ。さすがに配信中は見に来れない。

「登録者数が爆増してから初めての配信……つまらないとか思われたらどうしよう」

その登録者数は、コラボによってカレンに押し上げてもらったもの。

ハルジオンの実力ではない。

見に来てくれた人が、つまらないと感じて離れていったら……そう考えると配信開始ボタンを押せないでいた。

「でも飯野が、できる限り続けたほうが良いみたいなこと言ってたし。やってれば実力もついてくるかも……」

どのみち、配信をしていかなければ実力はつかない。

意を決したハルジオンは、開始ボタンに指を伸ばす。

「お、おはるじおーん。魔法少女系探索者のハルジオンです」

『緊張してて草』『声ぶるぶるですよ?』『かわいい!』『落ち着いてwww』

「皆さん、本日はお日柄も良く、お足元の悪い中お越しいただいてありがとうございます」

『天気良いのに足元悪いの?』『どっちだか分かんなくて草』

「あ、いや、違って、ちよつと待ってください!」

詩音はスーハーと深呼吸する。

それを数回繰り返し返すと、少しだけ落ち着いた。

「よし、もう大丈夫、なはず」

ハルジオンは少し落ち着いた頭で考える。

他の配信者の人は、本格的にダンジョン探索をするまえに簡単な雑談、近況報告のよ
うなことをしていた気がする。

ハルジオンは一つ、言いたいことを思い出した。

「そういえば前回の配信まで、僕のスカートの中が見えてしまってたんだけど」

『アーカイブで見たよ!』『今日も期待してます』『絶景』

「残念でした。今回からはもう見えないよ。ほら」

ハルジオンはスカートをたくし上げる。

そこには下着、ではなくスパッツを履いていた。

「この間のコラボしたときに、カレンちゃんのマネージャーさんから教えてもらったん
だ。こういうのを履いたらどうかって」

ハルジオンとしては、悔しがるコメント欄が見れると思っていた。

が、反応が予想と違う。

『あちゃー』『ハルちゃんってバカなの?』『マネージャーさん、そもそも常識が足りてな
かったです』

ハルジオンを憐れむようなコメントが流れていく。

「え、なに? どういうこと?」

『女の子がスカートをたくし上げるな!』

バツと、ハルジオンはスカートを下げる。

そして真つ赤な顔でカメラをにらみつけた。

「は、はめたな!？」

『え……?』『えん罪です』『勝手にハマったんだよなあ』

「これを履けば恥ずかしい思いはしなないと思ったのに、いやいや、そもそも短パンみたいなものだから恥ずかしくない!」

『恥ずかしくないなら存分に見せつけてください!』『スパッツはそれはそれで良いよね』『わかる』『スパッツは良いぞ』

コメントの感じは、下着が見えた時と変わらない。

そう考えると、ハルジオンはスパッツでも恥ずかしくなってくる。

「もういいです! 探索やっていくよ!」

ハルジオンはコメントを見ないようにする。

見ると余計に恥ずかしくなる。

溶岩地帯を進んで行く。

すると、炎を背中から生やした大きなトカゲが見えた。

サラマンダーだ。

『お、爆発の時間か?』『スカート待機』『でもサラマンダーに炎魔法は相性悪くない?』

『アーカイブ見たけど、相性とか関係なく一撃で吹っ飛ばしてたよ』『バカみたいな火力で草』

「残念だけど、ボクはもう爆発魔法は使わないよ」

そう言つて、ハルジオンがステッキを構える。

その先端から風の刃が作られた。

詩音は地面を蹴つて、サラマンダーに走る。

詩音に気づいたサラマンダーから、炎の柱が襲いかかる。

しかし、詩音はそれをスルスルと避ける。

あつという間にサラマンダーに近づくと、風の刃で切り裂いた。

キュビ！ と短い悲鳴をあげるとサラマンダーは絶命し、その体は結晶のようなものを散らしながら消え去った。

コロリと、魔石がその場に落ちる。

『強つつよ!!』『魔法職じゃないの!』『なんで近接戦闘までできるんだよ!』

『その魔法、魔法職のやつが敵に近づかれたときの護身用で、率先的に近づいて使うものじゃないはずでは?』

ハルジオンは誇らしげな顔をする。

「ちよつとだけ近接戦闘の訓練も受けてたから、ある程度は戦えるんだよね」

『なんでそんなもの受けてるんだ……』『ちよつとだけ訓練したレベルじゃなくて草』『近接職ワイ、引退を決意』『早まるなwww』『これ、ハルちゃんがおかしいだけだぞ』

ハルジオンは魔石を拾い上げると、それをカメラに見せる。

「魔宝石だ。今日はついでるかも」

魔石には2つの種類がある。

1つは色のついていない、通常の魔石。

もう1つが、色付きの魔宝石だ。

魔宝石には特殊な魔力が込められている。

これを魔石を用いた武器、防具、道具などと組み合わせることで、さまざまな魔導具が作られる。

入手方法はモンスターを倒したときに、稀に落とすくらい。

モンスターによってどのような力が込められているかは変わる。

込められている力によっては国宝レベルの価値がある代物だ。

ただ、サラマンダーの魔宝石は特に珍しいわけでは無い。

手に入ったら、今日はちよつと贅沢なご飯を食べちやおうかな。と思う程度のもの。

それでもラッキーではある。

今日はいい事があるかもしれないと、詩音の気分が上がる。

だが、その気分はすぐに打ち消された。
火山が噴火した。

いや、そう錯覚するほどの巨大な咆哮ほうこうが、あたりに響いた。

「うえ!?! な、なに?！」

『なんだ!?!』『噴火か?』『いや、鳴き声みたいだったぞ?』

ハルジオンが声の方向を見る。

すると、そちらから二人の探索者が走ってくるのが見えた。

「あの、どうしたんで——」

「うるさい! どけ!」

その二人は脇目もふらずに去っていく。

『なんだアイツら』『マナー悪っ!』『何かから逃げてた?』

「……とりあえず、見に行つてみます」

『危なくないか?』『気をつけてね』

ハルジオンは声のした方に走る。

小さな丘に登る。そこから見えたのは、

『うげえ!?!』『ドラゴン!』

赤黒い鱗、巨大な翼。その巨体からは、とてつもない威圧感が溢あふれている。

そして、ドラゴンと対峙たいししている人影が見える。

それは、長い銀髪を腰まで伸ばした女性。

(紗耶!?)

詩音の元カノだ。

第10話

ドラゴンが大きく息を吸った。

次の瞬間、その口から灼熱の炎があふれ出る。

紗耶に向かって、炎が殺到する。

しかし、紗耶は大剣を構えたまま、軽々と避ける。

そして走りながら手元に氷の槍を作り上げると、それをドラゴンに向かってぶん投げた。

ガンツ！ 重い鉄塊を叩いたような音が響く。しかし、

「この程度じゃ効かないか」

その攻撃はドラゴンの鱗に傷をつけただけ。

威力が足りていない。

ならばと、紗耶が立ち止まる。さらに強力な魔法を撃てばいい。

しかし間に合わなかった。

ドラゴンの巨体。その脇から太い尻尾が飛び出した。

鞭むちのように振るわれた尻尾は、矢のように早く紗耶に迫る。

ガギイン!!

大剣によって防御したが、踏ん張りがきかない。

子供が乱暴に投げたおもちゃのように、紗耶は空中に投げ出される。

ドラゴンの追撃は緩^{ゆる}まない。

その大きな翼の中に、暴風の塊が生まれていた。

それは周りの石や岩を巻き込んで、ガラガラと音を立てていた。

もしも人が巻き込まれば、ミキサーにかけられたようにズタズタになるだろう。

紗耶はとつさに魔法を構える。

しかし間に合わない。

轟音をまき散らしながら暴風が目の前に迫る。

紗耶の脳は全力で危険信号を発するが、どうしようもできない。

ズドン!!

爆炎が、そのすべてを吹き飛ばした。

そして紗耶の体が抱きしめられる。

お姫様抱っこだ。

そして軽々と着地した。

「えっと、大丈夫ですか?」

いったい誰が助けてくれたのか。

紗耶が顔を確認する。

それは、なぜか安心できる顔をした、桜色の髪 of 少女だった。

○

『スゲーー!!』『ハルちゃんかつこいいよ!』『こうやってカレンちゃんも落としたんですね』

コメントが盛り上がっている。

ハルジオンはその画面を見てハッと気づく。

「あ、すいません。配信してて、切ったほうが良いですよね」

勝手に配信に映すのはまずいだろう。

とりあえず、ハルジオンは紗耶に聞いてみた。

『え?』『切らないで切らないで』『あれ、この助けた人、SAYAじゃね?』『すまん、誰だそれ?』『某陽キヤ向けSNSで大人気の人だよ。配信とかはやってないはずだけど』『陰キヤが釣れたようだな』

え、そうなの?

コメントを見てハルジオンは驚く。紗耶がSNSで有名になっていたことなど知らなかった。

ここにも陰キヤが居た。

「いえ、続けたままで大丈夫よ。コメントで言われているようだけど、私もSNSならやってるから」

SAYAは立ち上がると、ドラゴンをにらみつけた。

ドラゴンは突然現れたハルジオンに警戒しているようだ。動きはない。

「情けない姿を映されてしまったのは残念だけど」

「す、すいません」

「キミに怒ってるわけじゃないわよ。危ないところを助けてくれた恩人だもの。私は、自分の弱さにムカつくだけ」

SAYAは本当に悔しそうにしていた。

なにか、強くなければいけない理由があるのだろうか。

SAYAは軽く息をはく。そしてドラゴンに注意したまま口を開いた。

「ところで、私の名前はSAYA。キミの名前を聞いてもいいかしら？」

「ボクは、ま、魔法少女系探索者のハルジオンです」

知り合いの前で、この名前を名乗るのはめっちゃくちや恥ずかしかった。

ハルジオンは顔を赤くする。火山の暑さのおかげで、恥ずかしがっていることはバレていない。はずだ。

「魔法少女？ そう言ったスキルは聞いたことないのだけど」

「すいません。そういう体ていでやってるだけです……」

『うわあ……』『冷静に考えると、自分で魔法少女を名乗ってるのって痛いな』『もうやめたげてよお！』『こっちまで恥ずかしくなってきた』

「そ、そうなのね」

二人の間に気まずい空気が流れた。

その空気を断ち切るように、SAYAが声を上げる。

「ところで！ ハルジオンさん、あれを倒すのを手伝ってもらえないかしら？ 一緒に来ていたパーティーメンバーは逃げ出してしまったのよ」

ハルジオンは先ほど逃げて行った男たちを思い出す。

よくよく思い出すと、大学で見た顔かもしれない。

「はい。ボクで良ければ手伝います」

『え、あれを倒すの？』『明らかにヤバそうなやつなんだが』『このダンジョンでこんなやつ見たことないぞ？』『ユニークかもしれない』

魔石を落とすようなモンスターは、ダンジョン内で生活して繁殖している、わけじゃ

ない。

彼らはダンジョンが生み出した機械のようなものと、研究者たちは考えている。ダンジョン内の環境のコントロールや、ダンジョンの外からやってきた外敵の排除。そういった目的のために作られた機械だと。

そのため、時には強力なモンスターが突然現れることがある。

こうしたモンスターは『ユニークモンスター』と呼ばれて警戒されている。

『ユニークなら逃げたほうがよくないか?』『一流のプロに任せよう、学生が相手するもんじゃない』『なんで戦う気なんだよ、この二人!?!』

詩音はドラゴンに向けてステッキを構える。

一年の時を隔てて、二人は肩を並べて強敵に相対した。

第11話

「私が前に出る。ハルジオンさんは後ろからサポートして！」

SAYAが走り出す。

そこにドラゴンが尻尾を振るうが、SAYAはひらりと避ける。

ならばと言わんばかりに、ドラゴンは灼熱を吐き出そうとする。

「させないよ！」

ハルジオンがステッキを構え、その先から巨大な氷塊を撃ちだす。

ドラゴンの頭に向かって流星のように飛ぶ氷塊。

当たってはたまらないとドラゴンは顔を振るって避けるが、それではいけない。

ズドン!!

トラックが突つ込んだのかと思うような爆音が鳴った。

SAYAの振るった大剣が、ドラゴンの腹部に直撃した。

ドラゴンの巨体がよろよろと後ずさる。

その腹部の鱗には、大きなヒビが走っている。

「硬いわね。でも、次の一撃は耐えられるかしら？」

『すげえ!!』『これ、マジで倒せるんじゃないか?』『SAYAってどんなスキル持ってるの?』『驚くなよ。魔王スキルだ』『流石です魔王様!!』『踏んでください!』

ドラゴンはギロリとSAYAとハルジオンをにらんだ。

その眼には憤怒の炎が燃えている。

そして次の瞬間、

「な、飛ぶのはズルいんじゃない?」

ドラゴンは翼を広げると、空に舞い上がった。

こうなつては、SAYAの剣は届かない。

さらにドラゴンは口からいくつもの火球を吐き出す。

それは噴火して飛び出る火山弾のように降り注ぐ。

「SAYAさん!」

ハルジオンはSAYAに走りよると、魔法で岩の壁を作り出す。

二人は寄りあうようにその壁に隠れる。

周囲には火球が降り注ぎ、小規模な爆発を繰り返す。

からからと、はじけた小石があたりに散らばる。

『ズルいぞ!!』『空の王者(笑) 気取ってんじやねえぞ!』『降りてこい、卑怯者!』

コメント非難されようと、ドラゴンがそれを聞き入れる道理はない。

『てか、マジで滞空時間長くないか?』『こいつまさか、ずっと飛べるタイプなの?』『嘘だろ、あの見た目で飛行特化のドラゴンなのかよ』

翼の生えているドラゴンだ。当然ながら空を飛べる。

しかしドラゴンの滞空時間は、種によって変わってくる。

どうやらあのドラゴンは、ずいぶんと長く飛んでいられるようだ。

こうなったら、詩音は覚悟を決めた。

「SAYAさん、ボクがドラゴンに近づいて落とします」

「……そんなこと、できるのかしら?」

「はい、ボク一人なら飛べます」

あとは、倒せなくとも翼さえ何とかすればいい。

ドラゴンはあの翼で魔法をコントロールして空に浮いている。

翼にある程度の損傷を与えて、ドラゴンの魔法が不安定になったところを、詩音の魔法で揺さぶれば。ドラゴンを地面にたたき落とすことができる。

SAYAは少しのあいだ考える。そして、

「いいえ、止めましょう。ここは撤退するべきよ」

そう決断を下した。

「キミは魔法職でしょう? ドラゴンの一撃が致命傷になるかもしれない。そんな危険

をおかしてまで戦う理由はないわ」

コメントでも言われていた通り、ユニークモンスターの討伐は一流のプロに任せればいい。

学生であるハルジオンたちが危険をおかす理由はない。

SAYAたちがドラゴンに挑んだのは挑戦心から。

逃げてはいけない使命などない。

だが、ハルジオンは違った。

「いえ、やらせてください」

『え、なんで?』『ハルちゃん、おとなしく逃げようよ』

ハルジオンは、この時間を逃したくなかった。

SAYAと一緒に居られるこの時間を。

自分で決断して、捨てた時間だ。

だが、今だけは一緒に戦える。

同じ方向を向いて前に進める。あの頃のように。

だから、せめて、アレを倒すまでは。

数秒のあいだ、二人は見つめあう。

その瞳からSAYAが何を感じたのかは分からない。

「分かったわ」

だが、何かを納得したようだ。

「私もできる限りサポートする。その代わりに、危ないと思ったらすぐに引くのよ?」

「ありがとうございます」

『てえてえか?』『よくわからんけど尊いからよし!』『あれ、これカレンちゃん?』『あ

……』『浮気か?』

ハルジオンはステツキを握りしめる。

周囲にはいまだに火球が飛んできている。

「行きますー!」

ハルジオンは飛び出した。

降り注ぐ火球を避けながら、ハルジオンは風魔法を使って飛びあがる。

その様子にドラゴンが気づくと、火球の連射速度が上がっていく。

ハルジオンは避けることに集中し、なかなかドラゴンに近づけない。

だがドラゴンの注意は詩音に集中している。

今なら、S A Y Aは自由に動ける。

S A Y Aは眼をつむって、手を前に出す。

その手元に氷の槍が形成されていく。

さらに固く、さらに鋭く。

数秒をかけて形成されたその槍を、紗耶は投げる。

腕力だけでなく、魔力を乗せた一撃。

狙いは翼。忌々しいその翼を引き裂かんと、氷槍が迫る。

だがドラゴンはすんでの所で気づく。

ひらりと身をかかわそうとするが、

「させない！」

ドラゴンが槍に気をとられた一瞬の間隙について、ハルジオンが近づいていた。

SAYAは槍が迫る反対の翼に近づき、そこに暴風を引き起こす。

ぐらりとドラゴンの体勢が崩れた。それは一瞬、だが致命的だ。

ザン！

ドラゴンの翼を氷の槍が縦に引き裂く。

「こつちも貰うよー！」

ハルジオンはステッキの先から、大きな風の刃を作り出す。

それを振るって、ドラゴンの翼を切り裂いた。

大型のクレーンがきしむような音が響く。

ドラゴンの叫び声だ。

ドラゴンは大きく体勢を崩すと、そのまま地面へと落ちて行った。
ズドン！

大きな衝撃音が響いた。

『やったか!?!』『やったか禁止!』『これはやってないですわ』

まきあがる土煙の中で、大きな影が動いた。

突風が吹き抜けて、煙が払われる。

現れるドラゴン。その眼からは怒りが消えて、覚悟のようなものが見える。

体を覆う真つ黒な鱗。背中から尻尾にかけて、その黒い鱗の隙間から青白い光が漏れ出る。

ゾクリと、詩音の背中に寒気が走った。

それと同時に、ドラゴンの存在感が増す。空気が震えていると錯覚するほどの威圧感が振りまかれる。

『なにこれ?!』『なんかヤバくね?』

ドッ！

地面が爆ぜた。ドラゴンが地を蹴った衝撃で。

その巨体からは想像もできないほどの速度で走ると、SAYAに向かって前足を振り下ろす。

「ッ!!」

SAYAはギリギリで攻撃を避ける。

しかし、衝撃波によって吹き飛ばされ、ゴロゴロと地面を転がった。

「SAYA!!」

ハルジオンはSAYAを助けに入ろうと飛ぶ。

しかし、そこそがドラゴンの狙いだった。

ぐりんとドラゴンの目が動くと、ハルジオンをにらみつける。

そして鞭のように、その長い尻尾を振るった。

音を置き去りにして、尻尾が詩音に迫る。

直撃すれば死ぬ。そう感じるほどの勢いで。

「ハルジ——」

叫び声も間に合わなかった。

ハルジオンのステッキの先端が尻尾に触れる。

ぬるり。

尻尾は滑るように方向を変えると、ドラゴンの顔を強く打ち付けた。

『え、なに今の?』『魔法か?』『バリア系の魔法でそらしたのかな?』『そんなんできるの?』

頭を打ち付けたドラゴンが、ぐらりと揺れる。明らかなチャンスだ。

「SAYA！ トドメを！」

SAYAはハツとすると、大剣を構える。

その大剣から黒いオーラが揺らぐ。

「これで終わりよ！」

大剣をドラゴンの腹部に突き刺す。

亀裂の入っていた鱗は割れて、その肉体に剣が刺さった。

ドン！

くぐもった爆発音と共に、ドラゴンの体が鼓動こどうした。

そしてドラゴンはぐったりと動かなくなると、光の結晶となって消え去る。

カラリと、魔石が地面に落ちた。

「……終わった」

『うおー!!』『よく倒したな!』『おめでとう!!』『888888』

なんとか勝てた。

ハルジオンはその場にへたり込んだ。

「お疲れさま」

SAYAは魔石を拾い上げると、ハルジオンのもとに近づく。その顔は優しく微笑んでいた。

「この勝利はあなたの物ね」

そう言つて紗耶は魔石を差し出してきた。

その魔石には色がついている。ユニークモンスターは必ず魔宝石を落とす。

あれだけの強敵のものだ、相当な値段がつくかもしれない。

「いやいや、SAYAさんの攻撃力があつてこそです」

「そう？　じゃあ、二人で分けましょうか」

SAYAは腰のポーチに魔石を入れる。

そして少し躊躇いながら、口を開いた。

「ねえ、この後、時間あるかしら？」

第12話

その後、ハルジオンとSAYAは完全個室制の居酒屋に来ていた。

ドラゴンに勝利した打ち上げだ。

「本当にココで良いの?」

「あ、はい。大丈夫です。あんまり高いところだと緊張するので」

最初にSAYAから提案されたのはホテルの最上階にあるレストラン。

値段的にも、高度的にも高い。

もつとも、支払いは『助けてもらったお礼』と言うことで、SAYAが出してくれる。

そのためハルジオンに金銭的な不安はない。

しかし、『詩音』でなく『ハルジオン』として会って数時間。いきなり高いご飯を奢っ

てもらうのはどうなのだろうと考えた。

ちなみに高校時代。デートの支払いはすべてSAYA持ちだった。

売れないバンドマンのヒモみたいなやつである。顔だけは良いのが余計にたちが悪

い。

「あんまり緊張しないでちょうだい。ただのお礼だから。ほら、頼みましょう?」

「は、はい。ありがとうございます」

二人はメニュー表を見て注文する。

品物を待っている間、ハルジオンはそわそわと落ち着かない。

SAYAと普通に話して食事するなんて、とてもひさしぶりだ。少し緊張する。

それに、なんだか騙しているようで気まづかった。

『紗耶』は『詩音』に怒っている。一年もの間、口もきいてもらえないほどに。

それを違った姿で出会い、こうして普通に接して貰っているのは不誠実ではないのか。

(本当のことを言うべきなのかな……)

だが、そうしたら『紗耶』と接することが難しくなる。

今のようによく普通に仲良くすることはできないだろう。

だから、『詩音』はズルい選択をした。

(……今は黙ってしよう)

少しの間だけの関係だ。

この食事だけで終わるもの。

その間だけなら良いだろう。

「ところで、さっきのはどうやったのかしら？」

「え？」

ハルジオンの考えを断ち切るように、SAYAから声がかかった。

「さっきの、尻尾を受け流したやつよ」

「あ、ああ。あれですか」

ハルジオンは配信中のコメント欄を思い出した。

「ば、バリアを曲がった壁みたいに作って、そこを滑らせたんです」

「そんなことできるの？」

「え？ あ、はい。できる……ます」

そんなこと知らない。

ハルジオンはただ、杖にだけバリアを張って、攻撃を受け流した。

祖父の、受け流しづらいように放たれる斬撃に比べれば簡単だった。

ハルジオンの近接技術はとても高い。

それこそ、魔法少女にならなくとも近接系の探索者と戦えるほどに。

だが、勝つことはできない。確実に負けるだろう。

火力の差が大きすぎる。

武器系スキルは特定の武器に魔力をまとわせることが出来る。この魔力によって、使用者のスキルが成長するほど威力が上がる。

ハルジオンの祖父などは刀一本で山を切り裂くことができる。

そして、身体能力が向上するスキルの有無だ。

素の『詩音』の身体能力は、普通の人より少し高い程度。先ほどのドラゴンの攻撃などは、衝撃波だけでも致命傷になりかねない。

戦闘においてスキルは、とても大きな壁だ。

武神とたたえられたハルジオンの祖父だって、スキル抜きでドラゴンには勝てない……はずだ。

「ふうん？ すごいのね」

「正直、ボクもとつきにできて驚いています」

とりあえず、SAYAには納得してもらえたようだ。

二人がそんなことを話していると、料理が運ばれてくる。

ちなみに、ハルジオンは誕生日を迎えていないためお酒は飲めない。目の前にはジンジャーエールが置かれる。

SAYAの前にはカルーア・ミルクが置かれた。

「ごめんなさいね。私だけ頂いちゃって」

「いえ、気にしないでください」

SAYAはグラスに口をつけようとして止まった。

「そうだった、写真を撮ってもいいかしら？ SNSに上げたいの」

「はい。大丈夫ですよ」

「それじゃあ」

SAYAは立ち上がると、詩音の方へと歩いてくる。

（え、料理の写真を撮るんじゃないの？）

そしてハルジオンの隣に座ると、

「うえ!？」

ハルジオンの肩を抱きよせながら、自撮り用にスマホを構えた。

「あ、あの、ボクたちの写真を撮るんですか？」

「ええ、複数人でご飯を食べに来たら一緒に撮るものじゃないのかしら？ そういう写真をよく見るんだけど」

「ええ、複数人でご飯を食べに来たら一緒に撮るものじゃないのかしら？」

SAYAも良く分かっていないようだった。

大学での様子を見る限り、あまり人と食事をするこもないのだろう。

「だめ、かしら？」

SAYAは悲しそうな眼を向ける。

断れなかった。

「だ、大丈夫です」

「そう、良かった」

すると、またすぐにSAYAはハルジオンを抱き寄せる。

「うーん、うまく入らないわね」

ぎゅうぎゅうと引き寄せられる。

完全に体は密着していた。

（は、早く終わって！）

柑橘系の匂いがある。シャンプーか何かの匂いだろうか。

ハルジオンの腕が、SAYAの胸に当たりそうになる。必死に身をよじって回避するが、魔法少女は魔王の腕力にはあらがえず、どんどん体が近づいていく。

「うん、こんなものね」

パシャリと音が鳴った。

ようやく終わった。ハルジオンはホツと息をはく。

SAYAは写真を確認すると、すぐにスマホをしまった。

「あの、投稿しないんですか？」

「こういうのはリアルタイムで更新しちゃダメなのよ。居場所がバレてしまうからね」

へー、とハルジオンは感心した。

人気のインフルエンサーは、そんなことも考えながら投稿しているのか。

「今日も別の場所の投稿をしたから、ここがバレることはないわよ」
しかもブラフまで仕掛けているのか。

ハルジオンは憶えておいたほうが良いかもしれないと、心の中のメモに刻んでおいた。

「それじゃあ、邪魔してごめんなさいね。食べましょうか」

二人は食事を始めた。

二人ともそこまで喋る方ではないため、静かな食事が続く。
すると、ハルジオンは視線を感じた。

SAYAがジッとハルジオンを見つめている。

「えっと、なんですか?」

「いえ、所作がキレイだなと思っただけよ」

「あ、ありがとうございます?」

SAYAは箸を置いて、おずおすと口を開いた。

「実はね。ハルジオンさんを食事に誘ったのは理由があるの」

「理由、ですか?」

「どんな理由なのだろうか。ハルジオンは続く言葉を待つ。」

「私の……友人に似ていたからなの」

「ゆ、友人」

ハルジオンの胸がどきりと高鳴る。

まさか、自分のことだろうか。

「ひどい人なのよ？ 優柔不断で根暗で、こっちの気もしれないで変な行動する人なの」

SAYAは不満そうに言った。

優柔不断で根暗。やっぱ『詩音』のことだろうか。

「あ、ごめんなさい。ハルジオンさんのことを言ってるわけじゃないのよ？」

SAYAは顔を赤くしながら続けた。

「それに、迷ってる姿を見ると可愛いつて思うし、落ち着いてる人だから一緒に居ると安

らげるし、かと思ったら突然こっちをドキドキさせてくるような人で……」

SAYAはどんどんとうつむき、恥じらうように手をいじっていた。

その友人の好感度は高そうだ。これは自分の事じゃないな。

ハルジオンはそう結論を出した。

「でもちよつと前に喧嘩してしまつてね……いろいろと事情もあつて、仲直りはできていないの」

ちよつと前。これは確定で『詩音』ではない。

SAYAが万が一にも友人が誰なのか特定されないうちに、嘘を入れているのでなけ

れば、『詩音』ではない。

「あの、これは友人の代わりが欲しいわけじゃなくて、純粹にハルジオンさんと仲良くなりたいからのだけど……」

SAYAは少し不安そうな眼をした。

「ハルジオンさん、私とお友達になってくれないかしら？」

第13話

紗耶との食事が終わったあと、詩音は帰り道を歩いていた。

魔法少女の変身は解除している。

春の終わりごろ、過ごしやすい夜だ。

空には月が輝いている。

その月のように、詩音の心は穏やかに晴れていた。

詩音は、ハルジオンとして再び紗耶と友人になることにした。

連絡先を聞かれたので、とりあえずメールアドレスだけ教えてきた。

ハルジオン用のスマートフォンも買っておかなければならない。

(……飯野に頼んだら古いやつくれなйдらうか)

飯野が聞いたなら、『調子に乗るんじゃないわよ!』と言いながら、後日には本当にくれそうだと。

そんなことを考えながら詩音は歩く。

その時だった、

「ツ!?!」

詩音は殺気を感じて体をよじる。

ブン！

鈍器が風を切るような音が鳴った。

先ほどもで詩音の体があつた場所を金属の棒のようなものが通りすぎていた。

詩音は襲撃者から距離をとるように後ずさる。

襲撃者は黒いパーカーのような防具を着ていた。

体のラインは見えず、男か女かも分からない。

特殊な魔道具なのだろう。フードの中は暗闇に包まれており、顔も見えない。

「……………誰ですか？」

「……………」

当然のように、襲撃者は答えない。

その手にはヘアアイロンを長くしたような武器を持っている。

襲撃者はその武器をぐつと握りしめた。

詩音も、手に持っている長い杖を構えた。

魔法少女の時に使っているものとは別のものだ。

魔法少女状態の時に持っていた装備はすべて消える。代わりに変身前に持っていた

ものが再び現れている。

襲撃者が武器を振りかぶった。

武器は詩音の体のすれすれを通り過ぎた。

詩音は最小限の動きで攻撃を避ける。

そして杖を襲撃者の頭にめがけて振るう。

悲しいことに素の詩音の魔法攻撃力は恐ろしく低い。

杖で殴ったほうが早い。

幸いなことに、杖はメイスのような形状になっているため近接武器として使えなくもない。

だが、そう上手くはいかなかった。

ガン！ 音が響いた。

しかし襲撃者の頭部はびくともしない。

山でも殴っているようだ。

一切のダメージが通っていない。

(この感触、前衛の探索者かな……)

襲撃者が詩音の杖をつかもうとする。

しかし杖はスルリと抜け、詩音は再び構える。

襲撃者と向かい合う。

どうやら、襲撃者は手加減して攻撃しているようだ。

前衛の探索者なら、もつと勢いよく攻撃が振れるはず。

それをしてこないということは、詩音を殺したいわけではないのだろう。

手加減されている状態で、そう簡単に負けるつもりはない。

だが、決定打もない

このままでは、ジリジリと追い詰められるだけ。

だが幸いなことに、ここはダンジョンではなく住宅街だ。

「誰か！ 警察を呼んでくれませんか！ 襲われていますー！」

誰かに通報してもらい、警察が来るまで耐えればいいだけだ。

そう、思ったのだが。

（なんで、誰も反応しないんだろう？）

周囲の家には明かりが点いている。

あたりまえに生活している人々が居るはずだ。

外で叫び声が聞こえたら、カーテンを開けて確認ぐらいはするはず。

なのに、誰も反応しない。

なにか細工があるのか。

詩音は襲撃者を観察する。

その腰に、ピカピカと光を発している魔道具が見えた。

(まさか、周囲に音を漏らさない結界でも張っているのかな?)

詩音は思い出す。

たしか、モンスターが集まってこないように音を遮断する魔道具があったはずだ。それを使っているのかもしれない。

(あれを壊すだけなら、なんとかなる)

襲撃者は無理でも、魔道具にはダメージが入る。

そして魔道具を壊してしまえば助けが呼べる。

襲撃者が動いた。

狙いは首元。突きの一撃。

詩音は首をひねるだけで、それを回避する。

そして杖を振るって、魔道具を叩いた。

ベキン!

皿が割れるような音がした。

これで助けが呼べる。

詩音が叫ぼうとした時だった。

詩音の首に襲撃者の武器が触れる。

その瞬間、首から体全体に雷が走る。

足をつつた時のような痛みが体中に広がった。

その痛みは一瞬で引くが、体に力が入らなくなる。

詩音は貧血を起こしたように、その場に倒れていく。

(しまった、動きを阻害する魔道具だったのか)

襲撃者が詩音を見下ろす。

詩音は声を上げようとするが、詰まったように声が出ない。

襲撃者はその姿を確認すると詩音の目に布を巻く。

何も見えない。

襲撃者が詩音を抱き上げるのが分かる。

(どこに連れて行くつもりなんだ)

頬を風がなでる。襲撃者が走っているのだろう。

少しのあいだ走ると、詩音は優しくおろされた。

肌を草がなでる。近所の公園にでも連れてこられたのだろうか。

まさか、人気がないところで殺すつもりなんじゃ……。

詩音の体が緊張でこわばる。

最悪の場合は、ハルジオンに変身するしかない。

魔法少女状態ならこの程度の状態異常は治せるし、多少のケガをしても大丈夫だ。

不明な人間に正体がバレるのは避けたかったが、命の方が大事だ。

詩音はいつ変身するべきかと、身構える。

体に触れられた。その手はなでる様に詩音の背中へと流れていく。

そしてギュツと抱きしめられた。

(え、なんで?)

詩音の脳内がぐるぐると困惑する。

なぜ襲われたのか、なぜこんな事をされているのか。

甘ったるいミルクティーの入った、回るティーカップにでも乗せられてる気分だ。

抱きしめられて分かるが、襲撃者はずいぶんと厚手の服を着ていたようだ。

硬い布の感触が伝わってくる。

襲撃者はそれが気に入らないのか、もどかしそうに体をこすりつける。そしてぎゅう

ぎゅうと抱きしめる力が上がっていった。

「ちよ、まって、苦しいんだけど」

このまま絞め殺すつもりなんじゃないかと思つたほどだ。

だが締め付けが緩められた。

今度は首元を、メガネ拭きのような柔らかい触感がなでた。

髪の毛だろう。

猫のように頭を擦り付けているのだ。

ちなみに、猫が体をこすりつける理由はマーキングだ。

飼い主が外から帰ってきたときに、その体には外の匂いがついてる。

そこに自分の匂いをこすりつけて、『これは私の所有物だ』と主張している。

「こゃ、ん、はこゃ——」

襲撃者の興奮した吐息が漏れ出る。

その声には合成音声のような違和感がある。

声を変化させる魔道具を使っているのだろう。

襲撃者は声を漏らしながら、頭をこすりつけていく。

首、胸、手。

これが猫だったのなら、よほどその人のことを独占したいのだろう。

はたして何分間ほどそうしていたのか。

襲撃者はとりあえず満足したのか、詩音から体を離す。

腰のあたりに重みがある。馬乗りになっているような状態なのだろう。

ゴソゴソと音が聞こえる。

今度は何をするつもりなのか、詩音が少しうんざりする。

すると、鼻をつままれた。

呼吸ができなくなり、口を開く。

その瞬間、口がふさがれた。

生暖かい空気と粘液が口の中に入ってくる。

キスをされた。

?!?!?!
(?!?!?)

もはや詩音の脳の処理速度は追いついていない。

柔らかい何かが口の中に侵入してきた。

舌だろう。

だが、それだけじゃなかった。

(ツ!! ヤバい!)

口の中に苦みが広がる。

ボタンのような異物が口に入っている。

何らかの錠剤だろう。

詩音はそれを舌で押し返そうとする。

だが相手の舌が絡みついてくる。

蛇の交尾のように、二人の舌が絡み合う。

ごくり。詩音が葉を飲んでしまった。

相手の舌は、葉が残っていないことを確認するように、口の中を撫でまわす。それが終わると満足したのか、襲撃者の口が離れた。それと同時に、詩音の意識は深く沈んでいった。

○

知っている天井だ。

毎朝見慣れた天井が目に入る。

詩音が目覚めると、そこは自室のベッドの上だった。

(あ、あれ？ 夢？)

自身や周りを見渡しても、違和感はない。

いや、一つだけ違和感があった。

(なんかボク、お酒臭い？)

体からアルコールの臭いがする。

居酒屋に居たのだから臭いが移って当然だが、それにしても強い気がする。

そういえば、と詩音は思い出す。

詩音が飲んでいたのはジンジャエール。

アルコールの欄にも、ジンジャーなんとかと言う名前があつた気がする。

(え、間違えて飲んじゃつた?)

分らない。

酔つたにしては、昨日の記憶がはつきりしている。

先ほどまでの夢はリアルすぎる。

だがそもそも、酔つた経験がないので通常の状態が分からない。

そんなもんだよ。と言われたら、そんなもんな気がする。

夢だつたと言われれば夢な気がする。

(……夢、だつたのかな?)

酔つた可能性と、謎の襲撃者に襲われた可能性。

それなら酔つた可能性の方が現実的だ。

家に帰る途中で謎の人物に襲われて、その人から性的なことをされる。

意味が分からない。

現実的じゃない。

いっぽうで、夢っぽい混沌さを感じられる。

(夢か……なんか、変な夢見ちやつたな……)

あんな夢を見たと思うと、恥ずかしくなってくる。時計を見ると、いつもより早い時間だ。

詩音は気分を変えるために、散歩にでも行こうと準備した。アパートから外に出る。

すつきりとした涼しい空気が頬をなでた。

「あ、詩音先輩、おはようございます」

そこに華恋がやってきた。

ジャージを着ている。薄っすらと汗ばんでいた。

ジヨギングでも行ってきたのだろうか。

華恋はにこにこしながら、詩音に近づいてきた。

その笑顔は朝日よりもまぶしいくらいだ。

「おはよう。華恋ちゃん」

「む？　むむむ？」

華恋は詩音に近づいてくると、胸元に顔を近づけた。

華恋から薄っすらと甘い匂いが漂ってくる。

彼女は何かが気になるようだ。

そしてポケットから何かを取り出すと、それを詩音に向けてきた。

「えいー！」

プシ！

音を立てて、ほんの少しのミストが広がる。

そこからは華恋と同じ甘い匂いがした。

香水のようだ。

「詩音先輩、お酒の臭いがしてますよ？」

「あー、うん。なんか間違えて飲んじやたのかもしれないんだ」

詩音はバツが悪そうに言った。

後輩に良くないところを見せてしまった。華恋が真似しないといいけど。

華恋はその言葉を聞くと、さらに楽しそうに笑顔を強めた。

そして茶化すように、

「あー、詩音先輩は不良大学生ですね。ダメですよ。未成年がお酒飲んだら」

「本当にごめんなさい。華恋ちゃんは真似しないでね？」

「私は優等生なので、真似なんてしませんよ」

華恋は詩音の手を取ると、そこに香水の瓶を渡してきた。

「これ、差し上げます。臭いをごまかすのに使ってください」

「え、いいの？」

「いいですよ。いっぱい買ってありますから」

「じゃあ、ありがたく貰おうかな」

華恋はにこりと笑った。

「はい。絶対に使ってくださいね」

第14話

「あなた、香水なんかつけてるの?」

お昼。詩音が飯野と会うと、そう言われた。

「うん。昨日知り合いとご飯食べに行っただけど、その時のお酒の匂いが残ってたみたいで、後輩の子からごまかす用に貰ったんだ」

「ふうん?」

飯野はたいして興味も持たずに、詩音の隣に並んだ。

「それよりも、あなた、あれ見た?」

「あれ?」

「あの動画よ!」

詩音は首をかしげる。

分かっていない詩音を見て、飯野はスマホを取り出した。

「この動画よ!」

その画面には、紗耶とハルジオンがドラゴンと戦っている動画が流れていた。

どうやら配信の切り抜きがアップされていたようだ。

その再生数はすごいことになっている。動画サイトのランキング1位。カレンと撮影した動画の倍近くの再生数になっていた。

「うえ!?! す、すごいね」

「すごいなんてものじゃないわよ。紗耶さんはSNSメインでこのサイトでは活動してないし、もう一人のハルジオン? はつい最近になって配信を始めたばかりの子なのよ」

飯野は拗^すねたように画面をにらみつける。

「そりゃあ、これだけスゴイ戦いだもの再生数上がるのは分かるのよ。でもね!?!」

飯野はダン、ダンと地面を踏み鳴らす。

「なんで!?! 私が!?! 一年近くかけて築き上げた人気を!?! たった一か月程度で抜かされるのよ!?!」

ハルジオンのチャンネル登録者数は、飯野のチャンネルのものを超えていた。

ごめんなさい。それボクなんです。

そんなことを言えるわけもなく、詩音は飯野をなだめる。

「ま、まあ、落ち着いてよ。飯野には飯野の良さがあるって」

「私の良さってなによ?」

そう言われると、とっさには出てこない。

言葉にするのが難しい。

一緒に居ると楽しいし、困っていたら助けてくれる。

とてもありがたい存在なはずなのだが、居るのが当たり前になりすぎている。

「……優しい?」

「そんな、女が男のほめるところないときに、とりあえず言つとく単語第一位を言われたって、何もうれしくないわよ!」

飯野は、はあはあと息切れを起こす。

そして落ち着いた時には、真剣な目で詩音を見つめた。

「こうなったら、路線変更よ」

「はあ?」

飯野はガツと詩音の肩をつかむ。

すごい力だ。本当に回復職なのだろうか。

「私とあなたで、カップル探索者として再出発するわ」

「ええー?」

カップル探索者。

文字通り、カップルの探索者。特にダンジョン配信を行っているカップル探索者を指す言葉だ。

詩音には何が面白いのか分からない。

だが需要があるから活動しているのだろう。

「雑にイチャイチャしとけば、視聴者は『てえてえ』だのバカみたいなこと言つて興奮するはずよ」

「いや、失礼すぎるよ……」

そもそもの問題だが。

「ボクらがイチャイチャできるの？」

「吐き気がするわね。でも数字のためなら私はできる」

飯野は数字にうるさい女だった。

再生数を稼ぐためならなんでもする。プロのエンターテイナーだ。

「いや、ボクが嫌なんだけど」

「私みたいな美女とイチャイチャできるのよ！ おとなしく享きようじゆ受しなさい」

飯野は詩音の腕を組む。

「帰つて企画会議よダーリン」

「午後の講義どうするのさ？」

「そんなもの欠席しなさい」

飯野が強引に引つ張つた時だった。

カツンと足音が聞こえる。

そちらから、紗耶が歩いてきていた。

「……あれ、明らかにあなたの方に向かってきてるわよね？」

「そう、見えるけど」

いつものように無視をして通り過ぎる感じではない。

まっすぐに詩音の元へと歩いてきている。

「……ごめんなさい。用事を思い出したから行くわね」

「待ってよハニー」

逃げ出そうとした飯野の手を、詩音がつかんだ。

「うっさい！ 離しなさいよ！ 私を巻き込まないで！」

「死にそうなときに回復してくれるだけでいいから！」

「おとなしく土下座でもして、魔王様に許しを請^こえばいいでしょ！」

カツン!!

二人のじやれあいをさえぎるように、足音が鳴った。

それも、すぐ近くで。

恐る恐る顔を向ける。

詩音のすぐ目の前に、紗耶が居た。

「……やつぱり」

「なにが、やつぱりなんだ？」

詩音は恐る恐るたずねる。

紗耶の目が、冷たく光った。

「最近、ずいぶんと女の子と仲良くしてるようね」

飯野はサツと詩音の背中に隠れるが、その様子を見て紗耶の目が鋭くなる。

「飯野は一年のころからの友達だよ。最近じゃない」

「ワタシ、オトモダチロボット、シオンニ、ナニモシナイ」

飯野は機械のように言った。

どうやら紗耶は、飯野には興味がないようだ。

オトモダチロボットをチラリと見ると、すぐ詩音に視線を戻す。

「じゃあ、あの一年の子はどうなのかしら？」

「誰のことを言ってるんだ？」

紗耶は苛立たしげに詩音をにらむ。

「キミと同じ香水を付けている子よ。こんな、明らかに女物の香水の匂いを付けておいて、知らないなんて言わせないわよ？」

紗耶はグイッと詩音に体を近づける。

詩音はだんだんと壁際に追い詰められる。

「ただの近所に住んでる人だよ。たまに、ご飯とか貰うんだ」
バン！

詩音の顔の横を、紗耶の手が通り過ぎた。

壁ドンだ。

だが、そんなにロマンチックな物じゃない。

いまは脅しのための道具だ。

「私が『お弁当を作ってあげる』って言ったときは、『自分で作るのが楽しいからいらない』って言ってなかった？」

「いや、それは……」

詩音は言うべきか迷う。

人には、時として残酷な事実もある。

それに、言ったら怒られそうだ。

「なに、言ってみなさい。怒らないから」

怒らないから。その言葉を聞いて、詩音は口を開いた。

「だって料理下手じゃん」

黒焦げの料理を出すならまだマシだ。

『今日はバレンタインデーだから、隠し味にチョコを入れてみたの♪』
ホワイトチョコで真っ白になったカレーが出てきた。

いや、存在を隠してくれよ。

そんな女の弁当を毎日食べたいとは思わなかった。

言ったら怒るかなと思っただので詩音は黙っていたのだが。

紗耶の顔が真っ赤に染まっていく。

恥ずかしさ、怒り、悔しさ。そのどれかか、あるいはすべてが混ざっているのか。

「なんで今さら言うのよ！ 高校時代に言ってくれば良かったでしょ！」

紗耶はごまかすように叫ぶ。

そしてガツガツと足音を鳴らして離れていった。

やっぱり怒るじゃん。

飯野はジトつとした目を詩音に向けてきた。

「あなた、一年生にまでたかっただの？」

「……はい」

詩音もさすがにどうなのかな。とは思っていた。

でも華恋のご飯がおいしかったから。

「適職診断をやってみましょうよ。結果を予測してあげるわ。ヒモよ」

そんな職業はない。

飯野に呆れられていると、ガツガツと足音を鳴らして紗耶が戻ってきた。

「え、なんで戻ってくるのよ。終わりでしょ!？」

紗耶は香水の瓶をシオンに向かって構える。

プシプシプシ!

乱暴に中身をばらまいた。

柑橘系の匂いが辺りに広まる。

それに満足したのか、またガツガツと離れていった。

「いや、私にまでかかったんですけど……」

隣りにいた飯野にもガツツリ匂いが付いていた。

○

詩音のスマホが震えた。

確認してみるとメールが届いていた。

ハルジオンのメールアドレスだ。

差出人はカレン。

なんの用事かと思い、メールを開く。

『ハルちゃんお疲れ様！ 今日も一日頑張ったね。私はハルちゃんのおかげでなんとか頑張れたよ。授業中もハルちゃんのことを考えてたら、つい笑っちゃって友達に変な目で見られちゃったよ。もしかして、ハルちゃんも私のこと考えててくれたかな？ そうだと嬉しいな。それでね——』

長々とした文面が続く。

マス埋めゲームじゃないんだから、もうちよつと改行とかしてほしい。

そもそも、なんのメールなんだろう？

詩音は疑問に思いながらも、チカチカする目を細めながら最後まで読む。

一番最後に用事が書いてあった。

『相談したいことがあるから、この後会えないかな？』

第15話

ハルジオンは公園を歩いていた。

大きな公園であり、朝の時間帯には散歩をしている人も多い。

寂しげに光る夕日が、緑色の木々を照らしている。

この公園にある銅像の前でカレンと待ち合わせしていた。

銅像が見えてくる。

その前にカレンが立っていた。

カレンはそわそわとしながら、周りを見回している。

そしてハルジオンを見つけると、パツと笑顔を咲かせて駆け出した。

「ハルちゃん！ 会いたかったよ！」

動画を撮影したのが数日前。

なのにカレンは数年ぶりに親友に会ったかのように興奮している。

そしてギュッと抱きついてきた。

しかし、

「……嫌な臭いがする」

家でシャワーを浴びてから来たはずなのだが、臭かったらうか？

ハルジオンは自分の匂いを確認する。

石鹸の匂いに混じって、わずかに柑橘系の香りがする。

香水の匂いは落ちきっていないなかったらしい。

だが嫌な匂いだとは感じないが、華恋は苦手な香りなのだろうか。

嫌な臭い。

華恋はそう言っただが、なぜかハルジオンを抱きしめる力を強めた。

そして、甘えるようにスリスリと頭をこすりつけてくる。

柔らかい髪が首筋を撫でる。

気持ちの良いくすぐったさだ。

それは、昨晚の夢で見た感覚に似ている。

「あの、カレンちゃん？」

ハルジオンが声をかけると、カレンは動きを止めて、ハルジオンの胸に顔をうずめた。

「ねえ、ハルちゃんはあの動画見た？」

ゾクリと、ハルジオンの背筋が震えた。

カレンの声は静かで穏やかだったはずなのに、刃物のような鋭さがあった。

あの動画。

飯野と話したときにも聞いた単語だ。

「……ドラゴンを倒してる動画のことかな」

カレンが胸から顔を上げる。

暗闇から獲物を覗く猛獣の瞳のように、カレンの目が見開かれていた。

「あの動画、すつごく話題になってるんだ。私達の動画よりも再生数が上がってる。S NSでは、ハルちゃんと『あの女』の名前が並んでトレンドに入ってる」

カレンはハルジオンを抱きしめる力を強めた。

誰にも渡したくないと主張するように。

「おかしいよね。私とハルちゃんの方がお似合いなのに、私とハルちゃんの方が仲いいのに、私のほうが、ずっとずっとずっと、ハルちゃんのこと好きなのに」

その言葉はハルジオンに言っているというよりも、カレン自身に言い聞かせているように聞こえた。

「なのにな。何も分かってない奴らが言うんだよ。ハルちゃんと『あの女』がお似合いだって。そんなわけがないのにな」

カレンの瞳が揺れる。

心の不安を表すように震える。

「ねえハルちゃん。見せつけてやろうよ。なにもわかってない奴らに、私達のほうがお

似合いだつて」

その言葉はミツのように甘くドロドロと空気に流れた。

「見せつけるって、なにをするの？」

「ドラゴンを倒そうよ」

「それは、違うんじゃないかな」

ハルジオンも動画を見た。

そのコメント欄もぞいた。

その反応を見た感じでは、

「あの動画が人気なのは、女子二人が強敵に挑んでいるからだと思う。ただ、ドラゴンを倒すだけだと……」

ドラゴンと言つても種によって大きな差がある。

正直言つて弱いドラゴン程度なら、ハルジオンとカレンなら簡単に倒せてしまう。

「じゃあ、ユニークモンスターを倒そう」

「うーん……」

ユニークはそう簡単に出会えるものでもない。

目撃されると情報が出回る。

なにも知らない探索者が、出現したダンジョンに近寄らないようにするためだ。

それと同時に、腕に自信のある探索者はユニークを倒そうと動き出す。

ハルジオンたちが情報を入力して向かってても、すでに倒されている可能性が高い。そう言つて、カレンを説得しようとしたのだが。

カレンが泣きそうな顔をしていた。

迷子になった子供が、母親を探しているような顔だ。

ハルジオンが良い反応を示さないため、不安に思っているのだろう。

どうにかしたい。

ハルジオンを奪われたくない。

でも、どうしたら良いのか分からない。

そんな表情を見ると、ハルジオンは否定できなかつた。

「……分かつたよ。機会があれば、ユニークを倒す動画か、もしくは配信をしよう」

「ほんとう?」

「うん。約束しよう」

それでも不安そうにしていたカレン。

それを落ち着かせようと、ハルジオンはカレンの髪をなでた。

カレンは一瞬驚くが、安心したように顔が緩んだ。

「えへへ。私ね、ハルちゃんと一緒なら、なんにでも勝てる気がするんだ。だってハル

ちゃんは私のヒーローだもん。かつこよくて、かわいくて、私を守ってくれる。ハルちゃんと一緒に居ると安心するの」

ハルジオンの手に、甘えるように頬をこすりつけてくる。

「でもね。一回この安心を知っちゃうと、ハルちゃんと一緒に居ないと不安になってくるんだ。ハルちゃんが居なくなるんじゃないかって、もう会えないんじゃないかって」

カレンはおびえるように震えた。

「ねえハルちゃん。どこにも行かないでね。ずっとずっと私と一緒にいてね」

「うん、そうなるように頑張るよ」

ずっと一緒に居ることはできないだろう。

それでもハルジオンとして活動しているあいだは、カレンと友達でいれるはずだ。

その時間を少しでも長く続けられるようにしようと思った。

「えへへ。良かった」

カレンはにこりと笑うと、ハルジオンから離れた。

安心するようなぬくもりが離れて、少しだけ寂しく感じた。

「ハルちゃん。今日は会ってくれてありがとう。ユニークとかは関係なく、近いうちにまたコラボしようね」

「うん。そうしよう」

「それじゃあ、私行くね」

カレンは名残惜しそうにしながらも、走り出した。

この後も用事が入っていたのだろう。

なんとか作った時間でハルジオンに会いに来たのかもしれない。

ハルジオンは公園を見渡す。

カレンが待ち合わせ場所にこの公園を選んだのは、あの銅像の前を選んだのは偶然なのだろうか。

ハルジオンは公園を歩く。

この公園の中央には銅像がある。

昔、まだハルジオンが生まれる前の話だ。

この近くのダンジョンからモンスターが外に出てきた。

一匹や二匹ではない。大群だ。

こうした現象はスタンピードと呼ばれ、一説には『ダンジョンが自らを守るために外敵を排除するために起こしている』と言われている。

多くの死傷者が出た災害だ。

そのモンスターの大量を相手に奮闘して、災害をおさめた英雄がいる。

その英雄の銅像が作られていた。

ハルジオンが歩いていくと、銅像がよく見えてくる。老人の像だ。

背筋をスツと伸ばして、腰には刀を下けている。

その顔つきは老いたオオカミのように凜としており、若いころにはさぞモテただろうことが予想できる。

この銅像はハルジオンが小さいころに作られたものだ。

そして、完成した時にこの公園にやってきたことがある。

銅像の人物に連れられて。

その人は自分がどれだけ凄いいことをしたのか、どれだけ偉大な人物なのかを延々と語っていた。

そんな話に興味はなかったが、後で内容を確認されたときに答えられなければ、木刀で殴られるのが分かっていたため真剣に聞いていたのを覚えている。

ハルジオンは銅像を見る。

今でも、その姿を見ると怖い。

まるで肺に重りをつけられたように、呼吸が不安定になる。

その銅像の台に名前が書かれていた。

『小峰楼雅』
こみねろうが

それは詩音の祖父だった。

第16話

日曜日の朝はヒーローの時間だ。

全国のチビっ子たちはテレビにかじりついて、ヒーローたちの活躍を心に刻む。

小さい頃の詩音も、その一人だった。

しかし、詩音はテレビを見ることを制限されていた。

見ていいのはニュースと将棋だけ。

それ以外のものは心が腐ると祖父に言われて、見ることを禁じられた。

しかし、日曜日の朝。

詩音に鍛錬をつけ、風呂で汗を流し、朝ごはんを食べたあと。

祖父は書齋にこもって本を読む習慣があった。

その時間は祖父の目がないため、こっそりとテレビを見ることができる。

時間的に、カラフルな戦隊や、バイクに乗った人たちは見れない。

魔法少女たちが戦うアニメだけが見れた。

それは、どちらかといえば女の子向けのものだ。

しかし、詩音はそれで良かった。

知り合いの女の子に教えてもらったそのアニメは、何気ない日常の中で友情を育み、その力で悪を倒すストーリーだった。

友達がいらない。

作らせて貰えない詩音にとつて、それはとても眩しくて羨ましいものだった。

今日も魔法少女たちが戦っていた。

『マジカルビィーーム!!』

桜色の髪の少女と、その仲間たちが杖を構えて魔法を放つ。

(ボクにもともだちがいたら……)

こんな風に、勇気を持って戦えるのだろうか。

しかし、少女たちの活躍は最後まで続かなかった。

魔法が悪党を打ち倒す寸前で、映像が断ち切られた。

物理的に。

音もなくテレビが真っ二つに割れた。

バランスを崩したテレビは、ガシャンと台から落ちた。

詩音は驚きで頭も追いつかず、その光景を眺める。

詩音の服の襟が掴まれた。

その瞬間、詩音は内蔵を引っ張られるような遠心力を感じた。

投げ飛ばされた。

「うぐっ！」

それを理解すると同時に、背中に強い衝撃が走った。

肺の中身が強制的に押し出されて、小さなうめき声をあげる。

ガシャン!!

うめき声をかき消すように、ガラスの割れる音が響いた。

ザリザリとした玉砂利の引かれた庭に投げ出される。

詩音は数回ほど地面を転がって、ようやく止まった。

とっさのことながら、受け身が取れた。

しかし、その小さな体には大きすぎる衝撃だ。

うつ伏せの状態から、なんとか立ち上がろうと、体を起こす。

しかし背中を殴られた。感触的に木刀だろう。

詩音は潰れた虫のように地面に叩きつけられる。

もはや、立つ気力もわかかなかった。

「貴様、なんて物を見ているんだ!!」

潰れた詩音を踏みにじるように、怒鳴り声が響いた。

「貴様にはくだらない娯楽に費やす、時間も精神も無いと言っただろう!!」

詩音の髪が掴まれる。

痛みに引つ張られるように持ち上げられて、無理やり正座をさせられた。

「貴様はなんのために生きています。なんのために存在している」

それは詩音が祖父から言い聞かせられていたことだ。

なんども、なんども。

洗脳でもするように。

「この国と、小峰家の誇りを守るためです」

「ならば、そんな貴様には、あんなものうつつを抜かしている時間があるのか」

「ありません」

子供にだって分かることがある。

詩音の祖父は国だとか、小峰家だとか。

そんなものはどうでもいいのだ。

本当に大事なものは祖父自身で、国を助けるのも、小峰家の箔を重視するのも、自分の

価値を引き上げるためだ。

そして詩音のことは、孫とも人とも思っていない。

作品だ。

祖父が、こみねらうが小峰楼雅がが作り上げようとしている至高の作品。

あらゆる『無駄』を削り、あらゆる苦難で叩き、鍛え上げようとしている一振りの刀。それは祖父自身の宝物ほうもつであり作品だ。

そして祖父の所有物に自由はいらない。

作品に心はいらない。

愛、夢、友情、そんな物は刀に必要ない。

祖父は削り出そうとしているのだ。

詩音の無駄な物を。

「もう二度とあんな軟弱な物に触れるな。次に触れば、母親との面会は無くす」

詩音の体が震えた。

詩音の母は、詩音の扱いを巡って祖父と対立した。

結果として母は小峰家を追い出された。

現在は月に一度だけ、詩音との面会を許されていた。

その時だけ、詩音は普通の子供として甘えられた。

だが、その面会だって祖父の機嫌一つで消え去る。

「す、すいませんでした。これからは言いつけを守ります」

「分かったなら木刀を持って修練場に来い。貴様の腐りかけた精神を鍛え直してやる」

詩音はうなずくと、よろよろと立ち上がる。

刀なんて、嫌いだった。

○

『失礼だけど、あなたのおじいさん。イカレてるんじゃないの?』

スマホ越しに飯野はそう言った。

家に帰った詩音は、飯野に電話をして過去のことを話した。

「いや、ボクもそう思う」

中学生を卒業するころに、祖父からの支配は終わった。

魔法系のスキルしか発現しなかった。

そのスキルだって、まともに戦えるものではなかった。

祖父は詩音に見切りをつけた。

失敗作の烙印らくいんを押した。

それから紗耶と付き合い始めて、当たり前前の常識を知って、詩音は祖父がろくでもない人間だと理解した。

『それで、その話を聞いて、私に何をして欲しいの?』
どこことなく、突き放したような言い方だった。

『あなたの元カノさんか、仲の良いらしい後輩にでも話したらいいんじゃない。慰めてくれるわよ』

どうしてそこで、紗耶や華恋の話が出てくるのだろうか。

「なんか飯野、機嫌悪い？」

『別に、何も悪くないけど？』

悪くないと言うのなら、そうなのだろう。

スマホを通してのせいなのだろうか。

『それで、なんで私に話したの？』

「……この間、ボクは人の気持ちがあんまり分かっていない。みたいな話をしたよね」

紗耶と別れた話をした後だ。

紗耶が怒っているのは詩音が悪い。人の気持ちが分かっていない。

そう飯野に叱られた。

「祖父も人の気持ちが分からない人、いやたぶん人の気持ちを理解しても無視するような人だった」

常に自分を、自分だけを貫いていた人だ。

他人の気持ちなんてものに、なんの価値も感じていないのだろう。

それが当たり前のように、詩音の気持ちだって無視していた。

「ボクはそんな祖父の事が嫌いだ」

いつだって、自分を押し付けてくる嫌な人だと思っていた。

「だけど、ボクも同じだった」

紗耶の気持ちを理解できずに、怒らせてしまった。

そして、ふと気づいてしまった。

「怖くなつたんだ。紗耶と同じように、飯野も怒らせてしまうんじゃないかって」

詩音には、飯野以外の友人はいない。

また、一人ぼっちになってしまう。

「飯野にだけは嫌われたくない。と思つて」

どんがらがっしょん!!

スマホから大きな音が鳴った。

詩音は思わずスマホを耳から離す。

「い、飯野?」

『ちよ、ちよつと躓いただけよ』

スマホから大げさな呼吸音が聞こえる。

深呼吸でもしているのだろうか。

『ふーん、あなた、私にだけは嫌われたくないんだ。へー』

「え？ うん、そう言ったけど」

なんとなく飯野の機嫌が良くなっている気がした。
なぜだろう。

反省している姿を見せたのが良かったのだろうか。

詩音は首をかしげる。

「ともかく、悪いところがあつたら言つて欲しいんだ。飯野のために頑張るからさ」
『ぐはあ!!?』

飯野のうめき声とともに、ごとりとスマートフォンが落ちる音がした。

「飯野!?! どこか悪いのか!?!」

『そうね、心臓に悪いわ』

「え、飯野つて心臓に病気があるの……?」

詩音は知らなかった。

飯野に心臓の病気があるなんて。

心臓の病は命にかかわる。ようなイメージが詩音にはあつた。

はたして飯野の命は大丈夫なのだろうか。心配する。

『嘘に決まつてるでしょ』

「……なんでそんな意味不明な嘘つくのさ」

詩音はホツとすると共にあきれた。

趣味の悪い嘘だ。

『……たぶん、あなたが人の気持ちを理解するのは難しいんじゃない』

「いや、見捨てないですよ……ボクには飯野しかいないんだから」

『そういう所がたち悪いのよ！』

ブツリと電話が切れた。

どこで飯野を怒らせたのか、詩音には理解できなかった。

その後、飯野からチャットアプリにメッセージが届いた。

『さっきのは怒ったわけじゃないから、気にしないで』

そうなのか、怒ったわけじゃないならいいのだろうか。

とりあえず放置して、また学校で話せばいいだろうと詩音は切り替えた。

ふと思い出して、ハルジオンのメールアドレスを確認する。

そろそろ収益化の申請が通るころじゃないだろうか。

いまだ収益化のメールは届いていなかったが、かわりに気になるメールが三通届いていた。

『ハルちゃん、今日は話してくれてありがとう。絶対に一緒にユニークを倒して、『あの女』との動画の再生数を超えようね。ところで、私とハルちゃんって一緒にダンジョン

に入ったことないでしょ？ 練習もかねて明日ダンジョンに潜らないかな？』

『ハルジオンさん、こんばんは。よければ明日、一緒にダンジョンに潜らない？』

それぞれ、カレンとSAYAから届いたものだ。

そして最後の一通は――

閑話 とある兄の妄想

「帰りたくない……」

人が行き交う街の中で、小峰刀夜は呟いた。

鋭い目つき、見た目的には俺様系な感じの青年だ。

しかしその背中中は覇気がなく。だらりと折れ曲がっている

刀夜はふらふらとネットカフェへと足を向けた。

帰りが遅くなると、祖父に怒鳴られるかもしれないが、今は少しでも逃げたかった。

高校生ぐらいまでは祖父に憧れていた。

武神と称される英雄。

数々の功績を残し、家には感謝状やお礼の記念品などが大量に並べられていた。

そんな祖父の英雄譚を子守唄のように聞かされて育った。

憧れないわけがなかった。

大きくなったら祖父に稽古をつけてもらい、祖父のような英雄になるのだと信じてい

た。

祖父は刀夜に関心を示さなかった。

祖父が興味を示したのは、弟だった。

ほんの少し弟の素振りを見ただけで、祖父は弟に剣の才能があると見抜いた。

そして刀夜のことは捨て置き、弟に稽古をつけていた。

弟の一日は祖父が完全に管理し、交友関係を遮断。趣味のたぐいは禁止。その生活に一切の自由はなかった。

しかし、目がくもっていた刀夜には、それだけ祖父が弟に目をかけて、大切にしているように見えた。

羨ましかった。

はじめは羨ましかっただけが、それはだんだんと強い嫉妬に変わっていった。

しかし、なんだかんだで弟は祖父に見捨てられた。

喜んだ。

次に祖父が関心を示すのは刀夜だと。

しかし、そうはならなかった。

祖父が弟を気に入っていたのは、弟の才能があったからだ。

刀夜には祖父が興味を持つほどの才能がなかった。

最初は落胆した。

だがすぐに、むしろ幸運なことだったと気付く。

祖父が興味を持たなくとも、弟が駄目だったならば、いずれ家を継ぐのは刀夜だ。

祖父は刀夜が家督を継ぐに足る男にするために、稽古を始めた。

地獄だった。

行動を制限され、交友関係に口を出されて、趣味を否定される。

メンヘラ彼女かよ、クソジジイが！

そう心の中で毒づいた回数は百回を超えるだろう。

心のなかでは、祖父『楼雅』のことを老害と呼んでいる。

この言葉が、あのジジイ以上に似合うやつはいないだろう。と刀夜は思っている。

今思えば、弟に悪いことをしたと思っている。

嫉妬から嫌がらせや、いじめの指示をってしまった。

やってしまった事に後悔して、弟に声をかけようとしても、なんと言ったらいいのか

分からなかった。

「あいつ、元気にやってるかな……」

刀夜はネカフエの個室席に腰を落としながら呟いた。

パソコンのブラウザを起動する。

家にいたのでは、祖父に怒られるためろくに動画サイトも見れない。

動画のランキングを見る。

なんとなく、一位の動画を再生してみた。

「すごいな」

その動画は、二人の女子がドラゴンと戦うものだった。

ただのドラゴンではなく、ユニークモンスターだ。

本来であれば、学生が戦える相手ではない。

「これ、弟の彼女の……」

一人には見覚えがあった。

弟の彼女で、魔王スキルを発現していたはずだ。

「どうりで戦えるわけだ」

動画を眺めていると、戦闘の雲行きが怪しくなる。

ドラゴンの動きが激しくなった。

一瞬で弟の彼女が吹き飛ばされる。

そして、もうひとりの女の子に尻尾の一撃が当たろうとする。

シヨッキングなシーンを想像した、

しかし、そうはならなかった。

「今の、家の技じゃないか？」

ドラゴンの攻撃をそらした動き。

それは小峰家の技に似ていた。

同じようにドラゴンの一撃を逸らせと、刀夜に言われても無理だが。

「でも、家に入入りしてたやつで、こんな子はいなかったはず……まさか」

小峰家の技を習うには、実際に家に来るしかない。

そうしなければ、ジジイに殺される。

だが唯一、小峰家の技を教えられるほどの技量を持ち、なおかつ祖父に反抗的な人がいる。

「母さんの弟子か？」

今、刀夜の母がどこにいるかは分からない。

聞いた話では、ジジイに嫌がらせを受けて海外に行つたとか。

「いや、待てよ。この子、あいつに似てないか？」

画面の中の女の子は、弟に似ている。

これはつまり、

「俺の……妹!？」

弟は祖父に酷い扱いを受けていた。

それを見た母が、お腹の中にいた子供を隠そうとするのは当たり前のことな気がする。

刀夜は妹と思われる少女を妄想する。
妹？は刀夜の腕に抱きつきながら言うのだ。

『お兄ちゃん♪』

雷に撃たれた気がした。

それほどの衝撃だった。

そうだ、メイド服とか着せてみよう。

メイド服を着た妹？は少し呆れながらも、恥ずかしそうに笑う。

『もう、お兄ちゃんだったら、こんなのが好きなの？』

※彼はハルジオンの性格を知りません。

ニヤニヤが止まらなかった。

ぶっ壊れた脳みそに弟の顔が浮かんだ。

弟は中性的な、女装したら完全に女の子な顔をしている。

そうだ。弟にも着せてみよう。

弟は困ったような顔をして、もじもじとしながらメイド服を着ている。

『ボクなんか似合うかな、お兄ちゃん』

最高だった。

『私のほうが似合うよね！』

『ボクも、可愛いって言って欲しいな』

「これがパラダイスか……」

頭ぱっぱらパラダイス。

「俺は神の啓示を得た」

邪神の間違いでは？

「この光景を実現するには、あのジジイが邪魔だ」

刀夜はガツと立ち上がる。

家に帰って稽古をすると決めた。

「あのクソジジイを三途の向こう側にぶん投げてやる」

第17話

次の日の朝。

ハルジオンは待ち合わせ場所に向かった。

そこは喫茶店だ。

そのテラス席に待ち合わせ相手が居た。

相手はのんびりと何かを飲んでいたが、ハルジオンに気づくと立ち上がる。

「あ、ハルジオンさん、今日はよろしくお願ひしますね」

それは、ハルジオンにとっては見慣れた顔。

「改めまして、ころねです」

それは飯野友歌だった。

「お願ひします。ハルジオンです」

二人は軽く挨拶を済ませると、席に座った。

店員がハルジオンに注文を聞きに来るが、ハルジオンには金がない。

喫茶店で高い茶をしばいている余裕なんてない。

「あ、すいません。ボクは大丈夫です」

そうハルジオンは言った。

だがキュルキュルとお腹がなく。

どうしてタイミング悪くなるんだ！

ハルジオンは顔を赤くしてうつむく。

明らかに金がなくて頼めない人。いや、まだダイエツト中と言いつてできる。

「……好きなの、頼んでいいですよ」

バツと顔を上げる。

ころねがメニユー表を差し出していった。

「今日はコラボをしてもらうわけですし、これくらいなら奢ります」

「あ、ありがとうございますー！」

女神だ。

ハルジオンはメニユー表とにらめっこをすると、少し安めのケーキを頼んだ。

昔、ころねにおごってもらったときに高いのを頼もうとしたら怒られたことがある。

その経験が生きていた。

ハルジオンはワクワクしながらメニユー表をたたむ。

そしてお礼を言おうと、ころねの顔を見る。

ころねはジツとハルジオンの顔を見つめていた。

なんだろうか。

ハルジオンがそう開くよりも先に、ころねの口を動いた。

「ハルジオンさんって、意外とかっこいい系の顔してますよね」

「そう、ですか？」

ハルジオンの顔は、もとより中性的だった詩音の顔を女の子に寄せたような顔だ。

かわいい系か、かっこいい系かと言われると、かっこいい方に分類されるだろう。

「私の友だちに顔が似てるんですよ。こいつなんですけど」

ころねはスマホを点けると、そのロック画面を見せてくる。

（うわー!! なんて、その写真使ってるの!?)

それは、詩音と飯野が遊園地に遊びに行ったときのものだ。

毎度のことながら、支払いが飯野もち。

飯野は猫耳をつけてニヤニヤと意地悪そうに笑い。詩音は犬耳をつけられて、困った

ように、しかし嬉しそうに笑っている。

詩音は飯野にプレゼントされたチョーカーをつけており、それが犬の首輪みたいになり

える。

このあと、耳をつけたまま遊園地を歩き回った。

男性客で耳をつけている人は少なく、ハルジオンにとっては半ば黒歴史のようになって

ていた。

女装して配信してるよりはマシでは？

「じつは、ハルジオンさんにメールを送ってみたのも、なんとなくコイツに似てる感じがしたからなんです。意外と仲良くなれるかもって」

ハルジオンは動揺を悟られないように言った。

「へー、仲が良いんですね」

「うーん？」

ころねの反応が微妙だ。

ハルジオンは、ころねとは友人だと思っている。

予定が合うときはご飯と一緒に食べてくれるし、奢ってくれたりお菓子をくれたりする。

だが、微妙な反応をされると不安になる。

「どんな人なんですか？」

飯野が詩音をどう思ってるのか、気になった。

「……出来の悪い弟か、頭の悪い犬みたいなやつですね」

そ、そんな風に思われていたのか。

ハルジオンは衝撃を受ける。

「私以外に友達が居なくて、私が放っておくと捨てられた犬みたいなんですよ」
だって、ころね以外に友だちが居ないんだもの。

「ちよつとかまつてあげると、わーうれしー！ つて感じで懐いてくるんです。お菓子とかあげると顔には出さないようにしてるんですけど、見えない尻尾をぶんぶん振り回してる感じがするんですよね」

ばれてたのかー!!

ハルジオンはバレてないと思っていた。お菓子を貰うときも『まあ、貰えるものなら貰うときはますよ』ぐらいの表情で抑えられてると思っていた。

ハルジオンは顔を真っ赤にしてうつむく。

幸いなことに、ころねは昔を思い出すように遠い目をしているため、ハルジオンの異常には気づかれていない。

「ファミレスに連れて行ってあげるって言うのと、『ハンバーグ頼んでいい!』とか『ドリックバー頼んでいい!』とか言って大はしやぎで、子供みたいなんです」

もはやハルジオンの精神は死にかけていた。

もう人間をやめてミジンコになりたい。

そんなことを本気で考えていた。

だから、ころねが呟いた言葉が聞こえなかった。

「そういう所を見てると、かわいいなー、私は必要とされてるんだなー、私が飼いたいなーって思うんですね」

そこまで喋ると、ころねはハルジオンを見た。

「えつと、どうしたんですか?」

テーブルに伏せたハルジオンは、陸に捨てられたわかめのようになっていた。

「もう人間をやめたい」

「え、いや、別にハルジオンさんのことを言ってるわけじゃないですよ。あくまでも私の友だちの話で」

その友だちがソイツなんです。

「ごめんなさい、あんなクズと似てるなんて言つて、不愉快でしたよね」

「イエ、トテモ、サンコウニナリマシタ」

これからは奢ってもらえるときはバレないようにしようとハルジオンは決意した。それももたかるな。

その後、食事を終えたハルジオンたちは次の目的地に向かった。

そもそもの目的地はそっち。

他の人と合流する前に、ハルジオンと交流を深めてみたい。

そのころねの提案によって、二人は時間より早く会っていた。

ダンジョンの入り口が収容されている建物が見えてくる。
電車の車庫に似た建物だ。

その前で待ち合わせをしていたのだが、少しだけ人だかりができていた。
ハルジオンは不思議に思いながらも、そこに近づいてく。

そして人だかりの中心に目を向けた。

そこではカレンとSAYAがにらみ合っていた。

第18話

「おはようございます。SAYAさん。今日は私たちのダンジョン探索を手伝ってくれ
るみたいであります。」

「あら、私はハルジオンさんを手伝いに来たのよ。ついでに、まわりについている変な虫
を追いかけてあげようと思って」

「変な虫って寄生虫のことかな。ハルちゃんに寄生して名前売ろうとしている」

「あの動画の再生数は二人で戦った結果よ。寄生ではなくて、共同作業」

「そんなこと言っても——」

カレンとSAYAの二人は表向きは穏やかに、丁寧な口調で喋っている。

だが、その内容は完全にお互いをけん制しあっている。

修羅場だ。

「良かった。二人とも仲良くなれてるみたいで」

「は!? あなた脳みそぶっ壊れてるんじゃないの!？」

その様子を、ハルジオンところねが眺めていた。

ハルジオンは、なんか話が盛り上がってるみたいだしヨシ!

なんて思ったが、ころねから突っ込まれる。思わず丁寧口調を忘れるほどだ。

「人目があるから直接的な暴言は避けているだけで、会話の中身はお互いを罵倒してんじゃないの!」

「なんで罵倒する必要があるの?」

そうハルジオンが聞くと、ころねは首をかたむけた。

「そういえば、なんでかしら。カレンさんはハルジオンさんのガチ恋勢っぽいから分かるとしても、どうしてSAYAさんまで……『詩音』^{アイツ}が居なければまともな人だろうと思ったから来たのに」

ころねはハルジオンの顔を見ると、ハツとした。

「そ、そうか。この子の顔とか仕草とか、全体的な雰囲気、『アイツ』に似てるから他の女とイチャイチャしてるのが気に食わなくて——SAYAさんでどんだけ『アイツ』のこと好きなのよ」

ころねは何かに納得する。

そして、くるとダンジョンとは別方向を向いた。

「ご、ごめんなさい。私はやっぱり帰りますね!」

「え、ちよつと!?!」

帰ろうとするころねの手を、ハルジオンはつかむ。

「ちよつと、離して！ 私を修羅場に巻き込まないで!!」

「待つてよ！ ボクはあの二人に仲良くなつてもらいたいんだ」

「な、仲良く?」

ハルジオンの作戦はこうだった。

「カレンちゃんは、ボクとSAYAさんが仲良くなるのが気に入らないみたいなんだ。友達がとられるのが寂しいんだと思う」

ハルジオンだつて——『詩音』だつて『飯野』が他の友だちと仲良くしていると寂しくなる。もつと自分をかまつて欲しいと思う。

それと同じ感覚なのだろうとハルジオンは思つていた。

だから、カレンはSAYAに対抗意識を燃やす。

相手よりも自分を好きになつてもらうために。

だが、ハルジオンはもう一つの回答を導き出した。

「なら、三人で仲良くすれば良いよね? みんなが友だちになれば誰も寂しくないから」
ハルジオンのその言葉を聞くと、ころねは眼を見開いた。

そしてにつこりと笑つた。教会のシスターのように。

「そうなのね。じゃあ、三人で頑張つて」

「待つてよ! ボク一人じゃ二人を仲良くするのはムリだよ。ころねさんも手伝つてく

ださい。お願いします！」

「初対面の私にそんなことすがらないで!!」

帰ろうとするころねと、それに立ちふさがるハルジオン。

ところで、詩音とハルジオンでは身長に差がある。

ハルジオンの方が低い。

ちようど、ころねの目元あたりにハルジオンの頭が来るくらいだ。

ハルジオンがころねの胸元にすがりつく。

その状態だところねの顔を見上げることになる。

ハルジオンの顔は、ころねが気に入ってる『詩音』^{アイツ}と似た顔。

上目遣いのうるんだ瞳と、ころねは目が合う。

「ころねさんが居ないとダメなんだ……」

その光景は、承認欲求と保護欲が強めのころねのハートにぶつ刺さった。

「ぐはああ?」

「ころねさん!?!」

ころねは心臓を抑えながらうずくまる。

まさか、心臓の病気が嘘じゃなかったのかと、ハルジオンは心配になる。

だが、ころねは何かブツブツと言っている。心臓が苦しくて眩いている感じではな

い。

「ぐう、SAYAさんが元カノだと知ってから『アイツ』が気になってダメージがデカく
なってる。似た顔のハルジオンさんでこのダメージ……ダメよ私、本気になっちゃダメ。
あいつは安上がりなホストみたいなものなの。アイツと結婚なんてしたら全部私
がやらされるのよ。仕事、家事、育児……アイツの子供だったら可愛いだろうな——
ハツ?! ダメよ私、『音歌』ちゃんおとかの事は忘れるの!!」

早口でそうまくしたてる。

何を言ってるのか、ハルジオンには分からなかった。

「あの、大丈夫?」

ハルジオンが心配した瞳を向ける。

ころねはがつくりとうなだれた。

「勝てない……分かった。手伝うわ」

「え、本当!?!」

パツとハルジオンの顔が明るくなる。

すると、ころねがそつとハルジオンを抱きしめてきた。

その優しい抱擁ほうようで、ハルジオンは母を思い出して懐かしくなった。

「こんなところで、ガチ恋オタクどもの気持ちがあつてしまうなんて……今後はもう

少しフアンサしてやろう」

「あの、ころねさん？」

ころねは立ち上がると、ダンジョンの方を向いた。

ダンジョン、の手前の方からは、『肌が焼き付くような殺気』と『凍えるような威圧感』がまき散らされている。

「……よし、行くわよ」

「あ、うん」

二人は人だかりをかき分けて、カレンとSAYAに近づく。

人だかりを抜けると、二人はハルジオンに気づいて顔を明るくしたが、すぐに眉間にしわを寄せた。

ハルジオンの隣にいるころねを見て。

「……は？」

「なんで、キミが居るの？」

実はハルジオンは二人にこうメールを送っていた。

『明日は他の人も誘っていいですか？』

それに対しての返信が、

『良いよ。私が直接、あの女を倒してあげる』

『大丈夫よ。厄介な虫は私が追い払ってあげるから』

それぞれ、カレンとSAYAからの返信だ。

お互いが来ることは予想できていた二人だが、《もう一人》が居ることは予想外だった。

ちなみにころねは『どなたを誘うんですか?』とちゃんと聞いていたため、誰が来るのか知っていた。

カレンとSAYAの二人が、再び臨戦態勢に入ろうとしたところで、

「ちよつと、待ってください!」

ころねがストップをかける。

「お二人の気持ちはなんとなく分かってるつもりです。まずは、ハルジオンさんの気持ちを聞きましょう」

ハルジオンはころねに導かれるように、二人の前に立つ。

「えつと、ボクは二人に仲良くしてほしいかな。友だちを取られると寂しくなる気持ちは分かるから、ボクは皆で仲良くしたいんだ」

『いや、そうじゃないんだけど』

二人はそう言いたげに、微妙な表情をする。

それを説得しようと、ころねが前に出た。

「それに私たちはこれから、配信を始めるんですよ？ 露骨に仲悪くしたり、告知してた出演者がいなくなったりしたら、視聴者がおかしな妄想を始めます。それは、ハルジオンさんの迷惑になるかもしれませんよ？」

二人はお互いをにらむ。

こいつとは仲良くないやと目が語っていた。

「とりあえず、配信の間だけでも仲良さそうに振舞ってみませんか？ ハルジオンさんのために！」

ハルジオンのため。

そう言われると、二人はため息をついた。

「……配信が終わるまでは休戦しましょう」

「分かりました。終わってからですね」

とりあえず、二人は納得したようだ。

その様子を見て、ハルジオンはホッと息をはく。

二人には我慢をさせてしまうが、なんとか仲良くなってもらえるように頑張ろう。

「よし、じゃあ配信を始めようか」

第19話

ハルジオンたちはダンジョンの中を歩いていった。

ハルジオンの左腕にはカレンが抱き着いている。

右手はSAYAとつないでいる。指を絡ませた恋人つなぎだ。

(あの、これじゃ戦えないんだけど……)

どちらか離してほしいと頼んだが、どっちが離すかで喧嘩になりそうだった。

そのため、ハルジオンは両腕を拘束されることを選んだ。

ちよつと『捕まった宇宙人』みたいだ。

ステッキは腰に差してある。

杖がなくとも魔法は撃てるのだが、威力や精度が落ちる。

『修羅場で草』『百合ハーレム?』『ハルジオンさんメイド服着てください』

そしてその後ろからトボトボと、ころねがついていく。

「なんで私はナチュラルにハブられてるんですか……」

『がんばれ!』『最初は誰だコイツって思ったけど、苦勞人枠っぽくて好きになってきた』

『唯一の常識人』

ちなみにハルジオンたちが歩いているダンジョンは、日本の城のような見た目のダンジョンだ。

出てくるモンスターも、『からくり人形の武士』といった見た目をしている。

『マジで城っぽいみためだな』『からくり武士かつけえ』

このダンジョンは最近になって出現したものだ。

新しいダンジョンのほうが、新たなモンスターと、そのモンスターからとれる『新しく流通量の少ない魔宝石』がとれるため儲かりやすい。

それに視聴者も新鮮な気持ちで視聴できるため、配信者からも人気がある。

新作ゲームの実況動画みたいなものだ。

ダンジョンは洞窟、森、山のような一部の自然環境を切り取ったようなものが多い。しかし中には、こういった人工物がダンジョンとなっていることもある。

研究では、人工物ダンジョンの出現率は近年になるほど上がっているらしい。

その理由は良く分かっていない。

そもそも、なぜダンジョンなんて物が生まれるかも定かではない。

さまざまな推論が立てられているが、どれも根拠に欠ける。

かつて活躍した、高名でイカれた魔法使いは言っていた。

『すべての男女は星である。ダンジョンとはその星々が見る夢なのだ』

根拠のない妄想だが、ハルジオンはこの説が好きだった。

人々の夢がダンジョンになると言うのは、ロマンチックな気がする。

「ちよつと待つて」

カレンが立ち止まる。

どうやら壁を気にしているようだ。

「なんか、この辺に感じる」

「キミの気のせいじゃないの？」

「私は勘が良いほうなの」

勇者スキルは『勘が良くなる』みたいな能力があると、カレンから聞いたことがある。

結局、みんなでウロウロと周辺を調べてみるようになった。

「あれ、ココの床、押し込める？」

ころねが床を押す。

ガコン！

何かが動いた音がする。

カレンが気にしていた壁がぐるりと回りだした。

「うわ、忍者屋敷みたいだね」

『さすゆう』『わーお！ じゃぱにーずニンジャ!!』『これ、未発見の通路では?』

「未発見の通路?!?!」

コメントを見ていたころねがはしやぐ。

「もしかしてユニークが居る? 魔宝石で儲かる!?!」

新しく発見されたダンジョンではユニークモンスターが発見されやすい。

ユニークモンスターが誰にも発見されず、倒されずに残っている場合が多いからだ。

そして、ダンジョン発見初期のユニークモンスターは弱い場合が多い。

初期ボーナスなんて呼ばれてたりする。

「ここで儲けられれば、『アイツ』と旅行に——」

「すごい。ここでお金が入ったら、この間のドラゴンのものと合わせて『パワードスー

ツ』が買えるかも……いや、日ごろのお礼に皆にプレゼントするのも」

大金が入るかも。

そのことに喜んでいるハルジオンところね。

それに対して、カレンとSAYAは冷静だった。

もとより金を持っているからだ。

「未探索の場所に入るのは危険があるわよ。未知のトラップがあるかも」

「でも配信的には美味しいんだよね」

『行って欲しい!』『ワクワクする』『でも危ないんやろ?』『ダンジョンの難易度は高く

ないし、このパーティーなら問題なくね?』

「行きましよう! 撮れ高ですよ!」

「ボクも行きたい!」

欲にくらんだ二人の説得により、一行は隠し通路に入っていく。行きついた先は小さな部屋だ。

特に何もない。

「あ、あれ?」

「え、私のお金は?」

「こういうこともあるわよ。戻りましよう」

『あー、ハズレかあ』『しゃーない。切り替えていけ』

落胆する二人とコメント欄。

しかし、カレンだけは厳しい目で部屋を見つめていた。

「なんか、嫌な予感がする」

そう言った瞬間。

バン!!

勢いよく部屋の扉が閉まった。

「閉じ込められた!?!」

ころねが扉を開こうとするが動かない。
そして床に五芒星が浮かび上がる。

「とりあえず固まって、なにが起こるか分からないけど備えるわよ！」

4人は部屋の隅に固まって武器を構える。

そして、部屋が強い光に包まれる。

「あれ、違う部屋？」

ハルジオンが目を開けると、先ほどまでよりも広い部屋に居た。

「転移トラップかな……面倒なことになったね」

転移トラップ。

文字通り、ダンジョン内の異なる場所に飛ばされる罠だ。

SAYAは配信画面を確認する。

『転移トラップってヤバくね？』『食料とか大丈夫なんやろか』『でも電波届いてるなら、今日中に帰れる距離じゃね？』

「配信が止まってないなら、そこまで遠くないはずね」

「でも魔道具ですから、けっこう遠くまで電波が届きますよね？」

「頑張つて歩きなさい」

「そんなあ」

電波が届いているなら、そこまで困る距離ではないだろうとハルジオンたちは推測する。

それに助けだつて呼べるため、別に絶望的な状況ではない。とりあえず動いてみるしかないだろう。

ハルジオンがそう思つて、部屋の出口に向かつて歩いた。

ガコ!

何かを踏んだ。

「え、なに?」

ハルジオンが足元を見ると、そこから五芒星が上がってくる。

そしてハルジオンの体を包んだ。

「ハルちゃん!」「ハルジオンさん!」「ハルジオンちゃん!」

三人が心配する声が響いた。

そして次の瞬間。

「え、なにそれ可愛い!!」

カレンが喜んだ。

SAYAところねはびつくりして口を開けている。

ハルジオンの服装が変わっていた。

体を包むのは紺色のスクール水着。

足には白いニーソックス。

頭には桜色の、本物のような猫耳が生えている。

お尻からは尻尾が生えて、ゆらゆらと揺れていた。

『ヤバい！ クソトラップダンジョンだ!!』

第20話

クソトラップダンジョン。

内部に意味不明なトラップが仕掛けられているダンジョン俗称だ。

人命にこそ影響がないが、一緒に探索していたパーティーメンバーの仲を引き裂いたり、配信者の社会的生命を脅かす危険なダンジョンと言われている。

「な、なんにや、この格好!？」

ハルジオンは自身の姿に気づいて慌てる。

スク水、白ニーソ、猫耳、いかがわしいコスプレにしか見えない。

『うおおお!!』『猫耳最高!猫耳最高!』『ありがとうございます! (恐ろしいトラップだ……)』『にや?』『今、にやって言わなかった?』

コメントで指摘されて、ハルジオンは自分の言葉のおかしさに気づく。

「にやんか、言葉ににやが付いちやうにや」

ハルジオンの喋る言葉が勝手に猫っぽく置き換わる。

終わりだ。

こんな生き恥さらして、もう生きてけない。

「ボクはもう死ぬにや。さようにやら」

自身の人生の終わりを悟ったハルジオンは、トボトボと部屋の隅へと歩こうとした。

「ハルちゃん、可愛いよ!!」

カレンが後ろから抱き着いてくる。そしてハルジオンの猫耳をふにふにと触りだした。

「わー、ふわふわだ!」

続いてSAYAが正面にやってくると、ハルジオンの顎下をなでだした。

なぜか妙に気持ちいい。

ハルジオンはつい甘えた声を出してしまう。

「ふにや、そこはだめにや。にゃんか気持ちよくなるにや」

「なるほど、猫と同じような感じになるのかしら?」

SAYAは口調こそいつも通りだが、その口角が少しずつつ上がっている。

明らかに楽しんでる顔だ。

ハルジオンがダメと言っても、止めようとしなない。

「じゃあ、頭もうれしいのかな?」

カレンがハルジオンの頭をなでる。

その優しい手つきに安心して、ついカレンにもたれかかってしまう。

「もう、やめてにや。おかしくなっちゃうにや」

「いいのよ。おかしくなっても、私が責任を取ってあげる」

「ダメだよ！ ハルちゃん、私が責任取るからね！」

『うひょー!!』『僕もおさわりしたい!!』『これ、映して大丈夫？ b a n されない?』

『セーフやろ、女の子がじゃれてるだけや』『やばい、リビングで見てたら親にすごい目で見られた……』『……どんまい』

盛り上がるカレンとS A Y A、そしてコメント欄たち。

それをころねが冷めた目つきで見ていた。

ちなみにころねは犬派だ。

「^{あなた}貴女たち、盛り上がってるところ悪いんだけど。私たちだって、そうなるかもしれないのよ?」

ピシリと、凍り付いたようにカレンとS A Y Aの動きが止まった。

そしてハルジオンを見ると、顔が青ざめていく。

他人がなっているのを楽しむのは良いが、自分になるのは絶対に嫌だ。

そう思っていることが分かる。

『自分がスク水着てるところ想像してしまった……』『だからクソトラップダンジョンなんだよな』『でも配信だからOKです!!』『最低で草』

「ね、ねえハルちゃん。それってどういう状態なのかな？」
「にゃ？」

やっと解放されたハルジオン。

ハルジオンは腰につけていたバックから、スマホを取り出す。

探索者は皆、小さな腕輪をつけている。

それによって体をスキャンして、スキルなどの状態が分かる。

物理的な病気などは分からないが、ダンジョン由来の呪いなどは分かる。

その情報はスマホに転送されて、アプリによって確認することができる。

スマホのディスプレイには、こう映っていた。

『猫化の呪い』

猫耳と尻尾が生える。

猫っぽい喋り方になる。

解呪条件は30分経過。

『装備変化の呪い』

装備が変化する。

解呪条件は30分経過。

がつつり呪われていた。

30分間もこの姿で居なければならぬのかと、ハルジオンは青ざめる。だが気づいた。

幸いなことに、このパーティーにはころねがいる。

ころねは回復魔法が得意で、解呪などもできたはずだ。

ハルジオンは呪いの事を説明し、ころねに解呪してもらおうとするが……。

「あー、それは私じゃ無理ね」

ころねはサジを投げた。

「解呪条件があるやつは、その代わりに解きづらいのよ。しかも解呪条件が軽いほど余計にね。30分我慢するしかないわ」

神は死んだ。

うなだれるハルジオン。

そして沈黙が流れた。

このトラップがこれ一つしかない。

そんな保証はどこにもない。

次に引つかかるのが自分かもしれない。

もつと危険なトラップがあるかもしれない。

そう考えると、下手に身動きが取れなかった。

「……ボクが先に行くにや」

ハルジオンが立ち上がる。

「ボクが『みんなにや』を誘ったんにやから、ボクが責任をもつて前を歩くにや。そうすればトラップに引つかかる可能性が減るはずにや？」

『さすハル』『かつこいいよ！』『だがスク水白ニーソである』『猫語じゃなければ……』
ハルジオンが歩いたところを歩けば、トラップに引つかかる可能性は低い。

「いいえ。魔法系のハルジオンさんが前を歩くのは危険よ。モンスターに奇襲をかけられたときに、対処しやすいのは前衛の私たちだけ」

「それに、未探索の場所なら危険なモンスターが居る可能性だってある。やっぱり私たちが前に出ないと駄目だよ」

だが、カレンとSAYAは良しとしなかった。

前衛として自分たちが前に出ると宣言する。

『こっちは本当にかつこいい』『でもこの後は……』『おい、不穏なこと言うな！』
それに対して、ころねはおずおずと手をあげる。

「そ、それじゃあ、お二人は頑張ってくださいね。私は後ろから付いていきますから」
「そうね。あなたには回避不能なトラップがあったときに役に立ってもらいましょう」
「解呪できないなら体でトラップを解除してもらおうね」

「そ、そんなにやー」

『肉壁回復職……』『解呪できないからしやーない』『仕事しないとな!』
そうして、探索のフォーメーションが決まった。

第21話

四人は引き続きダンジョンを探索していた。

とりあえず、誰もトラップにはかかっておらず、普通の探索を続けられている。

ハルジオンの格好以外は。

(一人だけこの格好なのは恥ずかしい……)

他の三人はいたって真面目にダンジョン攻略を行っているため、一人だけスク水を着ていると、空気から浮いている。

さつさと呪いが解けてくれないだろうかと思いつながら歩いていると、

「あつ……」

SAYAが思わずといった様子で声を上げた。

その視線は足元に向いている。

予想通り。SAYAの足元から五芒星が浮き上がる。

そして気がついたときには、SAYAの格好はバニーガールに変わっていた。

『魔王様バニー…』『踏んでください!』『ヒールで踏まれるのは痛いぞ』『経験者は語る』

カジノのディーラーとかやってそうなオシャレな雰囲気だ。

足を包む黒タイツが怪しく光る。

ハルジオンとは違って、耳や尻尾は作り物らしい。

SAYAは自身の姿に気づくと、その顔が真っ赤に染まった。

羞恥よりも、怒りの方が強そうだ。

「な、なんなのかしら。この格好はッ！」

カレンが馬鹿にしたように笑う。

「あー、SAYAさんトラップ踏んじやったんですね。よくお似合いですよー」

『煽りよる』『あとで自分に帰って来ますよ』

「は？ 調子に乗ってるようだけど、どうせキミも踏むことになるわよ」

SAYAは今にも爆発しそうな爆弾のように震えている。

カレンも下手に刺激しないで欲しい。

ハルジオンは気がでない。

「残念でしたー。私は勇者スキルのおかげで勘がいいのでトラップなんて踏みませーん」

「はあ!? じゃあ私だけが馬鹿正直に前を歩いてたってこと!？」

「結果的にそうなっちゃうかなー」

「殺す」

SAYAが大剣に手をかける。

『やばい!』『勇者対魔王はもはや運命の対決』『こんなクソダンジョンで戦うなwww』
慌ててハルジオンは二人の間に入った。

「SAYAさん、すつごく似合ってるにや。キレイだにや!」

「え? そ、そうかしら?」

SAYAが大剣から手を離す。

良かった。勇者と魔王の対決は避けられた。

「それにカツコいいにや。思わず見とれちゃったにや」

「フフ、そんなに褒めても何もでないわよ?」

SAYAはニヤニヤしながら、ハルジオンの頭をなで回す。

『ちよろ!』『ハルちゃんがスゴイのか、SAYAさんがチヨロイのか』『魔王の威厳はズ
タボロよ!』

そして満足すると、くるりと後ろを向いてなにかブツブツと呟いていた。

「似たようなの買っちゃおうかしら。『あの人』に見せれば泣いてすがりついてくるかも

——」

とりあえず怒りはおさまったらしい。

ハルジオンがホツとしていると、カレンはなにやらウロウロと歩いていた。

それをころねが呆れた目で見ている。

「あ、トラップふんじやったー」

「いや、わざと踏みに行つたじゃない……」

『ハルちゃんに褒められようとするなwww』『さて、どうなるか……』

例のごとく、カレンの姿が変わつた。

ハルジオンところねは、バツと顔を背ける。

そして、カレンの姿を見たSAYAが思わず笑つた。

「プツ、フフフ、キミ、ナニその格好」

「え、なに、どうなつてるの!? 見えないんだけどー」

カレンの服装は変わつてなかつた。

ただし、頭には馬の頭が付いていた。

動画投稿者とかが付けるような、ジョークグッズの。

色は白く、馬の額から角が生えている。ユニコーンだ。

ドコを向いているか分からない目と、ぼんやりと口を開けたアホ面が笑いを誘う。

『草』『なんだそれwww』『ヒヒーンwww』『馬面で草ですわwww』『草食べますか

? つw』

SAYAがスマホの内カメラを鏡のように使い、その姿をカレンに見せる。

「はあ!! なにこれ!!」 やり直しを要求したいんだけど!」
「いいじゃない。よく似合ってるわよ。キミの馬鹿面」

カレンは馬の被り物を取ろうとする。

だが馬面が伸びるばかりで取れない。

諦めたカレンは、もう一度トラップを踏もうと歩き回る。

「あつた!」

再びカレンの服装が変化する。

今度はミニスカートのメイド服だった。

血まみれの。

手には鮮血がしたたる包丁を持っている。

「どうかなハルちゃん、似合う?」

似合いですぎていて怖い。

可愛いと言わなければ殺されそうな凄みがある。

「にゃ、にゃん。可愛いにゃん」

『ひえ……』『なんでこんなに似合うんだ……』『こ、怖え』『これは可愛い以外は言えんわ』

カレンとSAYAの二人は、結局よくわからないコスプレトラップを踏んだ。

ハルジオンはなんとなくころねを見る。

「いや、私は踏まないわよ」

それはそうだ。

どんな格好をさせられるか分からない。

自分から踏みに行ったカレンがおかしいのだ。

「そうね、ころねさんには後で役に立ってもらおうから」

「今は踏まなくて良いよ」

「おねがいます。回避不可能なトラップなんてありませんように」

話を終えた四人は前に進む。

そしてふすまを前にしてカレンが止まった。

「このふすま、なんか怪しい気がする」

「あら、トラップかしら」

二人はころねを見る。

どうやら出番のようだ。

ころねは嫌々ながら前に出て、ふすまに近づく。

「お願いします！ 大したことないトラップであれ!!」

ころねが勢いよく取っ手に手をかける。

ハルジオンが居た横の壁が勢いよく開き、そこから縄が飛び出てきた。縄はハルジオンとSAYAに絡みつくと、壁の中に飲み込んだ。

「ハルちゃん!？」

壁の中は狭い。

ロツカーくらいの広さだ。自然とハルジオンとSAYAは抱き合うような形になる。

だが、とりあえず危険はないようだ。

壁の1か所に木版が貼られており、そこには『しばらく待てばふすまが開く』と書かれていた。

「とりあえず大丈夫よ。しばらく待ってればふすまが開くらしいわ」

しかし、なぜこんな所に入れられたのだろうか。

ハルジオンは首をかしげる。

「これ、内側からは開けられるようね」

SAYAがそう言った。

ハルジオンも壁の一面を触ってみると、軽く押しただけで動く。

出ようと思えば、出れてしまうらしい。

「にやんで、入れられたんにやろう?」

「ふすまが開くまで耐えろってことなんでしようけど……こんなの少し体が痛くなるく

らいで——ッ!!」

S A Y A が喋っていた途中で、天井からガスが噴き出てきた。
ピンク色っぽいやつ。

毒かと思つたが、特にハルジオンに変化はない。

だが、S A Y A は違つたらしい。

「あ、あれ?　なんで、キミがここに、あ、違う、これはハルジオンさん?」

S A Y A が慌て始める。

どうしたのだろうか。

ハルジオンが首をかしげると、S A Y A が答えてくれた。

「いい、いえ。ハルジオンさんのことが違う人の姿と格好で見えてるの。ちよつと、この状況では顔を合わせづらい相手と言うか」

なるほど。

家族かなにかに見えているのだろうか。

ハルジオンは納得した。

○

SAYAはロッカーぐらいの狭さの場所に閉じ込められている。

謎のガスを吸い込んでから、五感がおかしい。

SAYAと共に狭い空間に閉じ込められているのはハルジオンだ。

そのはずなのに、目の前には詩音の姿が見える。

……ちなみにコスプレはしてない。私服姿だ。ついでに猫語も喋っていない。

そのようにSAYAは感じている。

「大丈夫？」

詩音に声をかけられる。

いつものように、にらみつけそうになるが目の前に居るのは『ハルジオン』なのだ

思い出す。

「え、ええ、大丈夫よ」

ふと、SAYAは自分の姿を思い出す。

バニーガール
こんな格好をしているのを詩音に見られるのは恥ずかしい。

顔から火が出そうになる。

だけど、それと同時に喜んでくれるだろうかと期待する。

もしかしたらもう一度、一緒になれるのではないかと淡い希望が浮かぶ。

「ね、ねえ。この格好、やっぱりおかしくないかしら？」

目の前に居るのがハルジオンだと分かっているけど、聞きたくなくなった。

「さっきも言ったけど、すごくかわいいよ」

「はう」

ドキドキと心臓が高鳴る。

つい詩音を抱きしめる腕に力が入る。

暖かい体温がSAYAを包む。とても安心する。ずっとこうしていたい。

「SAYA?」

目の前に詩音の顔がある。

二人の鼻先が触れる。

SAYAは詩音の口元に顔を近づけて――

バン!!

勢いよく壁が開いた。

「な、なにやってんのかなあ?!?!」

カレンの怒鳴り声が響いた。

SAYAはハッと気づく。目の前に居るのはハルジオンだ。詩音ではない。

「あ、いや、これは」

『あちゃー』『続けて、どうぞ』『密室でいちやこらしてたの?』『俺らにも見せてください』

い!!』

カレンがハルジオンを引きずり出す。

そして自身が守るように抱きしめた。

「ハルちゃんに近づかないで、淫乱うさぎ!!」

「いんら——ッ!?!」

怒鳴り返そうと思ったが、キスしようとしたのは事実なので強く言えない。

「ハルちゃん! 今度は私と入ろう!!」

「いや、開いたんにゃから先に進もうにや……」

カレンを説得して先に進むまで、少し時間がかかった。

第2話

歩いていると、ハルジオンの服装に変化があった。

「あ、戻った！」

服装が普段の魔法少女風の装備に戻った。

戻ってもコスプレみたいではあるが。

「あー、戻っちゃった。もっと可愛がっておけば良かった」

「……次に踏んだらどうなるのかしらね」

『SAYAさんまた踏ませようとしてない？』『せっかく戻ったのにwww』

「さ、さあ！ 早く先に進もう！」

不穏なことを言っているカレンとSAYAを振り切つて、先に進もうとハルジオンは叫んだ。

カレンとSAYAも無理強いをするつもりはないらしく、一行は先に進んでいく。

「……なにかしら、この部屋は」

たどり着いたのは、そこそこ広い部屋だ。

部屋の真ん中には、二つの枕が置かれた布団ふとんがある。

その奥にふすまがあるのだが……。

「予想通り、開かないね」

「ころねさん」

「はいはい、分かりましたよ」

ころねは不貞腐れながら、布団に座る。

特に何も起らない。

「枕が二つだし、二人必要なのかな」

「問題は誰が行くかだけど」

その会話を聞いて、ハルジオンが前に出る。

「呪いも解けたし、ボクが行くよ」

「ハルちゃん待っ——！」

カレンが止めるよりも先に、ハルジオンは布団に触れてしまった。

「えっ!?!」

その瞬間、布団の周りに結界のようなものが張られる。

そしてカレンたちの声が聞こえなくなってしまった。

いったい何が起こるのか。

ハルジオンが身構えていると、

「ん？ なにかしらこれ」

ころねが枕の下から木版を発見した。

〈愛してるゲーム〉

お互いに愛してると言って、ドキドキしたほうの負け。

負けた方は姿が変わる呪い。そして相手のことがもつと好きになる呪いがかかる。

どちらかが三回負けたら終了。先に進める。

なんだこれは……。

ハルジオンは困惑する。

思春期の学生が考えたバカな恋愛ゲームだろうか。

他人事だと思いたいが、この場に居るのはハルジオンところね。

二人でこのゲームをやらなければならぬのだろう。

「これ、勝った方はペナルティ無いのよね……ごめんなさいね。ハルジオンさん」

ころねは自信ありげに笑った。

恋愛経験はころねの方が圧倒的にあるはずだ。

自分の勝ち目は薄いだろうと、ハルジオンはうなだれる。

とりあえず、ハルジオンはころねの隣に座った。

「あいしてるっ？」

「……なんで疑問形なのよ」

特に効果はないようだ。

「ハルジオンさん、それじゃダメよ。こうするの」

ころねはハルジオンのあごを持ち上げて、強引に目を合わせた。

「愛してる」

キメ顔でそう言った。

「分かった。やってみる」

「あ、あれ？」

残念ながら、ハルジオンには効果がなかったようだ。

ところで、ころねは自分がして欲しいシチュエーションを考えてやってみた。

それは当然、自分の弱点にもなる。

しかも、ハルジオンは余計なことを思い出していた。

(そういえば、前に『飯野』が床ドンがどうのって、言ってた気がする)

床ドン。

下の階の住人に苦情の意を表明するために、床を叩くやつではない。

相手を押し倒すような形で追い詰める、壁ドンの派生技みたいなやつだ。

ハルジオンはころねを押し倒す。

突然のことに呆けた顔をしていたころねのアゴを持ち上げる。驚きに見開いた眼をジッと見つめた。

「愛してる」

ころねの顔が赤くなっていく。

どうやら効果はばつぐんのようだ。

「あば、あばばばばば」

しかも脳がバクリ散らかしているらしい。

ころねに追撃をするように、五芒星が浮かび上がった。

ころねの頭に犬耳が生える。

負けたときのペナルティだろう。

「ち、ちがう。別にドキドキなんかしてないのに！」

負け惜しみを言っている。

だがダンジョンはそんなもの聞いてくれない。

ころねはハルジオンを押しつける。

そして半ばやけくそ気味に叫んだ。

「あ、愛してるー！」

次は自分の番か。

ハルジオンはころねに近づこうとしたのだが。

「ちよ、ちよつと待って、休憩しましょう」

「なんで？」

「今はちよつと、まずいから、ドキドキしてるから」

「でも、そういうゲームでしょ？」

「そ、そうだけども……！」

ハルジオンはころねの腕を引く。

体勢をくずしたころねは、ハルジオンの肩に頭を預けるような形になる。

ちようど、ころねの耳にハルジオンがささやくような状態だ。

「愛してる」

「——ッ!!」

ころねが声にならない叫びをあげる。

その体が一瞬だけこわばったか、すぐに弛緩しかんする。

ころねの首に首輪が現れた。

しかも、それだけではないらしい。

「な、なにこれえ。ハルジオンさんの匂いが強く感じる。匂い嗅ぐだけでドキドキするう」

ころねはすんすんと鼻をならしながら、ハルジオンの胸元に顔をうずめる。勢いに押されてハルジオンは押し倒される。

「ハルジオンさん好き。好きい。大好き」

ころねは甘えるように、ハルジオンに体をこすらせる。

好きも愛してるに入るのだろうか。

ハルジオンはゲームを終わらせるため、口を開こうとしたのだが。

「だ、ダメ！ 言っちゃダメ！」

ころねはギョツと抱きしめながら、叫んだ。

「わたし、もうずっとドキドキしてるから！ これ以上はおかしくなっちゃうから！」

ころねは嫌だと、子供のようにわがままを言う。

ハルジオンはあやすように頭をなでた。

「頭なでるのもだめえ。もっと好きになっちゃうからあ」

「でも、終わらせないと先に進めないし……」

「うう……」

ころねのうるんだ瞳と目が合った。

何かをねだるように、ハルジオンを見つめている。

「愛してる」

ころねはギュツと目をつぶって、ハルジオンを抱きしめた。数秒ほどそれが続くと、ころねはぐったりと力をゆるめた。ころねの姿が変わる。

ビキニタイプの水着のようだが、みようにふわふわとしている。なんとなく危デンジャラスピースト険な獣を思わせるデザインだ。

「……ハルちゃん」

ころねが首元に手をまわしてくる。

そしてそのまま、ハルジオンに顔を近づけて――

「ちよつと待ちなさい！」

SAYAがそれをつまみ上げる。

ころねは捕まった猫みたいに暴れる。

「離して！ 私はハルちゃんとチューするの!!」

「そんなこと許すわけないでしょ」

「この盛りの付いたメス犬め！」

「いや、カレンさんは人のこと言えないわよ」

「え？」

どうやら、張られていた結界が解けたらしい。

『常識人だと思っていたころねさんがこうなるとは……』『ダンジョンって怖いんだな』
『でもカレンは常時こんなもんだよねwww』

ころねの『好きになる呪い』が落ち着くまで数分ほどかかった。

○

「あ、あんなの生き恥だわ」

ころねは先ほどまでのことを思い出しているようだ。

真つ赤になったり青くなったり忙しそうにしている。

「ねえ、これもしかして強制トラップって役得なんじゃないの」

「……ころねさんに踏ませるのは止めましょう」

SAYAとカレンがそんな会話をしていると、廊下の先に何かが見える。

腰くらいの高さの台だろうか。その脇にはふすまが見える。

「あれも強制トラップかな？」

ハルジオンがそう言うと、ダツ！ とカレンとSAYAが走り出した。

「SAYAさんは、さつきハルちゃんといチャイチャしてたんだからいいでしょ！」

「キミがハルジオンさんとトラップにかかったら、なにしでかすか分からないでしょ!？」

『トラップを奪い合うなWWW』『二人とも早え!!』
同着だった。

二人は同時にその台に触れる。

ガチャン!!

カレンとS.A.Y.Aの二人に手錠がかけられる。

二人の手錠は鎖でつながれていた。

「あつ……」

二人の声が重なった。

そりやあ二人で触ったら、二人が対象になるのだろう。

二人の手錠にはこう書かれていた。

『いちやらぶキスをしたら外れる』

☆おまけ：逆バニー化攻撃

ふざけたトラップの多いダンジョンだが、普通の敵も出てくる。

その敵に交じって、見慣れない敵が現れていた。

おんみょうじ
陰陽師風の服を着たからくり人形だ。

「二人とも気を付けて！」

しかし戦闘中だ。

常にその敵に意識を向けていられるわけじゃない。

SAYAが他の敵に気を取られたとき、陰陽師人形から五芒星が飛ぶ。

それと同時にカレンが人形を倒すが、出た攻撃は止まらない。

SAYAは大剣でガードしようとしたが、意味がなかったらしい。

SAYAのバニー服に変化が起こった。

お腹のあたりに穴が開き、代わりのように袖が伸びていった。

「な、なによこれ……」

胸元などの局部こそ大丈夫だったが、全体的に肌色が目立つ形状に変化した。

『服装の形を変える攻撃？』『なんだそれ……』『おへそ!!』

流れが速くなるコメントの中に、気になるものがあった。

『これ、最終的に逆バニーみたいにならない？』

「ころねはそのコメント見ると、ドン引きしていた。

「ぎゃ、逆バニー……」

「なにかしら、逆バニーって」

「いや、私の口からはちよつと」

SAYAは納得がいかないようで、スマホを手に取った。
その言葉を検索しようだ。

「な、なによこの格好!?! こんなのコスプレとか言うレベルじゃないじゃない! ただの痴女よ!?!」

顔を真っ赤にして叫んだ。

見せてきたスマホには、ほとんど裸の、なんとなくバニーっぽい女性のイラストが映っている。

「いいじゃん。似合ってるよ。視聴者も喜んでるし」

「カレンさんは他人事みたいに言ってるけど、キミだって変な格好にさせられるかもしれないのよ」

「うっ、それは確かに」

最終的に、陰陽師人形は最優先で倒すことになった。

第23話

陰陽師人形が魔法を撃つ。

カレンとSAYAはそれを避けようと、逆方向に跳んだが、

ガキイン!!

繋いだ鎖が二人を離さない。

逆方向に跳ぼうとした二人は、結局その場に留まることになった。

「ちよつと待っ——!」

カレンに魔法が当たる。

ダメージは無い。

その代わりに二人の服の面積が少なくなった。

鎖で繋がれていると、二人に魔法の効果がある。

ドカン!!

ハルジオンの爆発魔法が当たると、人形は跡形もなく消えた。

「ちよつと、なんで避けないのかしら!? このままじゃ、逆バニーとかいう変な格好にされるんだけど!」

SAYAが叫んだ。

逆バニーにされると言ったが、正直もうほとんどなってる。

胸から下腹部にかけてバニー服は大きく開いていた。

胸と股間だけはなんとか隠れている。

だが水着みたくない状態だ。

その一方で、なぜか腕と足はしっかりと隠れている。

「SAYAさんが変な方向に避けようとするからでしょ!？」

カレンも散々な状態だ。

メイド服は縮み、ビキニタイプの水着にフリルが付いているような有様。

『こんな服、アニメでしか見たことねえや』『ソシヤゲの集金用ガチャ』『なんかコメ減つて無い?』『みんな忙しいんやろ』

ころねは二人の様子を憐れむ。

「うわあ……ひどい格好ね」

お前も危デレシヤラスピースト険な獣やろがい。

「いや、ころねもあんまり人のこと言えないような……」

結果としてハルジオンが一番ましな格好になっていた。

いつもの魔法少女服。

ただし中身は男だ。むしろ一番ヤバいかもしれない。
鎖のトラップにかかった後。

鎖に書いてあつた『いちやらぶキスをしたら外れる』の文言を見た二人の意見は完全に一致した。

『絶対に嫌』

結果はこの通り。

二人の息は一切合わない。

その服のひどさが、二人の被弾率を物語っている。

『もうおとなしくキスしたらいいのでは？』『女の子同士だから大丈夫！』『早くキスしてくれ、寒い』『パンツ履け変態』

ころねがあきれたように二人を見た。

「あの一、コメントでも言われてるし、おとなしくキスしてくれませんか？」

「絶対に嫌よ」

「メイド水着さらしたほうがマシだね」

「うわ、めんどくさ」

ころねは深くため息をはく。

ハルジオンは二人の様子を見て、首をかたむけた。

そもそも、なんでそんなに嫌なのだろう。

「二人は何がそんなに嫌なの？」

ハルジオンが質問する。

二人はにらみ合つたまま、吐き捨てるように言つた。

「人の気持ちを考えずに、自分の気持ちを押し付ける厄介女の臭いがするからよ」
「昔の恋愛を引きずつて、いつまでも粘着してそんな根暗女の気配を感じるから」
つまりは、それぞれが相手のことを生理的に受け付けられないのだろう。

実際のところは、それだけではなさそうだが。

二人がギヤイギヤイと騒いでいたときだった。

二人は突然に口を閉じる。

そしてハルジオンを含めた三人は、廊下の奥を見つめた。

「え、なに？ どうしたの？」

よく分かつていないころねだけが、三人を見比べて焦る。

「何かが来る」

ハルジオンたちは廊下の奥に気配を感じていた。

とがった刃のような、するどい威圧感。

それを隠そうともせず、焦りもせず、ゆつたりとハルジオンたちに近づいている。

「あれは……侍人形に似てるわね」

侍に似たからくり人形。

このダンジョンに入ってから何度も戦ったモンスターだ。

それによく似ている。

だが圧倒的に風格が違う。

明らかに彼らよりも上の存在なのだろうと感じさせる。

ころねが少し怯えている。

「ユニーク、かしら」

「そうかもしれない。慎重に行かないと」

どのように戦うべきか。

ハルジオンが頭を悩ませていると、

「まず、後ろからも来たわよ！」

ころねが焦った。

後ろを振り向くと、5体ほどの人形たちが走って来ていた。

「でも様子が変じゃない？」

しかし、人形たちはハルジオンたちを見ていない。

それよりもずっと先を見ているように感じる。

「通り過ぎたね」

人形たちはハルジオンたちに見向きもしなかった。

彼らはさらに先、威圧感を振りまく人形へと走っていく。

それだけでは無かった。

「え、なんでアイツら仲間割れしてるの?」

壁の中から、廊下のさらに奥から、続々とモンスターが現れるとユニークへと殺到した。

『え、モンスターって仲間割れするの?』『噂ていどには聞いたことあるけど……』『実は

これ、めちやくちや貴重な映像なんじゃね』『あのユニーク?めつちや強いやん……』

ユニークはそれら全ての攻撃をいなし、一太刀で人形たちを切り伏せていく。

一分もかからなかった。

人形たちは全滅し、ユニークの周りには魔石が転がっていた。

死体が残っていれば屍山血河しぜんけつががぎずかれていただろう。

ユニークがこちらを向いた。

無機質な瞳から、機械仕掛けのような冷たい殺気を感じる。

チエーンソーやプレス機を見た時に感じるような恐怖だ。

ただ当たり前前の駆動によって、人に致命的な損傷を与えかねない物への恐怖。

『アレ』は、こちらが泣いて謝っても、その動きを止めることはしないだろう。

当たり前のことを、当たり前に遂行^{すいこう}する。

「気をつけなさい」

「言われなくても」

カレンとS A Y Aが身構えた。

ユニークをにらみつける。

その姿が、ブレた。

カレンやS A Y Aの目では追えなかった。

気がつけばユニークはS A Y Aの目の前に居た。

腰に付けた刀を振るう。

狙いはS A Y Aの首。

一閃でそれを切り落とそうと――

ガキーン!!

刀が弾かれた。

S A Y Aとユニークの間に割って入るようにハルジオンが居た。

そのステッキと刀がぶつかった。

ハルジオンは斬撃を受け流そうとした。

しかし、上手くいかなかった。

逃がしきれなかった衝撃がハルジオンを襲い、吹き飛ばされる。
ダン！

ハルジオンは勢いよく壁にぶつかる。

「ハルちゃん！」

カレンが叫ぶ。

ハルジオンはユニークによる追撃を心配した。

だが、それは無かった。

ユニークはハルジオンを見つめていた。

感情のないはずの瞳に、興味と喜びが浮かんだ気がする。

だが、それは一瞬でかき消えた。

カレンが剣を振るう、ユニークがそれを受け止める。

だがその隙にSAYAが大剣を振りぬいた。

ガン！！

ユニークを叩き切ろうとしたが、上手いかなかった。

人形は宙に吹き飛ぶが、くると回転して体勢を直すとキレイに着地した。

「アイツ、攻撃の瞬間に後ろに跳んだわ」

「ちよつとヤバいかもね」

ハルジオンがステッキを構える。

ユニークに対して爆発魔法を放つ。

しかし、これでは倒せないだろう。

さらにユニークとの間にバリアを張る。

「いったん逃げよう！」

三人は同意して走り出した。

来た道を引き返す。

ユニークは走って追いかけてくる気はないらしい。

しばらく走ると、十分に距離を引き離れた。

『なんだよアイツ……』『ただの面白ダンジョンだと思つたのに』『これ、ヤバくね?』

『救助隊に通報しといた方がいい?』『今からで間に合うか?』

「ど、どうするの……このままじゃダンジョンから出れないんじゃない?」

ころねの声は震えていた。

あのユニークに怯えているのだろう。

このまま戻つてもたどり着くのは、転移させられた部屋。

つまりは行き止まりだ。

ダンジョンから脱出するには、先ほどのユニークとの戦いは避けられない。

「アイツが追い付く前に、なにか作戦を考えないといけないわね」
ユニークはゆつくりとだが追ってきていた。

あまりのんびりとはできない。

それに、戦うにしても解決しないといけない問題もある。

「とりあえず、ボクところねで足止めをするよ。その間に二人は……手錠を外してくれないかな」

カレンとSAYAはにらみ合った。

だがハルジオンの案を否定もしなかった。

この状況で嫌だとは言えないのだろう。

「ちよ、ちよつと待って、私とハルジオンさんで足止めするの?」

むしろ、否を唱えたのはころねだった。

「無理よ。無理無理。そんなことできないわよ」

「ころねが戦う必要はないよ。ボクのサポートをしてくれればいい」

ハルジオンはころねを見た。

不安そうな瞳と目が合う。

「ボクがころねを守るから」

「ぐはあ! さ、さっきの後遺症が……」

『落ちたな』『チヨロイン』『ハルちゃん、なんて悪い女なの……』

ころねはうめくように言った。

「分かった。サポートするわよ」

第24話

ハルジオンは眼を閉じていた。

呼吸に集中する。自身体に流れる血潮を感じる。

その血がステツキに流れているのを想像する。

武器は自分の体だ。

手足よりも上手く扱える。

そう信じるのだ。

ガシヤンと足音が鳴った。

ユニークモンスターが来た。

『ハルちゃん頑張れ!!』『負けるな!』『クソ侍に引導を渡してやれ!』

ユニークが刀を構えた。

ハルジオンもステツキを構える。

両者の構えはとてよく似ていた。

ユニークの姿がぶれた。

その動きはとて速い。

だが速いだけじゃない。

動きに予兆がないのだ。

戦士たちは敵の動きを予測する。

目、筋肉、息遣い。あらゆる情報を収集して、敵の動きを先読みする。

それは達人であるほど、無意識気に行っていることだ。

だがユニークには、その予兆が一切ない。

からくりの人形だから。

それもある。

だが何よりも技がある。

予兆を感じさせない技術が。

だからこそ、カレンにもSAYAにも見えなかった。

だがハルジオンには見える。

幼いころから、この程度の小細工はさんざん味わってきた。

ガギン!!

刀とステッキがぶつかる。

刀があらぬ方向へと振られる。

『見えねえ……』『早ええよ!』『これ、たぶん早いだけじゃないぞ』『どゆこと?』

しかし、ユニークは止まらない。

振り下ろし、横なぎ、突き、ハルジオンは攻撃をなんとか受け流していく。

正面から受けてはいけない。

魔法少女スキルは、ある程度は身体能力を上げてくれる。

しかし、それはおまけのようなものだ。

本職の前衛たちに比べれば弱い。

ユニークの攻撃は、その前衛たちをなぎ倒すような一撃だ。

たった一度でもまともに食らえば、敗北に直結する。

しかし、このユニークは甘くなかった。

(受け辛くなってきた……！)

ユニークの攻撃に緩急が生まれている。

少しずつハルジオンの受け流しが甘くなる。

ハルジオンの頬に傷が走った。

そこから赤い血がにじみ出る。

かする程度だがユニークの攻撃が当たるようになってきた。

ハルジオンの体にくっつもの赤い線が走っていく。

だが、

「ヒールー！」

ころねの回復魔法がハルジオンにかかる。

あつという間にハルジオンの傷がふさがっていく。

小さな傷は心配しなくていい。

『ころねさんナイス！』『こつちには回復職が居るんだ。持久戦じゃ負けへんで！』

それに、ハルジオンは魔法少女だ。

剣技だけが能じゃない。

ハルジオンがステッキを振ると同時に、魔法が放たれる。

それはユニークの顔の前で爆発を起こした

『近接に魔法をおりませてる!?』『ガンカタ味を感じる』『さすハルー！』

ユニークがひるんだ。

その際にユニークの胸元にステッキを向ける。

ズドン!!

圧縮された空気が放たれた。

ユニークが吹っ飛んだが……。

(SAYAさんが攻撃した時と同じ。衝撃と同時に後ろに跳んだのか)

ユニークに大したダメージはない。

おそらく、そもそもの装甲も硬いのだろう。

それにユニークの戦闘技術が相まって、そう簡単には倒せそうにない。

しかも、このユニークは悪知恵が働いた。

「びゃ!？」

「危ない!」

ユニークがころねに向かつて攻撃を仕掛けた。

すんでのところでハルジオンが防いだが、勢いを殺しきれない。

ハルジオンはステツキを起点に吹っ飛ばされそうになる。

しかしそのエネルギーを曲げて、ぐるりと回転してユニークに叩きつける。

だがユニークはその攻撃を受け流す。

そして体勢の崩れたハルジオンの首元に斬撃を放つ。

ハルジオンは首を曲げてなんとか避けるが、前髪の毛先がはらりと落ちた。

『女の子を狙うなよ!』『ハルちゃんも女の子ですよ』『ヤバい。ころねを狙われると戦い辛くなるぞ』

このままじゃ負ける。

ハルジオンはそう直観する。

その時だった――

○

「さっさと終わらせるわよ」

「言われなくても」

SAYAはカレンをにらみつける。

これからカレンとキスをする。

本当はしたくないが、ハルジオンを助けるためだ。

そう思ってたなんとか自分を奮い立たせる。

二人は顔を近づけた。

SAYAのほうが背が高い。

上から見下ろすような形になる。

そつと顔を下ろして、口づけをした。

口先をつけるだけの軽いものだ。

唇を通じてカレンの体温を感じる。

SAYAは手錠に意識を向ける。

外れない。

外れる条件は時間か、あるいはキスの仕方なのか。

いちやラブキスとしか書かれていなかったので分からない。

SAYAは悩む。

カレンが首に手を回してきた。

そしてグイッとSAYAの顔を引き寄せる。

キスが深くなった。

カレンの吐く息が口を通じて、肺へと流れる。

SAYAは文句を言いたかったが、その口はカレンにふさがれている。

かわりにキツとカレンをにらんだ。

しかしカレンはいたずらが成功した子供ののように目で笑った。

なんだか小バカにされている気がした。

お前はまともにキスをしたこともないだろうと。

バカにするな、キスぐらい『詩音』としたことがある。

SAYAはいら立ちをぶつけるように、カレンの口に舌を突っ込んだ。

そしてカレンの口の形を確かめるように舌を動かす。

カレンの目が見開かれた。

しかし、すぐに睨みつけてくる。

そしてSAYAの舌を追い出すように、舌を絡みつかせてくる。そう簡単には追いつけない。

SAYAはカレンの舌の裏をくすぐるようになぞる。

「んっ……」

カレンがくすぐったそうに、甘い声を上げた。

だがすぐ後に、不機嫌な唸り声のようにのどを鳴らした。

カレンはやり返すように、SAYAの口に舌を入れてきた。

お互いの口の中を撫なでまわす。

ずつとキスをしていると、酸欠のせいか頭がぼんやりしてきた。

相手のことが分からなくなってくる。

柔らかいものが、口の中を優しく動き回るのが気持ち良くなってくる。

カレンの目が溶けてくる。

SAYAも同じ状態なのだろう。

夏場のチョコレートのような、甘くとろけた瞳。

二人は見つめあいながら、キスをむさぼる。

ギュツとお互いを抱きしめる。

溶けあうように、お互いの境界線が分からなくなってくる。

もう、『ずっとこうしていたい』と思った時だった。
ガシャン!!

手錠が落ちた音が響いた。

二人は正気に戻る。

バツと体を離した。

「い、今のは違うわよ!? 手錠を外すために仕方なく!」

「私だってそうだけど!? 嫌で嫌で仕方がなかったけど、しなきゃいけないことだから!」

二人して似たような言い訳をしていると、馬鹿らしくなってきた。

それに、彼女たちには時間がない。

「早く戻ろう」

カレンのその言葉と同時に、二人は走り出した。

○

ユニークの刀がハルジオンの体を切り裂こうと迫る。

ガギン!!

「遅くなってごめん！」

カレンの剣がそれを受け止めた。

「待たせたわね」

SAYAの大剣が振り下ろされる。

狙いはもちろんユニークだ。

ユニークは後ろに勢いよく跳んで、その攻撃を避けた。

「二人とも！ 手錠は外れたんだね」

「ええ、ちよつと口をついたら簡単に外れたわ」

「愛のこもったラブラブちゅっちは、ハルちゃんのために取っておいてるから安心してね！」

「ああ、うん。ありがとう？」

強がっている二人。

それをころねが怪しんだ目で見ていた。

「いや、かかった時間的に、そこそこ濃厚なのをしてきたんじや……」

『なんか、二人の距離が近い気がする』『あれ、キスシーンはカットなの？』『円盤なら収録されてるよ』『買います!!』

それはともかく。

四人は武器を構えた。

ユニークはそれを警戒するように見つめてくる。

「反撃を始めよう」

第25話

最初に動いたのはカレンだ。

風のようにユニークに迫り、剣を振るう。

「おわっ!？」

剣がユニークの刀に触れると、ぬるりと滑った。

まるでハルジオンの受け流しのように。

『ハルちゃんと同じ技!』『真似したのか!』『ハルちゃんの受け流しに対応してたことからも分かるけど、こいつ学習してるぞ!!』『ここで倒せないと、どんどん強くなるんじゃない……』

勢いよく放った斬撃をそらされた。

カレンはぐらりと体勢を崩される。

そこにユニークの斬撃が迫る。

ガン!

斬撃を大剣が防ぐ。

SAYAがカレンを守った。

「しっかりしなさい」

「言われなくても!」

すぐさま体勢を直すと、カレンはもう一度剣を振るった。

ユニークは再び受け流そうとするが。

「来ると分かかってれば!」

カレンは流れに逆らうように力を入れなおす。

ガッ! とつばぜり合いに持ち込む。

「その場しのぎの付け焼刃。ハルジオンさんの猿真似にもなつてないわよ」

SAYAが大剣を振り下ろす。

狙いはユニークの頭。

そのまま真つ二つに割ろうとする。

「二刀!」

その攻撃は防がれた。

ユニークはどこからか脇差を取り出して、大剣を受け止めた。

『惜しい!』『でも二人とも息が合ってる!!』『勇者と魔王の共闘、これはキテる』

攻撃は止められた。

しかし、カレンとSAYA、二人の連携が良くなっている。

それに、攻撃はまだ終わりじゃない。

ガン！ ガン！ ガン！

ユニークを氷の弾丸が打ち付ける。

ハルジオンの魔法だ。

カレンとSAYA。二人の隙間を縫うように飛んだ弾丸が、ユニークを打ち抜いた。

狙いは関節。

ダメージを与えられなくても、体勢を崩せば二人が押し切れる。

ぐらりと、ユニークが揺らいだ。

「今よー！」

大剣が振るわれる。

不安定な今、ユニークは片手では受けきれない。

両腕の刀を使って攻撃を防ぐ。

「すぎあり!!」

ザン!!

カレンの斬撃が決まった。

ユニークの左腕を切り落とす。

「終わりよ!!」

受けきれなくなった大剣が迫る。

ガン!!

ユニークは何とか身をよじって避けたが、右腕も断ち切られた。

『やった!!』『これは勝ちやろ!』『よし、勝つたな風呂食つてくる』『僕の勝ち! なん
で負けたか明日までに考えておいてください。ほな』『勝つたな』『ああ』

ユニークは後ろに跳んで距離をとった。

しかし、両腕を失っては戦えないだろう。

「どんなもんだ!」

「最後はあつけないわね」

「ヤッター!! ユニークの大金ゲット! 何に使おうかな、アイツと海外旅行でも……」

「キミは大したことしてないじゃない」

「いやいや、私だつて危なかつたんですけど!? え、分け前くれるよね? ねえ!」

カレンたちは勝ちを確信していた。

もはや浮かれムードだ。

——ハルジオンを除いて。

ハルジオンはユニークを警戒する。

アイツは諦めていない。

どうすれば勝てるか。それを冷徹に考えている。

ガシャン!!

何かが組み変わる音が鳴った。

ハッと4人の目がユニークに集まる。

その背中から、腕が生えていた。

6本。千手観音のように伸びている。

それぞれの手に、刀を持っている。

ユニークは懐から小さな袋を取り出した。

それを自身の口元まで持つてくると、ガラガラと中身を飲み込む。

それは魔石だ。他のモンスターを倒した時に集めていたのだろう。

空気が変わった。

喉先に刃を突き付けられている。

そう錯覚するほどに張り詰めた。

『……いやズルだろ』『後だし止めてください』『やばばーばばーばや』

ユニークが消えた。

そう感じた。

特殊な移動法などではない。

ただ早かった。

「ツ!!」

狙いはSAYAだった。

なんとか大剣を構えてガードするが。

ガン！ ガガガガガン!!!

6本の腕を使った波状攻撃。

SAYAは耐えきれずに吹っ飛ばされる。

ドガン!!

爆発が起こったのかと思った。

それほどの衝撃音と共に壁に打ち付けられた。

「SAYA——うぐ!!?」

蹴った。

先ほどまでは、刀による攻撃に執着していたユニークが、カレンを勢いよく蹴りつけた。

カレンもSAYAと同じように壁に勢いよくぶつかる。

SAYAとカレンはうずくまって、うめいている。

すぐに復帰するのは難しいだろう。

ころねがSAYAに駆け寄ろうとした。

だが、そこにクナイのように脇差を投げられた。動けば殺す。

ユニークがそう言いたいのが伝わってくる。

たった二撃。

それで、パーティーが壊滅状態におちいった。

ユニークがハルジオンを見た。

二人が復帰できるまで、ハルジオンが耐えきらなければならぬ。

『ハルちゃん耐えて!!』『救助は!』『通報はしてあるけど、間に合わんだろ!』『とりあえず、同じダンジョン行ってるやつに連絡したけど……』『スマホで見ながら動いてるけど、トラップで進めねえよ!』

ユニークが、6本の刀を振るった。

受け流す、避ける、魔法で逸らす。

なんとか耐える。だが長くは続かない。

すぐに破綻する。

このままでは負ける。

刀を相手にしていると、昔のことが頭に浮かんできた。

はつきり言って、ハルジオンは近接戦は好きじゃない。

刀を振るっていた時を思い出すから。

あの頃は刀なんて、どうでも良かった。

勝つても嬉しくない。負けても悔しくない。

ただ言われたから振るった。

言われたから勝った。

ただの、命令に従っているだけの人形だった。

だけど、今は負けたくない。

ここで負ければ皆を傷つける。

カレン、SAYA、ころね。

大切な友達だ。

今回のダンジョン探索で、もっと仲良くなれたと思っている。

負けたくない。

もっと皆と仲良くなりたい。

一緒にいたい。

——勝ちたい。

ピタリと、ユニークの攻撃が止まった。

警戒している。

ハルジオンの雰囲気が変わった。

ステッキの先から、魔力の刃が伸びていた。

「刀これがボクの魔法だ」

ハルジオンが刀を振るう。

ユニークはそれに対するように6本の刀を振るった。

1本と6本。数は違うが互角に打ち合っている。

だが互角だ。

ハルジオンは攻め切れていない。

純粹な体力勝負になってしまえばハルジオンは負ける。

そのことをユニークも分かっている。

ハルジオンへの攻撃よりも、体力を奪うように立ちまわっている。

ハルジオンは何も無い空間に横なぎの一閃を振るった。

そしてだらりと、脱力する。

諦めたのか。

誰もがそう思った。

「シオンの花言葉を教えてあげる」

ハルジオンの言葉を無視して、ユニークが刀を振るった。
ハルジオンの首元に刃が迫る。

ザン!!

切られた。

ユニークの腕が。

何もない空間から斬撃が生まれた。

「追憶だ」

ガガガガガガガ!!

空間に斬撃が走る。

ユニークの装甲に傷が生まれる。

腕が切られていく。

それは全て、ハルジオンが切った場所だ。

まるで切られたことを思い出すように、空間に斬撃がひらめく。

ここに居てはまずい。

ユニークはそう思ったように後ろに下がろうとしたが。

「逃がさない」

ユニークの後ろに回ったハルジオンが、ユニークの足を切り裂く。

ガクリと膝を落とした。

そしてその首が収まった。

何も無かった空間に。

ハルジオンが一閃を振るったその場所に。

ことりと落ちた。

音もなく切られたユニークの首が。

ステッキの刀が消える。

それと同じように、ユニークも消え去った。

後には、魔宝石だけが残されていた。

○

「やっと出れたー!!」

カレンが大きく背伸びをする。

目の前に広がっているのは、いつもの街。

ダンジョンからは無事に脱出。

配信も終えている。

ちなみに服装も戻っている。

「さんざんな配信だったわ……」

「ほんと、生き恥晒したわね」

SAYAところねが肩を落とした。

今さらながら、配信で醜態をさらしたことを気にしているようだ。

配信主であったカレンはそこまで気にしていないようだ。

むしろ嬉しそう。

「うわー、同接数ヤバイ！ しかも、もう切り抜き上がってる。うわー！ ランキング1位

！ ドラゴンの奴からダブルスコアだよ!!?」

それを聞いたSAYAは、さらに落ち込んだ。

「止めて、これ以上あんなのを広めないで」

「明日からどんな顔して大学行けばいいのよ……」

二人を励まそうとハルジオンは思った。

だが、ふと気づいてしまった。

「……トラップダンジョンに落ちた時点で配信切れば良かったんじゃない?」

「あ……」

そのことに、誰も気づいていなかった。

第26話

「よし、さっそく渡しに行こう」

詩音はポケットの中の箱を確認する。

向かう先は飯野の元だ。

「うん？ な、なによ」

なんとなく、最近は飯野との距離が遠い気がする。

特に喧嘩などは無かったはずだが。

詩音は不思議に思う。

飯野がなにか、ぶつぶつと言っていた。

「この間のダンジョンのせいかな。なんか詩音の匂いを嗅ぐとドキドキしちゃうのよね」

何を言ってるのかはよく聞こえない。

まあいいだろうと、詩音はポケットから箱を取り出す。

「はいこれ、飯野にあげたくて」

「なによそ——指輪!？」

詩音が渡したのは指輪だ。

「え、私と付き合いたいってこと!? いや、それは嬉しいけど、でもやっぱり、ああいやでも」

別に告白とかではない。

「いや、日ごろの感謝の気持ちに、プレゼントしようと思って」

「は？」

紗耶としたドラゴンの討伐。先日のユニーク侍の討伐。ついでにその配信で貰った出演料。

それらのおかげで、詩音は結構な大金を手に入れた。

それを使って、まずは自分の配信に必要な機材。次にハルジオン用のスマホを購入した。

そして残ったお金で、華恋、紗耶、飯野に感謝の気持ちを込めたプレゼントを贈りた
いと考えた。

残った金額を全額使って購入した指輪だ。

もちろん三人分。

いや貯金しろよ。金銭感覚ぶっ壊れてるだろ。

そう思われても仕方のない愚行だが、そのおかげで指輪は高額なものを購入した。

家を建てられるレベルで浪費した。

だが、それだけ感謝の気持ちや伝えられるだろうと、詩音は本気で思っている。

「いや、なんで指輪なのよ」

「なんとなく？」

詩音は対人経験が薄い。

女性がプレゼントを貰って喜んでる場面。

それを思い浮かべると、ドラマの告白シーンぐらいいいか思いつかなかった。

「まあ、貰えるものならありがたく貰っておくわ」

「うん。受け取って欲しい」

飯野は指輪を受け取る。

「しかし安物とはいえ、あなたからプレゼントを貰えるなんてね」

ピタリと、詩音の動きが止まった。

今、なんて言った？

「え、なんて言ったの？」

「は？ あなたからプレゼントを貰えるなんてね」

「その前は？」

「安物とはいえ」

安物。

「安物?! 高かったんだよ!」

「いや、別にケチつけるわけじゃないけど、これはそんなに高くないわよ。あなたからすれば高いかもしれないけど……」

そんなはずはない。

現に詩音の銀行残高はゼロになっている。

あれだけの大金を消費しているのだ。

まさか、

(だ、だまされた……?)

ガクリと詩音は膝を落とした。

詩音が指輪を買ったのはネット通販でだった。

指輪を買おうと決めた詩音。

しかし本格的なお店に行くのは怖いなど考えていた。

そんな時に、ハルジオンあてのメールにアクセサリーのネットショップからメールがきていた。

そのネットショップは有名な所だし安心だ。

これ幸いとばかりに、詩音はそのメールの相手と交渉して指輪を買ったのだ。

それが有名なネットショップを騙る詐欺師だと気づかずに。

「あ、いや、ごめん。嬉しいわよ？ プレゼントは値段じゃなくて気持ちだから、私はすごく嬉しいから！」

飯野がはげましてくる。

「ほんとにそれでいいの」

「すごく嬉しいわ。さっそく付けるわね」

飯野は右手の薬指に指輪を通した。

指輪のサイズは詩音が目測で測った。

ぴったりのようだ。

無駄なスペックだけは高い奴である。

「そっか、飯野が喜んでくれるなら、それでいいや」

「うん。ありがとうね」

飯野はにこりと笑った。

本当に喜んでくれているようだ。

詩音は立ち上がる。

安物なのは残念だが、今さら仕方がないと開き直る。

「じゃあ、紗耶にも渡してこようかな」

「は？」

飯野の笑顔が一瞬でくもった。

「なんで？」

「いや、謝罪の気持ちとして渡そうかなって」

「……止めておいた方が良いわよ？」

飯野は笑いながら言った。

だが目は笑っていない。

なにか不満があるのだろうか。

「謝罪するときには物をあげるの、物で釣ってるように感じられる場合があるわ。紗耶

さんに安物の指輪を贈っても意味がないと思うし」

紗耶はなかなか稼いでる人だ。

そんな人に今さら安物の指輪を贈っても仕方がない。

飯野の言う通りかもしれないと、詩音は納得する。

「そっか。それもそうかも……」

詩音は残念そうにつぶやいた。

○

実は、詩音はすでに紗耶と約束をしていた。

日が傾き始めた時間。

人気のない公園に向かう。

すでに紗耶が待っていた。

紗耶は詩音に気づくと、キツとにらみつけてくる。

「ごめん。待たせたかな」

「話ってなに」

詩音は高校時代から使っているメッセーリアアプリで紗耶に連絡を送った。

あれだけ怒らせたのだから、ブロックされているかも。

不安だったが、無事に連絡がとれた。

「その……ごめんなさい」

詩音は深く頭を下げる。

「いろいろな考えたんだけど、なんで紗耶を怒らせたのか分からない」

「……そう」

落胆したような、ため息が響いた。

「話ってそれだけ？ それなら私はもう行く——」

紗耶が立ち去ろうとする。

「待って！」

「ふにいい!？」

詩音が紗耶の腕を掴むと、紗耶は不思議な声を上げた。顔を真っ赤にして、ぱくぱくと口を動かしている。

「ボクと……ボクとまた仲良くして欲しいんだ」

詩音はそれが伝えたかった。

ダンジョン探索を通じて、紗耶と一緒に居るのが楽しいと感じた。

また仲良くなりたい。

友だちとして一緒に遊びたい。

「また、ボクと一緒に居て欲しい」

「いい、いっしょに!？」

紗耶の目が、ぐるぐると回っている。

頭から煙が噴き出しそうなほど真っ赤になっている。

詩音はポケットから箱を取り出した。

「いらなかつたら、捨ててもいいから。ボクが紗耶にあげたいから渡すんだけど」

「ゆ、ゆゆゆ指輪!？」

「謝罪の気持ちとか、そういうのは関係ないから」

詩音は紗耶に指輪を渡した。

紗耶にはいらぬ物かもしれないが、それでも気持ちだけでも受け取って欲しかった。

ちなみにデザインは飯野に渡したものと変わらない。

ついている宝石の色が違う程度だ。

「受け取って、貰えるかな」

紗耶に箱を差し出すと、それを大事そうに受け取った。

そして、

「へ、へへへ返事はまた今度するからあああああああ!!」

「え、どこ行くの!?!」

紗耶はもの凄いスピードで走っていく。

なにか急ぎの用事でもあったのだろうか。

詩音は首をひねる。

「とりあえず、受け取ってもらえたからいつか」

空を見上げると月が出ていた。

満月。

綺麗な月だ。

自宅のアパート前に着くと、華恋が待っていた。

「こんばんは。詩音先輩」

「華恋ちゃん。はいこれ」

詩音が箱を差し出す。

「指輪、ですか？」

華恋は不思議そうに詩音の顔を見つめる。

「うん。いつものお礼」

「なんだ、お礼ですか。こんなもの渡したら告白かと勘違いされちゃいますよ？」

「あ、ごめん。いらなかったかな」

「いいえ、貰っておきます」

華恋は指輪を取り出すと、左手の薬指につけた。

「え、そこに付けるの？」

さすがの詩音も左手の薬指は結婚指輪をつける場所だと知っている。

そこに付けた華恋にびっくりする。

「ええ、ちようど良かったので」

「ちようどいい?」

アパート前での出会いは偶然じゃない。

華恋から詩音に、会いたいと連絡がきたのだ。

「先輩は、私に感謝してるんですよね?」

「それはもちろん」

「じゃあ、」

華恋は詩音の首に手をまわす。

二人の顔が近づく。

鼻先が触れ合う。

そして、ささやくように言った。

「私と付き合ってください」

おまけ：強制ラブコメトラップ別ルートIf

☆強制いちやらぶキス手錠：詩音×ころね

ハルジオンところねに手錠をかけられてしまった。

どうやらキスをしないと外れないらしい。

さすがにカメラの前でキスはしたくなかった。

二人は少し離れた場所に行こうとしたのだが。

「あっ……」

ハルジオンがトラップを踏んでしまう。

すると、

「な、なんでそうなるの!?!」

ハルジオンの姿が変わった。

詩音のものに。

「あ、あれ?」

どうやら変身が解除されてしまったらしい。

いつもの普段着姿の詩音を見て、ころねは目を見開く。

「あ、あなた本物の詩音じゃ!？」

「ぎ、ごめん」

ころねが胸倉を掴んでくる。

「つまりなに、私はさつきまでの恥ずかしいゲームをあなた相手にやってたの？」

「……そうなるね」

「うがー！！！！」

ころねは頭を抱えて叫ぶ。

ひとしきり叫ぶと、落ち着いたようだ。

「だいたい、なんであなたはこんな状態になってるのよ!？」

「実は——」

詩音は魔法少女スキルなどについて、ひとしきり話した。

「なによ魔法少女スキルって、意味わからないわ……」

「ボクもよくわかんない」

なんだかんだと話した。

そして、とりあえず手錠を外そうという流れになった。

「と、ところで、この格好についての感想とかある？」

ころねが後ろで手を組みながら聞いてきた。

その姿はふわふわの水着みたいな格好だ。

真っ赤な顔をして、もじもじと恥ずかしそうにしている。

どこことなく胸を見せつけるようなポーズだ。

「えっと、カワイイと思うよ」

「そ、そう。それなら良かった」

ころねが首に腕を回してくる。

引き寄せられると、少しかがむような形になる。

ギュッところねの胸を当てられた。

柔らかい感触が伝わってくる。

「あの……」

「なにも言わないで」

ころねの唇が触れる。

とても慣れないキスだった。

付き合いたてのリップルがするような、甘酸っぱい味がしそうなほど。

「こ、これじゃあ、ダメよね」

「そう、みたいだね」

再びキスが始まる。

ためらうように、ころねの舌が口に入ってきた。

ころねは顔を真っ赤にしている。

それは背伸びしてる子供みたいだ。

つい、詩音はころねの頭をなでる。

睨まれてしまった。

子供っぽく感じていたのがバレたのだろうか。

しかし、ずっとなで続けると、その眼は柔らかくなっていく。

ギュツところねを抱きしめた。

ころねが幸せそうに笑う。

ガシヤン！

手錠が外れた。

「終わり……みたいね」

「そうだね」

ころねは恥ずかしそうにうつむいた。

「ね、ねえ。あと一回だけ——」

☆強制いちやらぶキス手錠：ハルジオン×カレン

「それじゃあ、ハルちゃん。いちやラブキスしようね」

他の二人からは離れた場所。

ハルジオンとカレンは手錠でつながれていた。

どうやらこの手錠は、キスをしなければ外れないらしい。

カレンの顔が近づく。

「大好きだよ」

そつと確かめるように、カレンの唇が触れる。

グイッとハルジオンの体がカレンに引き寄せられる。

カレンの舌が口の中に入ってくる。

優しく、口の中の隅々まで味わうように撫でまわされる。

まだ手錠は外れない。

自分も積極的に動かなければならないのだろうか。

ハルジオンは気づく。

キスの仕方は知っている。

昔、『紗耶』に教えてもらった。

『恋人っぽく振舞うために必要なことだから！』と言われて。

カレンの口に舌を入れる。

そして一気にカレンの舌に絡みつけた。

カレンの体がびくりと震えた。

驚いたのだろう。

強引にカレンの舌を撫でまわす。

カレンの舌が逃げようとするが、無理やりに引き寄せる。

カレンの抱きしめる力が強まった。

「んっ……んっ……んっ……」

カレンの瞳がとろける。

うるんだ眼をジッと見つめる。

そこで動きを止める。

今度はゆっくりと、優しくなでるように舌を動かす。

カレンがもつとして欲しいと言うように、舌をくつつけてくる。

その舌の裏を、ゆっくりとなぞる。

じつくりと焦らすように。

カレンがくすぐったそうに体をよじる。

その体をグツと引き寄せる。

強引に、絶対に離さないと言うように。

そしてカレンの口の中を蹂躪する。

あらゆる場所に、自分の舌の感覚を焼き付けるように。

カレンがギョツと目をつむる。

強く、強く、ハルジオンを抱きしめる。

ガシャン！

手錠が外れた。

ハルジオンが口を離す。

カレンはドサリと座り込んだ。

「ハルちゃん、すごい……」

「大丈夫？ 上手くできたかな？」

カレンが顔を上げる。

とろけきった目でハルジオンを見つめる。

「ハルちゃん、もつと先まで——」

☆愛してるゲーム：ハルジオン×SAYA

愛してるゲーム。

お互いに愛してると言いあうゲームらしい。

ハルジオンとSAYAはそれをしなければ、先に進めないようだ。

「あ、愛してる」

SAYAは顔を真っ赤にしながら言った。

ずいぶんと緊張しているようだ。

「大丈夫？」

「え、ええ。もちろん大丈夫よ。さ、さあ、ハルジオンさんも……」

とりあえず言ってみるしかないか……。

ハルジオンはSAYAを心配しながらも、口を開いた。

「愛してる」

「はう！」

SAYAはかわいらしい声を上げる。

ぼとりと、ウサミミが落ちた。

代わりにSAYAの頭には本物のウサミミが生えている。

がばつとS A Y A が抱き着いてくる。

はあはあと荒い吐息が耳元に当たる。

「だめ、だめなのに。違うのに……この子はハルジオンさんなのに……」

S A Y A がぎゆうぎゆうと抱きしめてくる。

「好きな気持ちがあふれてきちゃう。すき、すき、しゅきい……」

これ以上、続けるのはヤバいのでは？

ハルジオンはS A Y A を心配する。

「ねえ、すきって言っつて。はやく、はやくいつて？」

なら、言っつた方がいいのだろうか。

「好きだよ」

「——ッ!!」

S A Y A がびくびくと震えた。

その震えが収まると、S A Y A の首に首輪がつけられていた。

S A Y A が顔を上げる。

その瞳はどこか虚ろで、ハルジオンでない物を見ているようだ。

「あれ、なんで詩音^{キミ}がここに居るの？ ……なんでもいつか♪」

S A Y A はハルジオンを押し倒す。

そして、熱いキスをされた。

SAYAの中の熱を逃がすように、燃え上がった気持ちが伝わってくる。

「ねえ、キミからもキスしてよ」

そういわれても……。

ハルジオンは困る。

キスそれはゲームに必要な工程じゃない。

偽物の恋人ですらない、ハルジオンがそれをするのは良くないだろう。

ハルジオンの困惑が伝わったのだろう。

「なんで、してくれないの？」

ぼろぼろと、SAYAの瞳から涙がこぼれた。

ぼつぼつと雨のように、ハルジオンの頬に水滴が落ちる。

「なんで私のこと捨てるの？ 私はキミのこと好きなのに、迷惑かけられたっていい。人生をめちやくちやにされてもいい。キミに愛してもらえるなら、なんだってできる」

その瞳に暗雲が満ちた。

「邪魔されるなら、『あの家』の人間を皆殺しにできる」

その言葉はゾツとするほど美しかった。

名刀を見た時の感動に似ている。

危うくも美しい。

そつと、S A Y A がハルジオンに顔を近づける。

「愛してる」

耳元でささやかれた。

ポンつとハルジオンの頭に猫耳が生えた。

見つめられる。

S A Y A の暗い瞳に吸い込まれそうになる。

キミにも言つて欲しいと言ふ感情が伝わってくる。

言つてはいけない気がする。

それでも、その気持ちを止めることはできなかつた。

「……愛してる」

S A Y A は穏やかに笑う。

そして優しくハルジオンを抱きしめた。

キャラクターオーディション

☆男の娘は魔法少女に負けたくない

まずは聞いて欲しい。

『稲妻透琉』いなづまとおるは、ただ可愛いものが好きだけだ。

可愛いものが好きだから、女装をしているだけ。

だから、こういった状況は望んだものじゃない。

「お願いします。俺と付き合ってください！」

真面目そうな青年が深く頭を下げる。

告白だ。

告白されているのは透琉。

ピンク色のショートカット。少し学生服っぽいワンピース。その上に亜麻色のカー

ディガンを着ている。

見た目は完全に女の子。

だが男だ。

透琉は、『間違えて買い物しちゃった』くらいのテンションで言った。

「あー、勘違いさせちゃったかな？」

「……え？」

「私はね、可愛いものが好きだけなんだ」

透琉はくるりと回る。

自分自身を見せつけるように。

「だから私は可愛いしたいの。自分自身を可愛くするのが一番楽しいでしょ？」

透琉は上目遣いで、青年を見つめる。

青年は、こういった細かい仕草にやられたのだ。

「だから別に、男の人が好きじゃやらないんだよね。あ、可愛い人なら別だけど」

要約すると『お前はタイプじゃない』。

青年はがつくりと肩を落とした。

透琉は萌え袖にした手で、青年の肩をぼんぼんと叩く。

「でも、可愛い私に恋しちゃう気持ちは分かるよ。私だって自分と付き合いたいもん」

透琉はにひひつと、いたずらっ子のように笑った。

「ま、可愛くなったら出直してきてよ」

○

「むーん……」

透琉は難しい顔をしながらスマホを見つめる。

画面に映っているのは動画だ。

魔法少女系探索者ハルジオンの。

「カワイイ、カワイイけど」

透琉は可愛いものが好きだ。

ハルジオンのことも可愛いと思っている。

当然ながら好意的に思っている。

だがそれと同時に、

「悔しい」

透琉は自分の可愛さに自信を持っていた。

一番付き合いたい人は誰かと言われれば、自分自身だと答えるほどに。

だがハルジオンをもっと可愛いかもしれない。

可愛いものを見る嬉しさ。

負けたくない悔しさ。

その両方の感情が複雑に絡み合っていた。

「そうだ！」

だが、透琉はこの問題への答えを見つけた。

回答はとてもしンプルだった。

「ハルジオンちゃんよりも、私が可愛くなればいいんだ！」

そうなれば、悔しくない。

ハルジオンの可愛さも、わだかまりなく楽しめる。

「どうすればもつと可愛くなれるかな——ん？」

廊下で人とすれ違った。

中性的な顔をした青年だ。

ピシツとした、自信にあふれていそうな姿勢で歩いている。

だが、どこか不安そうな眼をしている。

アンバランスな姿が、危うい魅力を出している。

(確か……『詩音先輩』だ)

そこそこ有名な人だ。

見た目はかっこいい。

それに多様な属性を使いこなす。

だけど威力はダメダメで、まともに戦闘もできないらしい。

(女装してくれたら似合いそうなのにな……)

透琉とタイプは違うが、魅力的になるはずだ。

そこで、ふと思いつく。

(自分と違うタイプの人をコーディネートしたら、なにか新しい道が見えるかも)
通り過ぎて行つた詩音を、透琉はジツと見つめていた。

☆妹弟子は追憶を切り裂きたい

刀が好きだ。

スラリと伸びた刀身は、とても効率的で無駄がない。

あらゆる悪を切り裂くために生まれた武器だ。

少なくとも、『けんぎきりの剣崎桐乃』はそう信じている。

ガッ!!

鈍い音が道場に響く。

二本の木刀がぶつかる。

一度や二度ではない。

なんども打ち合い続ける。

これは練習試合だ。

優勢なのは桐乃。

黒い胴着姿で剣を振るう。

その動きと共に、黒く長いポニーテールがゆらゆらと動く。

その剣筋に迷いはない。

常に相手の急所を狙っている。

これが真剣ならば、殺す気の一撃を叩きこんでいく。

相手をしている青年。

『小峰^{こみねとうや}刀夜』はやや苦しそうに、木刀をさばいている。

桐乃は涼しい顔で木刀を振るっているが、刀夜のひたいには汗が流れている。

二人の実力は明白だった。

刀夜が振るった刀がスルリと受け流される。

大きな隙だ。

それを見逃すほど、桐乃は優しくない。

桐乃の木刀が勢いよく振られた。

ピタッと、それは刀夜の首に触れる直前で止められた。

真剣であれば、首をはねられていた。

「……俺の負けだ」

刀夜は悔しそうにつぶやいた。

「ずいぶんと腕を上げているようですが。まだまだですね」

最近の刀夜はずいぶんと熱心に修業をしている。

なにかあつたかは桐乃は知らない。

それに興味もない。

都合のいい木偶練習相手が出来たくらいの感想だ。

「妹弟子に褒められても嬉しくないな……」

桐乃は1年ほど前に、小峰家に入入りするようになった新参者だ。

それよりも前から、『小峰楼雅こみねろうが』の教えを受けたいと願っていた。

だが英雄である楼雅に憧れる人々は多い。

桐乃は、その多数の人々の一人でしかなかった。

だが桐乃が『特別なスキル』を発現したことによって事態は変わった。

桐乃は楼雅の目に留まり、小峰家に招かれることになった。

現在では楼雅のお気に入りであり、もつとも熱心に修業をつけられている。

「失礼します」

桐乃はそれだけ言うと、道場から出る。

別に刀夜のことは嫌いではない。
好きでもないが。

(だが、あれと結婚するのもかもしれないのか)

桐乃は現在の楼雅の弟子たちの中では、もつとも実力がある。

そして、もつとも実力のある女性が、次の当主の嫁に迎えられるだろうと言われている。

少なくとも刀夜の母は、その実力を買われて嫁入りしたらしい。

順当にいくならば、選ばれるのは桐乃だ。

そして次の当主は刀夜。

二人の婚姻は、半ば決まったもののような空気が流れている。

桐乃も別に嫌ではない。

そもそも男に興味なんてない。

相手が誰だろうとかまわない。

だが英雄である楼雅の娘になれるのは嬉しい。

結婚には不満がない。

だが、

「このまま行くと、刀夜様が後を継ぐのかね」

「そりやそうだろ。他に人も居ないんだから」

道場の裏手から声が聞こえる。

他の弟子たちだろう。

「いや、詩音様が——」

「やめろよ。楼雅様に聞こえたら事だぞ」

『詩音』。

その名前は、小峰家のあちらこちらから聞こえてくる。

「桐乃の奴だっているんだから、問題ないだろ」

「でも剣の腕じゃ、刀夜様と桐乃の二人がかりでも勝てないだろ？」

「そりや……そうだけど」

「剣術を教えるだけならスキルなんていらないんだから、やっぱり詩音様に帰ってきて

欲しいよ」

二人がかりでも勝てない。

その言葉に桐乃は歯噛みする。

桐乃が小峰家にやってきて、剣の実力を発揮するほどに『詩音の影』が目立っていく。

どれだけ頑張っても、『詩音の方が』『詩音なら』、その言葉がちらつく。

桐乃が実力を上げるほどに聞こえてくる。

楼雅でさえも、詩音の影を見ている。

桐乃がどれだけ冴えた技を見せても、どこか残念そうな目で見てくる。

「そうは言っても仕方がないだろ。楼雅様の魔法嫌いは筋金入だ」

「なんでもいいから、詩音様が近接系のスキルを発揮してくれてればなあ」

つまり、どこまで行っても桐乃は代替品だ。

本物の劣化品。

詩音、詩音、詩音、詩音。

どこまで行っても、どれだけ努力しても、その名前がついてくる。

「私の方が、強いはずだ——！」

もう、うんざりだった。

キャラクターオーディション2

☆忍者女子のニートライフ

「いえーい、あいあむあ、ちゃんぴおん」

『添木名月』そえぎなつきは、パソコンの前でつぶやいた。

二年ほど前、高校時代にバイト代で買った高性能パソコンだ。最新のゲームでも問題なく動く。

バトルロワイヤルゲームで勝利を手に入れた。

それに名月は満足して、体を伸ばす。

パソコンで時間を見ると、もう午前5時だ。

夜通しでゲームをやっていたら、この時間になってしまった。

ちなみに、今日は平日。

「……寝るか！」

社会人であれば、確実にアウトな時間帯。

だが名月には関係ない。

名月は高校卒業後、大学には行かなかった。

かといって、就職もしなかった。
なにもしなかった。

つまりは二ートだ。

引きこもりまでは行っていない。

たまにバイトをして、自分のお小遣いくらいは稼いでいる。

なぜ、そうなったか。

明確な理由はない。

ただ何となく、やる気が出なかった。

なにをやっても、上手くいかない気がした。

失敗する未来ばかりを想像してしまう。

そして、やる気がそがれていく。

名月は敷きっぱなしの布団に潜ろうとした。

ガタン。

高いタンスの上から、何かが落ちた。

名月はそれを拾い上げる。

ほこりだらけの写真立てだ。

なかには、名月が幼いころの写真が入っている。

ほこりにまみれて良く見えないが、幼い名月の隣には誰かが立っている。そつと、いつくしむように、指で誇りを拭いた。

そこに写っていたのは黒い髪の少年だった。

興味なさそうに、ぼんやりとこちらを見つめている。

その少年の名前は、

「詩音のやつ、元気にしてるかな……」

詩音は、刀を振るう以外は何もできない少年だった。

いや、何もできないように教育されていたのだろう。

それが彼の祖父の教育方針だった。

一人で学校に向かえば迷子になる。

知らない人に声をかけられても、のこのこと付いて行こうとする。

友だちはいない。

勉強だって最低限しかできない。

そんな詩音を支えるのが、名月の一生をかけた仕事だった。

そのはずだった。

だけど中学生のころに、状況はぐると変わった。

詩音はいろいろな事情があつて、彼の祖父から見捨てられた。

そうだったら、詩音に名月を付けておく意味はない。役立たずにサポートなんていらぬ。

それでも名月は、友人として詩音と一緒に居ようと思っていた。だけど、それも禁止された。

彼の祖父は、詩音がダメになった理由は周りの人間のせいだと激怒した。

彼の母もずいぶんと嫌がらせを受けたらしい。

そして名月に対しても、その怒りが向いた。

だが名月の家は、詩音の家に長く仕えている忠臣だ。

嫌がらせは受けなかった。

ただ、名月は詩音との接触を禁じられた。

そんなものは無視して会いに行けばいい。

最初はそう思っていた。

だが禁を破れば、家に迷惑がかかる。

他の家族への嫌がらせへと発展する可能性がある。

それに気づくと、もうなにもできなかつた。

「はあ……」

名月はため息をはいた。

暗い気持ちになつてしまった。

さつさと寝て忘れよう。

そう思つてふとんへと向かつたのだが。

ガラガラ！

勢いよく、部屋のふすまが開けられた。

やつてきたのは、名月の父だ。

「名月、ちよつと来なさい」

「えー、今から寝るとこなんだけど」

「いいから、来なさい」

いやいやながら父に付いて行く。

名月の家は和風の屋敷だ。

歩きたびに床がキシキシと音を立てる。

それは単に家が古いからではなく、侵入者に気づけるように作られたトラップだ。

家の人間は、常に一定のリズムで歩く。

そのため外部の人間がいれば、歩くリズムで分かる。

名月は部屋に連れていかれる。

机を挟んで父と向かい合つて座つた。

「私の知り合いが理事を務める大学に通わせてもらえることになった」

「え、私がつてこと？」

「そうだ」

「えー」

名月は面倒くさそうに声を上げた。

今さら大学に通うのは面倒だ。

「私もお前を甘やかしすぎた。お前は家を出て、一人暮らしをなさい」

「一人暮らし!?!」

「家賃も自分で稼ぎなさい」

「そんなの、安いアパートしか住めないじゃん!」

名月はブーブーと非難の声を上げる。

しかし名月に拒否権はないようだ。

「大学の場所を教える。早急に家探しを始めなさい」

「えー」

こうして、名月の快適ニートライフは終わりを告げた。

☆とある魔導士の野望

『ステラ・クロウリー』には夢がある。

「黒髪で中性的な顔をした美青年をエロトラップダンジョンにぶち込みたい!!」

ステラはおしゃれな喫茶店の中心でそう叫んだ。

勢いよく立ち上がったことで、彼女の黄金の糸のような髪と、キレイな白衣がはたらく。

周りの客がギョツとした目でステラを見る。

しかし、ステラ自身はなんら気にした様子もない。

むしろ同席の方が気にしている。

「ステラさん、周りの目を考えてくれない?」

紗耶はこめかみに血管を浮かべながら言った。

怒りで声が震えている。

「なんだ、こんなの可愛いものだろう? 私のひいおじいさんなんて、ち〇こに蝶ネクタ

イ結んで社交場に出たことがあるんだぞ?」

ステラはどこか自慢気に言った。

いや、自慢できる要素ありませんよ。

「なぜキミのようなド変態一家の血が続いているのか、不思議でならないわ」

「そりゃあ、魔法使いとして優秀だからさ」

ステラの一家は由緒正しき魔術師の家系だ。

まだ魔法なんてなかった時代。

彼女のひいおじいさんは魔術結社に所属していた。

その後、なんやかんやあつて結社内でドンパチやらかした。

結社を飛び出した彼は、セツ〇ス上等のイカレた教団を作ったり。

そのことで警察に怒られて、やっぱりドンパチやらかして。

なぜかK2に登頂したり、エジプトに行つてピラミッドの研究をして。

最終的に日本に流れ着いた。

ちやうどそのころ、日本にはダンジョンが出現し始めた。

彼女のひいおじいさんは、喜び勇んでダンジョンに潜った。

そして『スキル』を開発して、人々にダンジョンと戦う力を与えた。

「優秀だけど……」

実際にステラのひいおじいさんの功績は凄まじい。

ただし、それを帳消しにするほどの奇行も目立つ。

ステラ自身も、優秀な魔法使いであり、ダンジョンの研究者でもある。

「はあ、そんなことはどうでもいいの。クソトラップダンジョンってなんなの？」

「ああ、その話だったね」

そして、ステラは呪文を唱えるように言った。

「すべての男女は星である。ダンジョンとはその星々がみる夢なのだ」

「それは、キミのおばあさんの言葉よね？　ダンジョンは人の意識、文化によって生まれてるっていう」

「そうとも」

「なんの根拠もないんでしょう？」

「クソトラップダンジョンが根拠になるかもしれない」

「は？」

ステラはスマホを取り出して、テーブルに置く。

「クソトラップダンジョンはスマホによって生まれた」

「いや、意味が分からないわ」

「紗耶ちゃんは、芸術の歴史に興味はあるかい？」

「ないわ」

「私も門外漢だから詳しくはないけどね」

ステラはスマホを操作する。

次に見せてきたときには、その画面にはどこかで見たことがある彫刻や絵画が映って

いた。

「大昔。芸術と言えば、神々を描いたものか、あるいは王の偉大さを描いたものが評価された」

「神や王様、どうして？」

「芸術を評価するのが、権力者だったからさ。芸術とは権力者を飾り付けるためのツールだった」

再びステラはスマホを操作する。

今度もやはりどこかで見たことのある絵画。

しかし描かれているのは、ひまわりや落書きにも見える人の絵だ。

「だけど、民主化によって時代は変わった。神や王は絶対的なものではなくなった。芸術には多様性が生まれたんだ」

「だけど……とステラは続ける。」

「これだって、完全に民衆が評価を決めていたわけじゃない。『マスメディア』つまりは、新聞やテレビだね。彼らがフィルターとなって、民衆が何を見るべきかを決めていた」

ステラはコツコツとスマホを叩いた。

スマホの画面ではなく、スマホ自体を見せる。

「だがその時代も終わった。インターネットの普及によって、個人的にはスマホが大きい

いと思うよ。一人一台。誰でもどこでもネットに繋げる。スマホによって人とネットの距離はグッと近くなった」

ステラはSNSで『絵』と検索する。

そこに出てくるのは、絵画ではなくアニメチックなイラストだ。

「今では個人個人が、好きな芸術を評価できる。堅苦しい芸術よりも、かわいいイラストのほうが、分かりやすくして人気がでる」

芸術に関する話はひと段落したようだ。

ステラはゆっくりと紅茶のカップをかたむけた。

「それとダンジョンになんの関係があるのかしら？」

「私たちの文化は、夢は、鋭くとがっていつてるのさ」

ステラはカップを置いた。

「エコーチェンバー現象に聞き覚えは？」

「反響ってこと？」

「そうさ。SNSの普及によって私たちは同じ思想を持っている人たちとつながりやすくなった。同じ思想を持った人々はお互いに共感して、賛成して。つまりは反響して、さらにその思想を強くしていく」

小さな部屋で音が反響するように、同じ意見が帰ってくる。

お互いの思想が共鳴して、それは強く、強固に鳴り響く。

「そしてこれは『性癖』にも同じことが言えると思う」

「せ、性癖？」

「昔は珍しくて隠して当たり前だった性癖。だが現代ではSNSによって同じ性癖の間とつながれる。同じような性癖の人間が語り合い、さらにその性癖への執着が強くなっていく。やがて同じコミュニティ内に、一つの夢が生まれだす」

ステラは興奮して、ガバリと立ち上がった。

「そこから芽吹くのがクソトラップダンジョンさ！ 可愛い女の子や、かっこいい男の子への妄想。それを実現してくれる理想郷！」
アルカディア

ダン！

ステラはテーブルに手をつけて叫ぶ。

「つまりエロトラップダンジョンだって実現できる！ 私が幼いころに一度だけ会った。黒髪で中性的でどこか影のある少年、今は青年だろうけど！」

黒髪で中性的でどこか影のある青年。

いつたいていこのだれなんだ……。

ステラはぐへへと笑った。

口の端から少しだけよだれが垂れる。

青年がエロトラップダンジョンに入っている姿を妄想したのだ。

「彼をエロトラップダンジョンにぶち込んで、ぐちゃぐちゃにする夢だつて叶うんだよ
!!」

この後、ステラと紗耶は喫茶店から追い出されました。

未定

1話

まずは聞いて欲しい。

小峰詩音は女装が好きなのでも、女体化願望があるわけでもない。たとえ街のど真ん中で女装していても。

それには深い理由があるのだ。

ハルジオンに変身しているわけじゃない。

しっかりと詩音の姿だ。

黒いシャツ、グレーのロングスカート。

ネットで検索したところによると、『モード系ファッション?』に分類されるらしい。詳しくは知らない。

頭にはウィッグを被っていた。

ミディアムの紺色の髪。

毛先が内向きにカールしていて、女性らしさを際立てている。

いくらハルジオンで慣れてきてるとはいえ、これは違う。

生身の時は普通に男の子だ。

詩音は顔を赤くする。

「は、恥ずかしい……男だつてバレてないよね？」

詩音は街中にある、変な形をしたオブジェの前に立っていた。待ち合わせをしている女の子。

そうとしか見えない。

特に違和感はない。

なぜ詩音がこんなことをしているかと言うと、

「詩音先輩、お待たせしました」

やってきたのは華恋だ。

華恋は、詩音の格好を見回す。

「うん、良く似合ってますね」

ちなみに服を指定したのは華恋だ。

ネット通販で購入したものを、詩音の家に送った。

「ほんとに大丈夫？ 男だつてバレない？」

「大丈夫ですよ。ほら、行きましょう！」

華恋が腕に抱き着いてくる。

ハルジオンのときには、いくらでもされてる慣れた行為。だが詩音のときにされると、ドキツとする。

二人は恋人のようにくつつきながら歩く。

そもそも、なぜこんなことをしているかと言うと、

「あの、本当にこれでなんとかなるの？」

「大丈夫ですよ。私に彼女が居るって分かれば引き下がりますよ」

チラリと華恋は後ろを見て言った。

「ストーカーさんも」

あの日、詩音が指輪を渡した後。

華恋から『付き合ってほしい』と言われた。

その理由は簡単。

ストーカーだ。

華恋は数日前から誰かに付きまとわれているらしい。

相手は隠密行動ができるスキルを持っているようで、尻尾はつかめない。

しかし勇者の直観によって、誰かに付けられていることは分かる。

ストーカーは何か行動を起こしてくるわけじゃない。

ただ、華恋を見ているだけ。

だけどそれを放置するのも怖い。

そこで考えたのが恋人作戦だ。

恋人がいると分かれば、ストーカーは諦めて離れていく……かもしれない。

だが男性の恋人がいると分かったら、逆上されるかも。

そうでなくても、写真を撮られれば『カレン』が炎上する。

配信者活動は続けていけないだろう。

だから、女性の恋人を作り出すことにした。

「思っただけど、女の子の友だちにお願いしたら良かったんじゃないの？」

例えば『ハルジオン』とか。

むしろハルジオン状態のほうが、気分が楽だった。

『詩音』での女装はつらい。

「もー、友達にこんな迷惑なこと頼めないですよ！」

『詩音先輩なら良いですけど』と言外に言われてる気がした。

実際のところ、食事の恩義があるため断れなかった。

食事の代金を返済しなければいけない。

まさか代金が、こんなに高騰こうとうするとは思わなかった。

これがハイパーインフレーションか……。

詩音は物価の高騰になげく。

「それに、架空の女の子を作り出したほうが、万が一のときに安全でしょう？」

「……確かにそうかも」

それを言ったら、『ハルジオン』も架空の存在。

V t u b e r みたいなのだが、それを言うわけにもいかない。

「ほら、分かっただら行きますよ！」

「はい……」

華恋が引つ張ると、詩音はそれに付いて行くしかない。

よくしつけされた犬みたいなものだ。

「お昼には、ご飯を奢ってあげますから」

「飯。

そう言われると、詩音はパツと顔を明るくした。

マジで犬猫みたいな反応だ。

「なんでもいい？」

「良いですよ。好きな所に連れて行ってあげます」

「お寿司でもいい？」

華恋はドンと自分の胸を叩いた。

『任せておけ』つと言うように。

「回らないヤツでもいいですよ」

「回るやつの方がいいかな」

「……なんでですか？」

詩音は子供のころ、祖父に連れられてお寿司屋に行っていた。

もちろん、回らないヤツ。

しかし、好きなものを食べられるわけではない。

祖父が頼んだのと同じものを食べさせられていた。

だが老人と子供では舌が違う。

子供の詩音には、いまいち美味しさが分からなかった。

「そっちのほうが楽しいから」

飯野に回転寿司に連れて行ってもらったことがある。

ぐるぐると回るお寿司を眺めて、自分の好きなお寿司を取って食べるのは楽しかった。

詩音は、また行きたいと思っていた。

「なんか先輩って……安上がりですね」

華恋はあきれたような目を詩音に向けていた。



「な、なんでこんなところに来るのさ!？」

デパートの中。清潔感のある白っぽいお店。

そこには女性もの下着が並べられていた。

あつちを見ても、こつちを見ても。

目に入ってくる下着に、詩音は目をぐるぐるさせる。

なんだか見てはいけない物を見ている気分になる。

「先輩は入ったことないんですか?」

「あるわけないよ!？」

嘘である。

本当はハルジオンの下着を買うときにお世話になった。

店員の言われるがままに買ったただけだが。

「ボク、外で待ってるから」

「ダメです」

店の外に出ようとした詩音。

しかしその腕をガッと掴まれた。

勇者の力に、詩音ではかなわない。

岩のように重く感じる華恋。

そこから離れようと詩音は足を動かす。

しかしビクともしない。

山を引つ張っているようだ。

「今は女の子同士なんですから、一緒に選びましょう」

「無理だよ。ボクには何も分からないから」

「先輩の好みを言うだけで良いですよ」

「嫌だ。分からない！」

駄々っ子のように叫ぶ詩音。

しかし、華恋は子供の扱いがうまかった。

「お寿司」

「はい」

詩音はおとなしく華恋に従う。

猫にちゆる。詩音にお寿司。

簡単なものである。

「ほら、これなんてどうですか？」

華恋は上下組みの下着をとって、自分に当てる。

似合ってるかどうか判断しろ。

そう言うことなのだろうが……。

「うーん？ 可愛いと思うよ？」

詩音にはよく分からない。

とりあえず、てきとうに返事しておく。

「微妙な反応ですね……こっちはどうですか？」

その後も華恋は何着かの下着を当てる。

だが詩音には何度聞かれても判断できない。

華恋はあきれたように、ため息をはいた。

「はあ、分かりました。実際に着てみましょう」

「着てみるって……ここぞ!!」

「そこに試着室がありますから。店員さん」

華恋は店員に試着の了承を得た。

華恋が詩音の手を掴む。

引きずるように試着室の前に連れて行った。

「そこで待つててくださいね」

「え、いや」

試着室に入つていった華恋。

中からは布がこすれる音が聞こえてくる。

今、服を脱いでいるのだろう。

そして下着を変えて、詩音に見せるのか。

いや、なんで？

下着なんて自分の好きなのを買えばいいじゃないか！

詩音は心の中で叫ぶ。

後輩の女の子の下着姿を見るのは良くない。

倫理的に良くない。

しかもなんで、自分は女装しているんだ。

詩音はその状況に耐えられなくなつた。

「ボ、ボクはお店の外で待つてるから！」

「ちよつと先輩!？」

詩音はダツと店の外に飛び出した。

外の風景を見るとホツとする。

ダンジョンから出た時よりも安心したかもしれない。

だが、詩音の苦難は終わっていないかった。

「あなた、なにやってるの？」

聞きなれた声でした。

ギギギつと詩音は錆びついたロボットのよう顔を向ける。

「い、飯野」

こんな姿、見られたくなかった。

詩音は心の中でなげいた。

2 話

「詩音……よね？」

飯野は戸惑っているようだ。

女装した友人が、ランジェリーショップから飛び出してきたのだ。

そりゃあ戸惑うに決まってる。

「チガウヨ。ヒトチガイダヨ」

詩音はがくがくと喋る。

別人だと言ひ張れば、なんとかなるかもしれない。

「いや、さつき私の名前を呼んでたじゃないの」

「うぐう」

失敗した。

名前を呼んでいなければ、まだごまかしが利きいたかもしれないのに。

「なんで女装なんて——まさか!？」

飯野は何かを思いついたらしい。

顔から血の気が引いていく。

青ざめた顔で、ブツブツと呟き始めた。

「だとしたら、金欠のはずの詩音が指輪なんて買ってこれたのも説明がつく——！」
ガツと飯野は詩音の肩を掴む。

そして子供を叱るように。

「悪いことは言わないから、怪しい活動は止めなさい。今はまだ大丈夫かもしれないけど、悪い大人はいっぱい居るのよ。ごほんなら私があげるから」

「な、なに？ なんの話!？」

「ごまかそうとしないで、あなた——」

飯野は詩音の目をジツと見つめた。

そして、少し言いづらそうに。

「パパカツしてるんでしょ」

「していないよ!？」

飯野が詩音をギュツと抱きしめる。

子供をあやすように背中をなでた。

「いいのよ。もう無理しなくて。これからは私が何とかするから。だから変なおっさんの相手なんかしないで」

「誤解だつて!？」

飯野に離してもらおうともがく。

すると、首筋が燃えるような殺気を感じた。

「先輩、なんで私とのデート中に、他の女と抱き合ってるんですかあ？」

華恋だ。

下着を購入したらしく、小さな紙袋を持っている。

口元は笑っているが、目がガン開きだ。

「あ、あれ、華恋さん？」

飯野は華恋を見ておどろく。

華恋は詩音と同じ大学の後輩だ。

もちろん、飯野の後輩でもある。

なぜ女装した詩音と一緒にいるのか、戸惑っているようだ。

「お久しぶりです。飯野先輩。この間はありがとうございました」

そう言いながらも、ガツと詩音の腕を掴む。

そして勢いよく飯野から引き抜いた。

「詩音先輩は私と、デート、してるので。返していただきますね」

「で、デート？　なんで詩音と？」

飯野は、詩音と華恋の顔を見比べる。

飯野は二人の接点を知らない。

「いや、これには理由が——」

「詩音先輩、勝手に喋らないでください」

「はい」

詩音は強制的に黙らされる。

飯野は戸惑う。

しかし、しぶしぶ従っている詩音を見て、何かを感じたらしい。

「分かったわ。今日のところは詳しくは聞かない」

「ありがとうございます。飯野先輩」

飯野は『はあ』とため息をはいた。

詩音を見る。

その目は、ダメなペットを見るようだ。

呆れているが、優しい目。

「詩音のことだから、エサにでも釣られたんでしょうね」

ギョツと、華恋が腕を掴む力が強まった。

顔を見ると、笑顔がヒクついている。

凶星を突かれて動揺したのだろうか。

「じゃあね。詩音も、ちゃんと良い子にしているのよ」

そう言つて、立ち去つて行つた。

詩音と華恋は、それを見送る。

「なんであの人は飼ひ主みたいなこと言つてるんですかねー」

そう言つた華恋の声は震えている。

どこかトゲトゲしい感じだ。

「なんか、華恋ちゃん怒つてる?」

「ええー? なんで私が怒るんですかあー? さつさと行きますよ」

詩音の体が強引に引つ張られた。

やっぱり怒つてるよね。なんで?

詩音は混乱しながらも、引きずられていった。

○

「あ、ハンバーグ!」

ぐるぐると回る回転ずし。

詩音はハンバーグの乗つた寿司を見つけると、それをサツと取つた。

もぐもぐと食べる。

「あ、お肉！」

カルビ寿司を見つける。

サツと取ると、もぐもぐと食べる。

その様子を華恋は、ジトつとした目で見ていた。

「いや、魚食べましようよ。お寿司なんですから」

「そうだった……あ、ケーキ!!」

「魚は!？」

詩音はケーキの皿をテーブルに取った。

そして、少し申し訳なく、体を縮こませる。

「次にいつ流れてくるか分からないから……」

「流れてきますよ!？」　そもそも注文すればいいですよね!？」

華恋はレーンの上にある、特急レーンを指さす。

「え、電車呼んでいいの?」

「なんで、ダメだと思いませんか」

「あんまり使いすぎると渋滞するのかと思って」

「しませんよ……」

華恋はパネルに指を伸ばす。

いくら、サーモン、たまご。ついでにオレンジジュース。

キッズが好みそうなネタを選んで注文する。

少しすると、電車に乗って寿司が運ばれてきた。

詩音はすまし顔をして、それを見ている。

だが目はキラキラとしていた。

「こーやって運ばれてくるのって、なんとなく特別感があって良いよね！」

「フフ、そうですね」

内心はしゃいでる詩音。

それを見て華恋はクスリと笑った。

詩音はお寿司をテーブルに移して、もぐもぐと食べる。

その様子を華恋はジッと見つめていた。

「……ボクの顔に何かついてる?」

「いえ、違いますよ。ご飯粒とか付かないのは残念ですけど」

最後の方は、ぼそぼそとしていて、詩音には聞こえなかった。

「詩音先輩って楽しそうにご飯食べるんだなって」

「もちろん楽しいよ」

詩音はにこりと笑った。

普段は無表情か、困った顔が多い詩音には珍しい笑顔だった。

「華恋ちゃんと一緒だから」

華恋はハツと目を見開く。

じわじわと顔が赤くなっていた。

「な、なんですか急に！ 先輩にそんなこと言われても嬉しくないんですけど!？」

「え、ご、ごめん」

詩音はシユンとうつぶむいた。

華恋が慌てだす。

「あ、いや、違って、言い間違えました。嬉しいです」

「そっか、華恋ちゃんも楽しいんだね？」

「……そうですね」

華恋の返事には、なにか抵抗があるようだ。

嫌なわけではなさそうだが。

詩音は深く考えようとする。

それをさえぎるように『あー』と華恋が声を上げた。

「写真撮ってない。レアショットだったのに……先輩、もう一回笑ってください」

華恋はスマホを取り出す。

そして、詩音に向けて構えた。

「こ、こっとうかな？」

詩音は笑おうとしてみたが、その笑顔はぎこちない。作り物感がでている。

「ダメかあー。失敗したあ」

華恋はハアとため息をついた。

なんだったのだろうか。

詩音は首をかしげた。

3 話

お昼ご飯にお寿司を食べた後。

詩音と華恋は水族館に来ていた。

水族館を周っている途中。

「ちよつと離れますね。 退屈だったら先に行つていいですから」

華恋はそう言つて、詩音から離れて行つた。

トイレとかだろう。

『先に行つてもいい』

そうは言われたが、さすがに先に進むほど詩音も無神経ではなかった。

なかつたのだが……。

「うわー、くらげキレイだなー」

薄暗い照明。

その中で、淡く光るクラゲは幻想的な風景を作り出す

心が引き込まれる。

そうして見ていると、つい次の水槽を眺めてしまう。

そして次の水槽を、さらにその次を――

「……あれ？　ここどこ？」

気がつくと、よく分からない場所に流れ着いていた。

波に流されるクラゲみたいなやつである。

「いけない。早く戻らないと……」

このままでは華恋とはぐれてしまう。

急いで戻ろう。

詩音は踵を返したのだが。

「ちよつと、危ないわよ？」

危うく人にぶつかりそうになってしまった。

「あ、すいま――ッ！」

顔を見て驚いた。

そこに居たのは、紗耶だった。

ビクリと体がこわばった。

だが、まだ大丈夫だ。

詩音とバレたわけじゃない。

詩音たちは薄暗い通路に居る。

女装した詩音だと見破るのは難しいはずだ。

バレないうちに、さっさと行こう。

詩音はそう思ったのだが。

「す、すいませんでした——うわっ」

立ち止まった詩音たちを抜かそうとしたのだろう。

子供が走り出てきた。

それを避けようとして、詩音は体勢を崩す。

つい、親しい紗耶のほうに体を寄せてしまった。

「キミ、ちよつと落ち着きなさいよ」

紗耶の顔を見る。

最初は嫌そうな顔をしていた。

次に不思議そうに顔をかたむける。

そしてハツと目を見開く。

その顔は少しづつ赤く染まっていった。

「し、詩音じゃない!」

バレてしまった。

「どうしてそんな恰好しているの!? ま、まさか!」

紗耶は何か思いついたらしい。

飯野みたいにおかしなことを言いだすのではないかと、詩音は警戒する。

「わ、私の返事が遅いから、男のほうに走ろうとしているの!？」

「え、なに、何の話？」

紗耶は口に手を当てて、ぶつぶつと考え事を始める。

詩音にはよく聞こえない。

「詩音を狙う『腐敗者』どもは排除していたはずなのに。まさか、この一年のあいだに詩音に魔の手がおよんでいたの!? ツ!!? さては、あの飯野とかいう女……! 無害そうな顔をした『腐れ外道』だったわけね」

ドン!!

紗耶は詩音に壁ドンをキメる。

そして、そつと顔を近づけてきた。

「返事が遅くなつてごめんなさい。今はまだ問題があるのよ。それが解決したら返事をするから、それまで待っていて。そんな間違つた方向には進まないで。それと、これだけは伝えておくわ」

紗耶は顔を赤くする。

うるんだ瞳で詩音を見つめる。

そして、意を決したように呟いた。

「き、キミのことが好きだから」

そもそも、返事って何の話だろうか。

詩音の頭に疑問が浮かぶ。

だが好きだと言われるのは嬉しい。

また友人としてやり直せる。

「ボクも紗耶のことが好きだよ」

詩音はにこりと笑う。

また紗耶と遊べるのが楽しみだった。

高校時代には、たくさん奢ってもらった。

それを返せるぐらい、紗耶に贈り物をしようと詩音は決めている。

そのためにも頑張らなければ。

詩音は決意した。

「はっ」

紗耶からへなへなと力が抜けて行く。

詩音の胸に顔をうずめた。

「そ、そういうことを、面と向かって言わないでえ……」

最初に言ったのは紗耶なのに……。

詩音は理不尽を感じた。

「と、ともかく!」

紗耶が復活した。

「近いうちに返事はするから!」

そう言つて、紗耶は早歩きで行つてしまった。

「結局、返事つてなんなんだろう?」

詩音は首をかしげながらも、来た道に戻つていった。

道に戻ると、華恋がやつてきているのが見えた。

「せ、先輩……まさか本当に先に行くとは思いませんでしたよ……」

華恋はあきれたように詩音を見た。

そりやそうである。

「ご、ごめん。つい夢中になっちゃつて」

「はあ、仕方がな——」

なんだか許してもらえそうな雰囲気だ。

そう思えたのは一瞬だけだった。

「はっ。」

華恋の目が鋭く上がった。

「せんぱーい。なんで他の女の匂いがするんですかあ？」

それは甘えるような声だった。

しかし決して甘くない。

はちみつの中に、大量のハバネロをぶち込んだような異質さを感じる。

ガツと乱暴に腕に抱きつかれる。

「私をほったらかして、どこの雌猫とイチャついてたんですかねえ？」

返答を間違えたら腕をやられる。

そう詩音は直観する。

「い、いや。偶然、友だちと会っただけだよ」

「ふーん？」

明らかに信用していない声色だ。

本当の事なのに……。

詩音はしゅんとする。

その様子を見て、いちおう華恋も納得したようだ。

だがやはり不満そうである。

「……罰として、抱っこしてください」

そう言つて、華恋は手を広げてくる。

詩音はしぶしぶ華恋を抱き上げる。

米みたいに。

「ちつがいますよ！ 女の子が抱つこつて言つたら、お姫様抱つこでしょ!？」

「い、い、めん」

詩音は華恋を持ち直す。

華恋の希望通りの、お姫様抱つこだ。

少し顔を下げれば、そこには華恋がいる。

「こ、この状態で周るの?」

「当然じゃないですか」

「……重いんだけど」

バシン!

思いつきり頭をはたかれた。

4 話

「う、腕が痛い……」

「私はそんなに重くないんですけどー!」

水族館から出た後、詩音と華恋は帰り道を歩いていた。

あとは適当な所で別れる。

詩音は着替えをして帰るだけだ。

「先輩にはデリカシーがないですよ。思ったとしても、女の子に重いなんて言っちゃいけないんです」

「はい……」

女の子に重いと言ってはいけない。

詩音は一つ学びを得た。

だが学びを上手く使えるかは、その人しだい。

「華恋ちゃんは軽い女の子だね」

「せんぱーい? その言い方だと、私が遊んでる女みたいに聞こえるんですけど。むしろ愛は重いんですけど?」

「どう言っても怒るじゃん……」

そもそも体重に触れるな。

二人がワイワイと歩いていると、

「あれ、華恋ちゃん？」

「あ、虎こはく白はくちゃん！」

女性に声をかけられた。

身長は詩音より少し低い。女性の平均ぐらいだろう。

黒く長いストレートの髪に、白を基調とした服は清楚さを感じさせる。

しかし、大きく膨らんだ胸と、目元についた泣きぼくろが妖しい雰囲気演出していた。

彼女のことを華恋が紹介してくれた。

「他校の友だちなんですよ」

「二木根ふたぎね虎こはく白はくです。初めまして」

「あ、初めまして」

詩音と二木根は互いに頭を下げる。

友だちの友だちに会ったときは気まずい。

どこで他人の会話に入ったらいいのか分からなくなる。

とりあえず空気に徹しようとして詩音は決めた。

二木根は二人を見た。

詩音と華恋は腕を組んでいる。

その様子を見て、二木根は微笑んだ。

「ずいぶんと仲が良いんですね」

「私の彼女だよ。詩音ちゃんって言うの」

「ふふ、羨ましいですね」

二木根はジッと詩音を見つめる。

獲物を観察している蛇のような。

うすら寒さを背中に感じた。

顔に何かついているのだろうか。

しかし、すぐに視線は外された。

「それでは、デートの邪魔をしたらいけないですから、失礼しますね」

「うん。またね！」

特になんでもなかったらしい。

去り際に、詩音と二木根がすれ違う。

ぼそりと、ささやかれた気がした。

「ごちそうさまです」

○

「先輩、今日はありがとうございました」

最初に待ち合わせたオブジェの前。

華恋は儂く微笑んだ。

夕日が沈む。ゆつくりと夜が歩みを進める。

「ごちそうさあ、ありがとう。とても楽しかったよ」

お寿司を食べたし、水族館も行った。

詩音は大変満足していた。

「……詩音先輩は減点ですよ。デートしてるときに他の女の子とイチャつくなんて」

「そ、それは誤解だって……」

イチャついたつもりなんて無かった。

ただ二人とは偶然会って、軽く会話をしたただけだ。

詩音的には、そんな認識だった。

「そ、それよりもさ、ストーリーカーの気配は？」

そもそも、このデートの目的はそれだ。

だが華恋はそういえばそうだった、みたいな顔をしていた。

「あー、そういうえば途中から感じなくなりましたね」

「そっか、じゃあもう大丈夫かな」

正確なところは分からない。

だが華恋と詩音の姿を見て、諦めた可能性が高いだろう。

詩音は安心して、グツと体を伸ばす。

脇腹あたりの服をつかまれた。

振り向くと、華恋が見上げていた。

「また、デートしてくれませんか？」

その姿は迷子の子供のように見えた。

不安そうな、すがるように瞳をしている。

なんだかんだ、ストーカーが怖いのだろうか。

詩音はそう解釈した。

「うん。ボクで良ければいつでも呼んでよ」

食事の恩義もある。

ついでにご飯も奢ってもらえる。

ちよつとしたバイトみたいなものだ。

華恋はパツと笑った。

「じゃあ先輩、ちゃんと女装の練習もしててくださいよ？」

「やっぱ必要なの？」

「あたりまえじゃないですか」

華恋はにやにやと意地悪に笑う。

「次は何を着てもらおうかなー」

「なるべく男が着ても違和感がないやつにしてください……」

そうして、二人の初デートは無事に終わった。

5話

「なんか最近、見られてる気がする」

詩音は大学の廊下を歩いていった。

となりには飯野が居る。

「ストーカー？ 警察にでも相談する？」

「でも気のせいかなあ？」

「どっちなのよ……」

ふとした時に視線を感じる。

だがどこから見られているのかは分からない。

周囲を警戒しても、それらしい気配は感じず。

気がつくとも視線を感じなくなっている。

もしかしたら、華恋のストーカーかと思った。

だが、それならなぜ付け回すのだろうか。

逆上して襲い掛かってくるとか、写真をネットにばらまくとか。

もっと攻撃的な行動に出そうなものだ。

結果として『ただの気のせい？』と詩音は考えていた。

「ねえ、それってアレのせいじゃないの？」

飯野が指さす。

その先に居たのは。

「紗耶だ。なにしてるんだろう」

紗耶は壁に隠れるようにして詩音たちを見ていた。

詩音たちが視線を向けると、ひゅつと姿を隠す。

「かくれんぼかな？」

「そんなわけないでしょうが……」

じゃあ何をしているのだろうか。

詩音が首をかしげる。

「あ、こつち来たわよ」

カツカツと足音が鳴る。

紗耶が近づいてきた。

その顔は真っ赤だ。

少しうつむいて、慌てるように喋った。

「しししし、詩音くん。今日は私とお昼を食べましょう」

なるほど、紗耶が話しかけるタイミングをうかがっている視線だったのか。詩音はそう納得した。

そしてご飯のお誘いだが。

詩音はチラリと飯野を見る。

別に約束をしているわけではない。

だが時間が合うときは、いつも飯野と食べていた。

紗耶と食べるとなると、それを裏切ってしまうようで心苦しい。

「詩音くん。その女は危険よ」

「いきなり人のことを危険物扱いしないでください……」

紗耶はビシッと飯野を指さす。

探偵が犯人を当てるように。

「その女は、腐ってるの！ これ以上いっしょに居てはいけないわ！」

詩音は飯野を見た。

腐ってる？ どこが？

詩音がみる限りでは、飯野におかしなところはない。

「えっと、飯野は体の調子でも悪いの？」

「快調よ」

「じゃあ、ゾンビになったとか」

「だとしたら、こんなペラペラ喋れないわよ」

ならばどこが腐っているのだろうか。

詩音は紗耶を見る。

「その女はね。腐女子なのよ」

「ふじよし?」

「はあ!」

驚きの声を上げたのは飯野だ。

詩音は腐女子ってなんだろうと、飯野を見る。

「ち、違いますけど!?! そういう趣味を否定するつもりはないけど、私は違います!」

「どうかしらね。実は詩音くんでアレな妄想をしてるんじゃないの?」

「し、してませんよ! 私は夢女子派です!」

夢女子。

また知らない単語が出てきた。

詩音は後で検索してみようと決める。

「嘘を言わないで。あなたが詩音くんに女装させて喜んでいることは分かってるわ」

「は? 女装?」

「女装した詩音くんが、男と絡んでいるところを妄想して楽しんでいたのでしょ？」

紗耶は勝ち誇った顔で、飯野に叩きつけた。

だが飯野には効いていない。

深いため息をついて、こめかみを揉んだ。

「女装させていたのは、私じゃなくて華恋さんですよ」

「え？」

飯野から紗耶に説明される。

飯野には説明済みだった。

もちろん華恋から許可をとって。

華恋をストーカーらしき者が付け回していた。

それを追い払うために恋人のフリをした。

だが華恋の所属する事務所は異性との恋愛禁止。

それをごまかすために、詩音は女装をしていた。

「つ、つまり、私の勘違い？」

「そうですよ」

ぽかんと紗耶が口を開けた。

そして、

「う、うめんなさいいいい!!」

声を上げながら走り去ってしまった。

結局、何だったんだろうか。

詩音がよく分からないうちに、話は終わってしまった。

「ふ、私の勝ちね」

なぜか飯野は勝ち誇った顔をしていた。

第6話 地産地消NTR

「ちよつと安心感を憶えてる自分が怖い……」

ハルジオンは街中で待ち合わせをしていた。

待ち合わせの相手は紗耶だ。

もちろん、と言って良いのか分からないが女性物の服を着ている。

今回は紗耶セレクション。

パステルカラーの服装は、ゆめかわファッションと言うらしい。

詩音ではなくハルジオン状態なだけ気が楽だった。

末期である。

「待たせてしまったわね。ごめんなさい」

「いえ、ボクもさつき来たところですよ」

「それじゃあ、その辺のお店にでも入りましょうか」

やって来た紗耶と共に、近くのカフェに入った。

席に案内されて、メニューを開く。

(うっ……高いなあ……)

オシャレなカフェだが、値段はオシャレじゃない。

いや、むしろ高い方がオシャレなのだろうか。

ともかく、騙されて安物の指輪に全額をぶん投げたハルジオンには、辛い値段設定だ。

コーヒー一杯が限度だろう。

「どうしたの？ 難しい顔をして」

「い、いえ……『ちよつと高いなあ』と……」

「今日は私と呼んだのだから、好きなのを頼んでも良いわよ？」

「い、良いんですか!!」

「ほら、このケーキなんてどうかしら？ 生クリームがたっぷり入ってるわよ？」

「ほわあ……」

ハルジオンはケーキが好きだ。特に生クリームがたっぷり入ったやつ。

逆に和菓子系はあんまり。

実家で出されるのが和菓子系ばかりだったせいだ。

「それでお願います！」

「分かったわ。他にも食べたいものがあつたら、遠慮せずに言って？」

「は、はい」

ハルジオンは少し懐かしくなった。

高校時代は、放課後や休日にはよくこうして食事を奢ってもらっていた。いや、そんなことで懐かしさを感じるなよ。

とことんヒモ根性が染みついてしまっているハルジオンである。

注文後。しばらくして品物がやって来た。

ハルジオンはやって来たケーキにパクつく。

だが、紗耶は注文したパフェにスマホを構えていた。パシャパシャと写真を撮っている。

「SNSに上げるやつですか？」

「そうよ。投稿用のネタは少しでもストックしておかないといけないから」

「SNSって大変そうですね……」

紗耶は、動画配信よりもSNSへの投稿をメインに活動している。

配信活動とはまた違った苦労がありそうだ。

「大変だけど、現代において『発信力』は大事な武器になるから。少しでも研いでおいて損はないわ」

「武器、ですか？」

「ええ、気に入らない老害を社会的に叩き潰す武器になるわ」

紗耶の言葉には、なんとなく棘があった。

まるで仇敵への恨みをにじませるように。

「さて、写真はこんなもので良いわね」

紗耶が写真を撮り終わったときには、すでにハルジオンはケーキを食べ終わっていた。

紗耶はパフェを一口食べる。

「うん。甘いわね」

なんとも薄い感想だった。

もう一度、パフェをスプーンですくう。

今度はハルジオンにスプーンを向けた。

「はい。あーん」

「え、え!!」

食べて良いのだろうか、ここで食べたら間接キスだ。

それはちよつと気まずい。

だけど、ハルジオンはパフェが食べたかった。

「あら、食べないの?」

「た、食べます」

豆腐ほどの意思はあっさりとは砕けた。

差し出されたパフェに食いつく。

なんだか、五割増しで甘く感じる気がした。

「ふふ、どんどん食べて良いわよ。私はそんなに甘いものが好きなわけじゃないから」
ハルジオンも知っている。

高校時代からそうだった。

今だって紗耶が注文した飲み物はコーヒーマットのブラックだ。

だが、知らないフリをしておく。

「そうなんですか？」

「投稿のために注文するんだけど、食べきるのが大変な時もあるのよね」

ハルジオンは差し出されるパフェをパクパクと食べていく。

わざわざ紗耶がすすって食べさせているせいで、バカツプルみたいだった。

「あの、ところで相談ってなんでしようか？」

パフェの残りも少なくなったころ、ハルジオンが切りだした。

そもそも、ハルジオンが紗耶に呼ばれたのは、相談があると言われたからだ。

びくり。

紗耶のスプーンを差し出す手が止まった。

少しためらいながら口を開く。

「実はね……告白されたの」

「こ、告白ですか!! それって、プロポーズってことですか?」

「そうなるわ」

驚くハルジオン。

「ご存知の通り。告白した（と思われる）のはコイツ自身である。

「そ、それでね。その人に、良い返事をしようと思うの……」

紗耶はかき消えそうな声で呟いた。

真つ赤な顔をしてうつむいている。

普段の強気な彼女からは想像できないほど、乙女チックな仕草だ。

「そ、そうですね。紗耶さんは綺麗ですから、告白ぐらいされますよね……」

少しだけ、ハルジオンの心に煙がたかれた。

僅かな嫉妬心と、そこから出たモヤモヤだ。

（なんで、こんな気持ちになるんだろう。友だちが告白されたんだから、喜ぶべきなのに

……）

もう一度言うが、告白したのはコイツだ。

良い返事をされる予定なのもコイツだ。

地産地消NTR。

「それでね。彼に返事をするのに、なにかプレゼントをしようと思うの。そのプレゼント選びを手伝ってくれないかしら？」

「ボクが、ですか？」

「ええ、ハルさんと彼で共通するところが多いから……お願いできるっ？」

ハルジオンとして——詩音として、思う所が無いわけじゃない。

しかし友人の祝い事だ。自分にできる手伝いはしよう。

ハルジオンは力強くうなずいた。

「分かりました。ボクで良ければお手伝いします」

第7話 月の石

二人が最初にやって来たのは宝石店。

ビルの一階に出された店は、ガラス張りの窓によつて外から様子がうかがえる。

なんともキラキラとしたオシヤレオーラを纏っている。

こんな高級そうな宝石店にハルジオンは入ったことがない。

借りてきた猫のように周りを見渡しながら、紗耶の後ろに隠れて店に入る。

「いらつしやいませ。なにかお探しですか？」

入店したハルジオンたちの元に、サツと現れたのは女性店員だ。

店に負けず劣らずオシヤレなスーツを着込み、にこやかな笑顔を浮かべている。

ハルジオン一人ならそのオーラに消し飛ばされていただろうが、今回は紗耶が居る。

紗耶の影に隠れながら成り行きを見守った。

「男性へのプレゼントに指輪を買いに来ました」

「かしこまりました」

店員はにこやかな笑顔を保ちながらも、チラリとハルジオンを見た。

『男へのプレゼントなら、隣に居るこのキッズはなんなんだ』と不思議に思っているの

だろう。

もつともな疑問である。

「失礼でなければ、男性との関係をお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「……か、彼から告白されたので、その返事をするためです」

「おめでとうございます。とても素敵なお話ですね」

紗耶はバツが悪そうに答えていた。

告白された返事をするために指輪を買いに来た。

そんな乙女チックな行動が恥ずかしかったのだろう。

「それでは、お連れの方は？」

「彼の妹さんです。指輪を選ぶのを手伝って貰いたくて」

「なるほど、妹さんですか」

店員は納得したようにうんうんと頷く。

やはりハルジオンの存在が気になっていたらしい。

紗耶は上手く嘘をついて、ハルジオンが品物を選ぶのに自然な流れを作っていた。

「失礼ですが、お客様は学生の方でしょうか？」

「ええ、そうです」

「それでしたら、こちらの品物などがお勧めです」

店員に連れられたのは、店の隅のほう。

学生という事で比較的リーズナブルな価格の商品を勧めているのだろう。

それでも値段はバカ高い。ショーケースに広げられた商品には、万単位の値札が置かれていた。

「うわ、高い……！！」

思わずハルジオンの口から声が漏れ出た。

つい先日は騙されて、値段だけならもつと高いものを買っているのだがすっかり頭から抜け落ちているようだ。

「ふふ、大丈夫よ。私はこれでも稼いでいるから、あと桁が一つ増えても問題ないわ」

「はえ……」

紗耶の男気溢れる言葉に、ハルジオンの口から空気が漏れる。

圧倒的な財力の違いを見せつけられてしまった。

一方、それを聞いて店員は目つきを鋭くした。

ただの学生かと思った客が、思いのほか太客になりそうだと睨んだのだろう。

見た目は華やかでおしゃれな宝石店でも、中では血みどろの成績合戦が繰り広げられているのだ。

獲れる所からは獲りたいのである。

「よろしければ、こちらの商品も——」

「あつ……」

店員がもつと値段の張る商品へと誘導しようとした時だった。

ハルジオンの目がとある指輪に留まった。

キラキラと白金色に輝くリングに、青の混じった白い宝石が輝いている。

まるで星を閉じ込めたような宝石の輝きに、ハルジオンの目が奪われた。

「これなんか、どうでしょうか？」

「ホワイトゴールドにブルームーンストーンのリングね」

ハルジオンが指輪を指し示すと、紗耶は考えるように首をかしげた。

一方で店員は笑顔をこわばらせる。

なにせ、その指輪の値段は三万円にも届かない。せつかく余裕がありそうな客に売り

たい品物ではない。

もつと高い指輪を買ってもらえるはずなのだ。

「とてもお目が高いですね。ムーンストーンは恋愛成就の宝石としても知られていま

す。告白のお返事として相応しいでしょう。しかし、せつかくならこちらの商品はいま

がでしょうか？」

店員は別の指輪に手のひらを向けた。

ハルジオンが見つけた指輪よりも、大きなムーンストーンがあしらわれた指輪だ。

「こちらはプラチナのリングに、より大きなブルームーンストーン。さらに小さなダイヤをちりばめた指輪です。ダイヤがお二人の交際を祝福するようで素敵ではないでしょうか？」

「交際を祝福……悪くないわね」

店員が勧めた指輪の値段は十万を超えていた。

ホワイトゴールドよりも高いプラチナ。さらにリングの形もより複雑で値段が張る。ついでにダイヤが散りばめられているため、値段が三倍以上も膨れ上がっていた。

しかし値段が上がっていても、紗耶の反応は悪くない。これは買ったなど店員は内心でほくそ笑む。

「ううん……」

しかし、ハルジオンは微妙な顔である。

紗耶もそれに気づいたようだ。

「あら、こっちは微妙かしら？」

「あんまりごちゃごちゃしてるのは好きじゃない……ような気がするんですけどよね」

今回のプレゼント選びでは、ハルジオンの感性で素直に意見をして欲しいと頼まれている。

なので素直な気持ちを言わせて貰えば、店員の選んだ指輪は派手過ぎだ。

散りばめられたダイヤはもちろん、うにようによと不思議な形をしたリングも好きではない。

「それに、こっちの指輪が目に残ったのは理由があつて……」

「理由つてなにかしら？」

「この指輪を見た時に、なんとなく紗耶さんのことが思い浮かんだんです。飾らない宝石の輝きを見た時に、僕が憧れた強く優しい紗耶さんに似ている気がして……きつと、紗耶さんに似た指輪を贈って貰えたら嬉しいんじゃないかと思つたんです」

ハルジオンは上目遣いで紗耶を見つめる。

始めは見つめあつていた二人だが、紗耶は胸に手を当てると顔を真っ赤にしながらい目をそらした。

「そうね。これを買いますか……」

紗耶の言葉を聞いて、店員は悔しそうに頬を引きつらせた。

第8話 バカッブル

指輪を購入した後、ハルジオンたちは近くのショッピングモールへと来ていた。

目的地はモール内に出店されている高級菓子店だ。

紗耶は歩みを進めながら、ため息を吐いた。

「正直言うと、指輪よりもお菓子のほうが喜ばれそうなのよね……」

「あはは……食いしん坊な人なんですわね……」

苦笑いで答えるハルジオン。

お前のことである。

話をしながらフードコート隣の隣を通り過ぎようとしていたハルジオンたち。

しかし、ハルジオンの目がふとフードコートへと向いてしまった。

後輩からの餌付け以外では、その辺に生えている野草か、もやしや納豆などの格安食品で飢えをしのいでいるハルジオン。

だいたい何時も美味しいものに飢えている。

つい先刻にもカフェでスイーツを奢って貰ったばかりだが、ついクレープ店を見詰めてしまった。

「……食べたいのかしら？」

「え!! い、いえいえ、なんとなく目が行ってしまっただけです……」

紗耶に問われるが、ハルジオンはぶんぶんと首を振った。

勢いよく振ったせいで、ピンク色のツインテールが振り回される。

カフェで奢って貰ったように、ハルジオンには金が無い。

クレープを食べるとなったら奢ってもらうしかないが、流石に日に何度もご馳走になるわけにはいかない。

ヒモ根性が染みついているハルジオンだが、それはそれとして遠慮の気持ちが無いわけでは無い。

「そう……私は食べたいから買いに行っても良いかしら？」

「え? は、はい。もちろんです」

紗耶が自分から甘いものを買に行くなんて珍しいことだ。

少なくとも、高校時代なら数えるほどしかなかっただろう。

どういった風の吹き回しかと首をかしげながら、ハルジオンは紗耶の後に続いた。

食事時からは少しズレた時間のため、紗耶はあっさりとレジにたどり着いた。

ちらりとメニューを見ると、迷わずに注文をする。

「ストロベリークレープを一つお願いします」

クレープと言ったら苺^{いちじ}である。

バナナやチョコソースなども美味しいが、やはり王道は苺にストロベリーソースのかかったシンプルな物が一番だ。

少なくともハルジオンはそう思っていた。

高校時代に紗耶とクレープを食べるときなどは、そればかり注文していた。

注文からほどなくして、焼きたての生地に包まれたクレープが紗耶に手渡される。

甘い匂いが鼻をくすぐる。ハルジオンはよだれが出そうになるのをこらえて、クレープから目を離した。

羨ましそうな眼を向けていたら、紗耶が食べづらくなってしまう。

「ハルさん。あーん」

「え、なんでですか?」

などと思っていたら、ハルジオンの目の前にクレープが差し出された。

どうやら紗耶が気をつかって買ってしてくれたらしい。

しかし、ここで食べるのはなんだか申し訳ない。奢ってもらってばかりで、まるで紗耶にたかっているようだ。

ハルジオンはギョツと目をつむって顔をそむけた。

「いえ、受け取れません! 紗耶さんが食べてください!」

「ふふ、強がつてる顔も可愛いわね」

「ふにゃ!?!」

紗耶は愉しそうに笑うと、そつとハルジオンの首筋を撫でた。

驚きのあまりハルジオンが声を上げると、ぽかんと開いた口にクレープが差し込まれる。

「——むぐ!?!」

うっかりクレープをかじってしまった。

まさか吐き出すわけにもいかないため、ハルジオンはおもぐもぐと口を動かす。

甘酸っぱい苺と生クリームがマッチしていて、とても美味しい。

「うう……美味しいです……」

「それは良かった。それじゃあ、大人しくクレープを受け取ってくれるかしら?」

「……はい」

ハルジオンは渡されたクレープを大人しく受け取る。

微かな意地はクレープの美味しさに打ち砕かれた。

「やっぱりと似てるわね。物欲しそうな顔をされると、つかまいたくなる」

ほそりと呟いた紗耶。

しかし、その言葉はクレープの甘さにとろけていたハルジオンには届かなかった。